THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES KUMAMOTO UNIVERSITY/2001

8

熊本大学埋蔵文化財調査室年報　2001年度

2002　熊本大学埋蔵文化財調査室

THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES

KUMAMOTO UNIVERSITY/2001

8

熊本大学埋蔵文化財調査室年報　2001年度

2002　熊本大学埋蔵文化財調査室

序　文

熊本大学は、熊本医科大学、第五高等学校、熊本工業専門学校、熊本薬学専門学校及び熊本師範学校・同青年師範学校が統合再編され、一国立大学として1949（昭和24）年に創設された。これらの機関が所在するキャンパスが大学の施設に転用され１ヶ所に統合されることなく今日に至っている。したがって、熊本大学のキャンパスは熊本市内外の８地区に点在している。そして、これらキャンパスのすべてが埋蔵文化財包蔵地に指定されている。

一方、創設以来半世紀余を経た建物の多くが耐用年数を超え老朽化している。また、本学は現地再開発を選択したので、建家の更新や新築に伴い埋蔵文化財の調査が不可欠である。本学では、埋蔵文化財を発掘調査し、文化財を保存すると共に調査の成果を研究に資することを目的とした埋蔵文化財調査室と埋蔵文化財調査委員会を設置し、年度ごとに鋭意調査研究を展開してきた。本年報は平成13年度内に実施された調査研究の成果をとりまとめたものである。

医学部総合研究棟及び附属病院棟の建設をはじめ各キャンパスの再開発の進行に伴って、平成13年度の調査は従来になく多岐にわたり、今後の考古学研究にも貴重な資料となりうる数々の成果が得られた。調査研究の成果は本年報に詳述されているが、本荘北地区の医学部附属病院敷地の調査結果は特に興味深く重要なものであった。2200年前まで辿り得る熊本では２例目の環濠が確認されたのをはじめ、弥生時代から古墳時代を経て奈良・平安時代に至る継続的な集落の遺跡は、予想をはるかに超える大規模なものであることが明らかとなり、今後の研究に重要な手掛かりを与えるものであることが確認された。加えて、調査された他地区からも数々の貴重な調査結果が得られている。

本調査は熊本大学のキャンパスの全てが埋蔵文化財包蔵地に指定されているが故に義務付けられたものではあるが、埋蔵文化財調査室及び同調査委員会は学術的な立場から真摯に調査研究を展開し、考古学上高く評価され得る成果を収めた。埋蔵文化財調査室長、甲元眞之文学部教授及び同調査委員会委員長、北野隆工学部教授をはじめ調査に当たられた教職員、大学院生、協力者各位のご努力に深く敬服し感謝すると共に、本調査結果が今後の考古学研究に十分活用されることを期待する。

2002年３月

熊本大学

学　長　江口吾朗

例　言

1. 本書は熊本大学構内において，2001年４月１日から2002年３月31日まで行われた埋蔵文化財の調査および熊本大学埋蔵文化財調査室の活動内容に関する年次報告書である．
2. 構内遺跡の調査は，昨年度に引き続き，年次と調査順を表す調査番号で表すこととし，出土遺物や記録類もこの番号で整理・管理している．
3. 遺跡略号は，地区ごとにローマ字２～３文字で以下のように表記した．黒髪町遺跡黒髪南地区（KKS），同北地区（KKN），本庄遺跡医学部構内（HJM），同病院構内（HJH），同医療技術短期大学部構内（KHJ），京町台遺跡教育学部附属小中学校構内（KMS），出水国府跡薬学部構内（HJP）．
4. 遺物への注記は，遺跡略号＋調査番号＋出土遺構（位置）の順で行った．
5. 本書に掲載した遺物やその他の出土遺物および調査にかかわる記録類はすべて熊本大学埋蔵文化財調査室にて保管している．
6. 本書で使用した遺構実測図は，小畑弘己・大坪志子をはじめとする調査参加者が，遺物実測は小畑・大坪・泗水直子・溜渕俊子・林田恵子・早田咲百合・冨永明子・河合章行・檀　佳克が，製図は大坪・小畑・冨永が行った．
7. なお，遺構実測には手書きによる記録とともに遺跡調査汎用システム（カタタ Ver. 3―アーケオテクノ社）を使用した．
8. 本書の執筆は，表１・2，付篇１・２および抄録を冨永が，Ⅱ―１・２を小畑が，第Ⅰ章・Ⅱ―３・第Ⅲ章・英文サマリーを小畑・大坪が，ハングル文については小畑が行なった．
9. 本書の編集は，甲元室長の指導のもと大坪が行った．

目　次

＜本文目次＞

第Ⅰ章　本年度の調査概要 ―― 1
第Ⅱ章　発掘調査 ―― 5
Ⅱ－1　0101調査地点 ―― 5
1. 遺跡の立地と周辺地形 ―― 5
2. 調査の概要 ―― 5
3. 調査の結果 ―― 5
a　基本層序 ―― 5
b　検出遺構と遺物 ―― 10
＜畑址＞ ―― 10
＜土壙墓＞ ―― 10
＜竪穴住居址＞ ―― 10
古代の竪穴住居址 ―― 10
古墳時代の竪穴住居址 ―― 10
＜溝・水溜状遺構＞ ―― 10
＜その他の遺物＞ ―― 12
4. 成果と問題点 ―― 12
Ⅱ－2　0102調査地点 ―― 13
1. 遺跡の立地と周辺地形 ―― 13
2. 調査の概要 ―― 13
3. 調査の結果 ―― 13
a　基本層序 ―― 13
b　検出遺構と遺物 ―― 15
＜防空壕＞ ―― 15
＜風倒木痕＞ ―― 15
＜その他の遺物＞ ―― 16
4. 成果と問題点 ―― 16
Ⅱ－3　0104調査地点 ―― 17
1. 遺跡の立地と周辺地形 ―― 17
2. 調査の概要 ―― 17
3. 調査の結果 ―― 17
a　基本層序 ―― 17
b　検出遺構と遺物 ―― 19
＜溝＞ ―― 19
弥生時代の溝 ―― 19
古墳時代の溝 ―― 20
古代の溝 ―― 21
＜竪穴住居址＞ ―― 24
古墳時代の竪穴住居址 ―― 24
古代の竪穴住居址 ―― 28
＜掘立柱建物＞ ―― 29
＜井戸＞ ―― 30
＜その他の遺物＞ ―― 30
4. 成果と問題点 ―― 31
第Ⅲ章　立会・試掘調査 ―― 37
Ⅲ－1　黒髪北地区 ―― 37
1. 大学教育研究センター等改修工事に伴う立会調査（0106）―― 37
2. キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0109）―― 37
3. 食堂南側テラス整備工事に伴う立会調査（0112）―― 37
Ⅲ－2　黒髪南地区 ―― 40
1. 基幹・環境整備に伴う試掘調査（0102）― 40
2. 理学部2号館南側排水工事に伴う立会調査（0115）―― 40
3. 基幹・環境整備に伴う立会調査（0118）― 40
Ⅲ－3　本荘北地区 ―― 41
1. （医病）キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0114）―― 41
2. 基幹・環境整備（A～D地区ボイラー設備更新等）に伴う立会調査（0116）―― 41
3. 医学部総合研究棟新営機械設備工事に伴う立会調査（0117）―― 41
4. 医学部総合研究棟周辺環境整備工事に伴う立会調査（0120）―― 42
5. 附属病院西病棟新営工事（仕上Ⅱ）に伴う立会調査（0121）―― 42
6. 附属病院西病棟電気設備工事（仕上Ⅱ）に伴う立会調査（0122）―― 42
Ⅲ－4　本荘南地区 ―― 42
1. 中地区医学部キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0111）―― 42
Ⅲ－5　京町地区 ―― 43
1. 京町団地高圧ケーブル改修工事に伴う立会調査（0103）―― 43
2. 京町団地正門取設工事に伴う立会調査（0105）―― 44
3. 京町団地キャンパスネットワークその他工事に伴う立会調査（0108）―― 44
Ⅲ－6　九品寺地区 ―― 45
1. 南地区医療技術短期大学キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0113）―― 45

Ⅲ－7　薬学部地区 ―― 46
1. 大江団地薬学部共同実験棟改修工事に伴う立会調査（0107）―― 46
2. 薬学部キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0110）―― 46
跋文 ―― 47
Summary ―― 48
付篇 ―― 49
報告書抄録 ―― 53

＜挿図目次＞

図１　黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図（1/25000）―― 2
図２　0101調査地点の基本土層図（1/50）―― 5
図３　本荘北地区における調査地点配置図（1/2000）―― 6
図４　0101調査地点Ⅰ面遺構配置図（1/250）―― 7
図５　0101調査地点Ⅱ面遺構配置図（1/250）―― 8
図６　0101調査地点Ⅲ面遺構配置図（1/250）―― 9
図７　23・72号土壙墓および出土遺物実測図（1/20・1/3）―― 11
図８　各遺構および包含層出土遺物実測図（1/4・1/3）―― 12
図９　黒髪南地区における調査地点配置図（1/2000）―― 14
図10　0102地点遺構配置図（1/200）―― 15
図11　１号風倒木痕および各遺構出土遺物実測図（1/50・1/3）―― 16
図12　Ⅰ区南壁土層断面図（1/50）―― 17
図13　0104調査地点遺構配置図（1/400）―― 18
図14　125号溝出土遺物実測図（1/3）―― 19
図15　30号溝・土層断面実測図（1/50）―― 20
図16　30号溝出土遺物実測図（1/4）―― 21
図17　222号溝・土層断面・出土遺物実測図（1/50・1/4）―― 22
図18　222号溝出土遺物実測図（1/4）―― 23
図19　208号竪穴住居址・出土遺物実測図（1/50・1/4）―― 24
図20　223号竪穴住居址実測図（1/50）―― 25
図21　223・378号竪穴住居址出土遺物実測図（1/4）―― 26
図22　404号竪穴住居址・出土遺物実測図（1/50・ 1/4）―― 27
図23　９号竪穴住居址実測図（1/50）―― 28
図24　１号掘立柱建物・144号柱穴・出土遺物実測図（1/50・1/20・1/4）―― 30
図25　379号井戸・出土遺物実測図（1/40・1/4）―― 31
図26　その他の出土遺物実測図（1/4・2/3・1/1・1/3）―― 32
図27　黒髪北地区西半における調査地点配置図（1/2000）―― 38
図28　黒髪北地区東半における調査地点配置図（1/2000）―― 39
図29　本荘南地区における調査地点配置図（1/2000）―― 43
図30　京町地区における調査地点配置図（1/3000）―― 44
図31　九品寺地区における調査地点配置図（1/2000）―― 45
図32　薬学部地区における調査地点配置図（1/2000）―― 46

＜写真目次＞

写真１　Ⅱ面畑址（西より）―― 11
写真２　Ⅲ面全景（上空より）―― 11
写真３　23号土壙墓出土人骨および副葬品（南東より）―― 12
写真４　22号竪穴住居址全景（南東より）―― 12
写真５　0102地点全景（上空より）―― 13
写真６　125号溝（南東より）―― 33
写真７　30号溝遺物出土状況（北東より）―― 33
写真８　14号溝（北西より）―― 33
写真９　222号溝（北西より）―― 33
写真10　222号溝遺物出土状況（南西より）―― 34
写真11　365号溝（東より）―― 34
写真12　208号竪穴住居址（東南より）―― 34
写真13　223号竪穴住居址遺物出土状況（北東より）―― 34
写真14　361号竪穴住居址・379号井戸（北より）―― 34
写真15　378号竪穴住居址（東より）―― 34
写真16　404号竪穴住居址遺物出土状況（北東より）―― 35
写真17　９号竪穴住居址（南より）―― 35
写真18　９号竪穴住居址内破鏡出土状況（南より）―― 35
写真19　29号竪穴住居址（西より）―― 35
写真20　31号竪穴住居址（南東より）―― 35
写真21　32号竪穴住居址（南西より）―― 35
写真22　161号竪穴住居址（南東より）―― 36
写真23　216号竪穴住居址（南西より）―― 36

写真24　400号竪穴住居址（東より）―――――― 36
写真25　１号掘立柱建物（南より）―――――― 36
写真26　144号柱穴内地鎮具（北より）―――――― 36
写真27　379号井戸土層断面（東より）―――――― 36
写真28　外灯基礎坑（Ｐ１）土層（西より）――――― 37
写真29　掘削状況（南西より）―――――― 37
写真30　排水管掘削部土層（南より）―――――― 40
写真31　排水管人孔掘削坑土層（北より）―――――― 40
写真32　配管掘削部土層（北より）―――――― 41
写真33　電気配管部２区土層（南より）―――――― 41
写真34　竪穴住居址検出状況（北より）―――――― 41
写真35　柱基礎石検出状況（南より）―――――― 42
写真36　配線掘削部土層（南より）―――――― 43
写真37　掘削風景（東より）―――――― 44

＜表目次＞

表１　熊本大学敷地埋蔵文化財包蔵地指定一覧 ―― 1
表２　2001年度調査一覧 ―――――― 3

第Ⅰ章　本年度の調査概要

本年度の埋蔵文化財の調査は，表２にあるように，発掘調査４件，立会調査18件，試掘調査１件であった．

本年度の事業は，表２の調査面積からも分かるように，大規模な建設事業があり，4月から10月まで発掘調査を行い，本調査の合間や調査後に立会調査を行ってきた．この結果，旧来の知見を確認するとともに，新たに重要な成果を得ることができた．

本年度の主な調査は大学病院敷地である本荘北地区において実施された．発掘調査４件のうち，3件は本地区で実施された．いずれも大学病院敷地内の白川沿いの地点であり，これらの地域に良好な遺構群が残っていることが明らかにされた．

最初に行った発掘調査は本荘北地区における総合研究棟建設に伴う調査である（0101）．本地点では近世の畑址や土壙墓を初め，古代の河川跡や水路，住居址，さらに古墳時代の竪穴住居を検出した．近世期の耕作化のために，地形が削平されていたものの，古代・古墳時代の遺構は白川方向へ行くにしたがい数が増加しており，遺跡立地のあり方や時期的な変遷を考える上できわめて興味深い調査結果を得ることができた．

黒髪南地区における基幹環境整備事業では国道57号線に隣接する北西部の一角を発掘調査した（0102）．旧運動場として利用されていたため，削平を受けており，先史・古代の遺構は残っていなかった．しかし，風倒木痕の中から縄文時代早期・晩期の土器片が出土し，道路を隔てた9802地点で把握された縄文時代早期の包含層と併せて，この遺跡西北側一帯に縄文時代早期の包含層が良好に残存することを裏付ける成果となった．

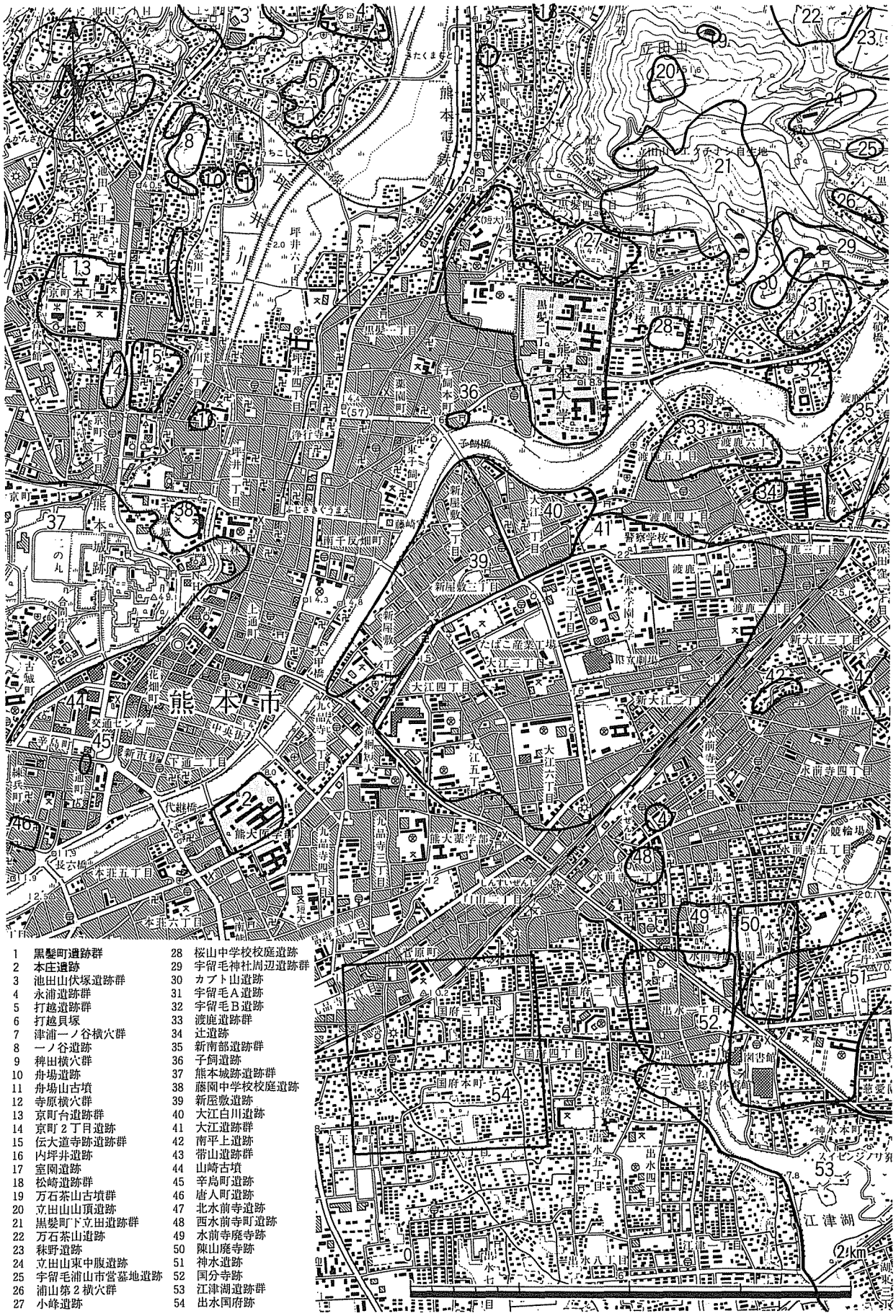
本荘北地区における共同溝設置に伴う調査地点（0104）は，先の0101地点から西側に50ｍほど離れた地点であり，同様に敷地内でも白川沿いに相当する．本調査区は大学病院の敷地のほぼ中央部から西端にかけて東西に長く延びるものであったため，0101地点の状況と併せて一帯の地形の状況を知る上でも有益であった．地形的には北東部から南西部にかけてわずかではあるが傾斜していることが明らかになった．

昨年度実施した0006調査地点においても，遺構や遺物が非常に豊富で且つ良好な状態で遺存していることが確認され，今回の共同溝本体工事による調査でも密な遺構・遺物が検出されることが予想されていた．今回の調

表１　熊本大学敷地埋蔵文化財包蔵地指定一覧（アミ部分は本年度調査した地区を示す）

No.	地区名（学部名）	所在地	遺跡名称	遺跡の種類	遺跡の時代	備　考
1	黒髪北地区（法・文・教・大教センター） 黒髪北地区（教育学部附属養護学校）	熊本市黒髪２丁目40－1 熊本市黒髪５丁目17－1	黒髪町遺跡	集落址	縄文・弥生・奈良・平安	
2	黒髪南地区（工・理）	熊本市黒髪２丁目39－1	黒髪町遺跡	集落址	縄文・弥生・奈良・平安	
3	京町地区（教育学部附属小・中学校）	熊本市京町本丁5－12	京町台遺跡	集落址	弥生・近世	
4	城東地区（教育学部附属幼稚園）	熊本市城東5－9	熊本城址	城館址・熊本城関連遺構	近世	
5	教育学部新南部農場	熊本市新南部居屋敷240－1	新南部遺跡	散布地	縄文・弥生	
6	理学部臨海実験所	天草郡松島町大字会津6061	前島貝塚	集落址	縄文・弥生	1995年度の調査によって貝塚でないことが判明
7	本荘南地区（医）	熊本市本荘２丁目2－1	本庄遺跡	散布地・集落址	縄文・弥生・奈良・平安・中世	
8	本荘北地区（医学部附属病院）	熊本市本荘１丁目1－1	本庄遺跡（熊大病院敷地遺跡）	散布地・集落址・墓地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近代	
9	九品寺地区（医療技術短期大学部）	熊本市九品寺４丁目24－1	本庄遺跡	散布地・集落址	縄文・弥生・奈良・平安・中世	周辺遺跡
10	薬学部（薬）	熊本市大江本町5－1	出水国府跡	官衙址	奈良・平安	周辺遺跡
11	大江地区	熊本市渡鹿４丁目1－1	大江遺跡	集落址	奈良・平安	

図１　黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図（1/25000）



1　黒髪町遺跡群
2　本庄遺跡
3　池田山伏塚遺跡群
4　永浦遺跡群
5　打越遺跡群
6　打越貝塚
7　津浦一ノ谷横穴群
8　一ノ谷遺跡
9　稗田横穴群
10　舟場遺跡
11　舟場山古墳
12　寺原横穴群
13　京町台遺跡群
14　京町２丁目遺跡
15　伝大道寺跡遺跡群
16　内坪井遺跡
17　室岡遺跡
18　松崎遺跡群
19　万石茶山古墳群
20　立出山山頂遺跡
21　黒髪町下立田遺跡群
22　万石茶山遺跡
23　秣野遺跡
24　立出山東中腹遺跡
25　宇留毛浦山市営墓地遺跡
26　浦山第２横穴群
27　小峰遺跡
28　桜山中学校校庭遺跡
29　宇留毛神社周辺遺跡群
30　カブト山遺跡
31　宇留毛Ａ遺跡
32　宇留毛Ｂ遺跡
33　渡鹿遺跡群
34　辻遺跡
35　新南部遺跡群
36　子飼遺跡
37　熊本城跡遺跡群
38　藤岡中学校校庭遺跡
39　新屋敷遺跡
40　大江白川遺跡
41　大江遺跡群
42　南平上遺跡
43　帯山遺跡群
44　山崎古墳
45　辛島町遺跡
46　唐人町遺跡
47　北水前寺遺跡
48　西水前寺町遺跡
49　水前寺廃寺跡
50　陳山廃寺跡
51　神水遺跡
52　国分寺跡
53　江津湖遺跡群
54　出水国府跡

表２　2001年度調査一覧

調査期日	調査番号	地点名	調査の種類	調査面積	時代	遺構・遺物
01・4・9～7・3	0101	（医病）医学部総合研究棟新営工事	発掘調査	1,733.75㎡	古墳・古代 近世・近代	住居址・溝・畑址・墓 鉄鏃・土師器・須恵器
01・5・14	0102	黒髪団地南地区基幹・環境整備	試掘調査	4.8㎡		
01・5・14	0103	京町団地高圧ケーブル改修工事	立会調査	59.5㎡		遺構・遺物なし
01・7・9～7・26	0102	黒髪団地南地区基幹・環境整備	発掘調査	418.5㎡	縄文	縄文土器・寛永通宝 風倒木痕・防空壕
01・7・4～10・29	0104	（医病）基幹・環境整備（共同溝設置）	発掘調査	1,023.8㎡	縄文・弥生 古墳・古代	住居址・溝・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・鉄鏃・青銅器
01・7・13	0105	京町団地正門取設工事	立会調査	7.12㎡		遺構・遺物なし
01・7・30～11・14	0106	黒髪団地北地区大学教育研究センター等改修工事	立会調査	3,907㎡		遺構・遺物なし
01・7・31	0107	大江団地薬学部共同実験棟改修工事	立会調査	97.84㎡		遺構・遺物なし
01・8・1，8・13	0108	京町団地キャンパス情報ネットワークその他工事	立会調査	25㎡		遺構・遺物なし
01・8・2，8・21	0109	黒髪団地北地区キャンパス情報ネットワークその他工事	立会調査	58㎡		遺構・遺物なし
01・8・27	0110	大江団地薬学部キャンパス情報ネットワークその他工事	立会調査	20㎡		遺構・遺物なし
01・9・4	0111	本荘団地中地区医学部キャンパス情報ネットワークその他工事	立会調査	2.78㎡		遺構・遺物なし
01・8・22，9・4	0112	黒髪団地北地区食堂南側テラス整備工事	立会調査	662㎡		遺構・遺物なし
01・9・14，10・1	0113	本荘団地南地区医療技術短期大学キャンパス情報ネットワークその他工事	立会調査	105㎡		遺構・遺物なし
01・9・17	0114	本荘団地北地区（医病）キャンパス情報ネットワークその他工事	立会調査	38㎡		遺構・遺物なし
01・10・19	0115	黒髪団地南地区理学部２号館南側排水工事	立会調査	8.4㎡		遺構・遺物なし
01・10・22～02・2・19	0116	（医病）基幹・環境整備（A～D地区・ボイラー設備更新等）	立会調査	426.4㎡		遺構・遺物なし
01・12・8～02・2・9	0117	（医病）医学部総合研究棟新営機械設備工事	立会調査	133.1㎡	古代	住居址・柱基礎 土師器・須恵器
01・12・12～02・2・4	0118	黒髪団地南地区基幹・環境整備（特高受変電設備等・植栽その他）	立会調査	111.7㎡		遺構・遺物なし
02・2・25～3・20	0119	（医病）医療用ガス供給設備室取設工事	発掘調査	205.8㎡	縄文・古墳 古代	住居址・溝・掘立柱建物址・縄文土器・土師器・須恵器・鉄鏃
02・3・18	0120	（医病）総合研究棟周辺環境整備工事	立会調査	1,492.7㎡		遺構・遺物なし
02・3・18	0121	（医病）附属病院西病棟（仕上Ⅱ）新営工事	立会調査	1,076.4㎡		溝？・遺物なし
02・3・22	0122	（医病）附属病院西病棟電気設備工事（仕上Ⅱ）	立会調査	54㎡		遺構・遺物なし

査では，9901調査地点と同様に古墳時代・古代を中心とする住居址や溝が多数確認された．遺物も遺構ごとに種類や量的にもまとまったものが多いなど，遺存状態はきわめて良好である．また，様々な食物残滓を廃棄した古代の井戸が１基検出され，これまで調査室が実施した既往の調査でははじめての例となった．残滓については鋭意分析中であるが，古代の食生活を知る上で興味深いものである．また，付近一帯では初めて弥生時代前期の溝を検出した．この時期の集落の様相はまだ判然としないが，これが環濠であれば，この遺跡の北側一帯で住居などの他の生活遺構が発見される可能性もあり，今後の調査が期待される．

この0104調査地点のＩ区に接する現在調査中の0119調査地点でも，0006調査地点と同様に古代の住居址や0104調査地点から延びる古墳時代前期の溝を検出している．

これらの様相から，本庄遺跡の遺構の分布は，白川に近くなるほど密になっており，またさらに北に広がるものと予想される．

この他，立会調査は黒髪北地区の大学教育研究センター改修工事や全地区で実施されたキャンパスネットワーク工事，大学病院内での基幹・環境整備に伴う工事，西病棟新営工事，総合研究棟新営工事に伴う諸工事関連など，規模・数量ともに例年になく多かった．

第Ⅱ章　発掘調査

Ⅱ—1　0101調査地点

1. 遺跡の立地と周辺地形

本地点は白川左岸河岸堤防上に位置する本庄遺跡内にある．調査地点の標高は13mである．本地点周辺では既往の調査により古墳時代前期～古代にかけての集落址および古代の寺院址などが確認されている．

2. 調査の概要

本調査地点は，医学部総合研究棟新営工事に伴って発掘調査を行った．周辺の調査結果から，遺構検出面が地表下70cm前後で検出されることが予想されるため，重機による1次掘削は－75cmの深さで実施した．1次掘削の終了を待って，4月9日より埋蔵文化財の調査を実施した．1次掘削の結果，調査区を取り囲むように以前の建物の基礎址が巡っており，その部分を避けて内部を調査した．

本調査地点の性格もほぼ既往の調査結果と似た状況を示すが，本地点は大学病院内を流れる小河川沿いに位置するため，若干他地点と様相を異にしている．それは，本地点の南側を中心とした部分に近世～近代の畑址が広がっている点である．これらは時期的には厳密に規定できないが，おそらく18世紀～19世紀ごろのものと考えられる（Ⅰ・Ⅱ面）．中世以前の遺構構築面（とくに北側）はこの近世の耕地造営に伴ない削平を受けている（Ⅲ面）．

調査はこの畑址を中心に2回，畑址を除去して1回の3面を調査し，7月3日をもって終了した．調査の途中，6月18日に埋蔵文化財調査委員会および関係者の参席を得て，現地説明会を実施した．

＜調査面積＞

1,733.75㎡

＜調査期間＞

2001年　4月9日～7月3日

＜調査員・参加者＞

小畑弘己，大坪志子．

呉判錫，岡田イツ代，押方富江，河野義勝，黒木重信，黒木タケ子，小細工洋子，白石美智子，鈴木笙子，溜渕俊子，高松北子，橋口剛士，林田恵子，早田咲百合，番山明子，福田久美子，堀川貞子，松井昭子，水上順子，宮村邦子，森川征子，森川護，森田登．

3. 調査の結果

a　基本層序（図2）

本調査地点は先に述べたように耕地化にともなって削平を被っているため，旧来の遺構の残りはさほどよい状態ではなかった．さらに，耕作土も旧建築物建設のためとくに北半部が削平を受けており，本来は北側（白川側）に高まる地形であったものと考えられる．

以上より，北半部においては耕作土の下はいわゆる地山面であり，南半部にかけてこの地山が次第に傾斜下降していく．このため，南側は旧耕作土（畑址）の面が2枚以上存在し，その下部は古代以前の溝および旧河道が重なった状態で認められた．

図2　0101調査地点の基本土層図（1/50）

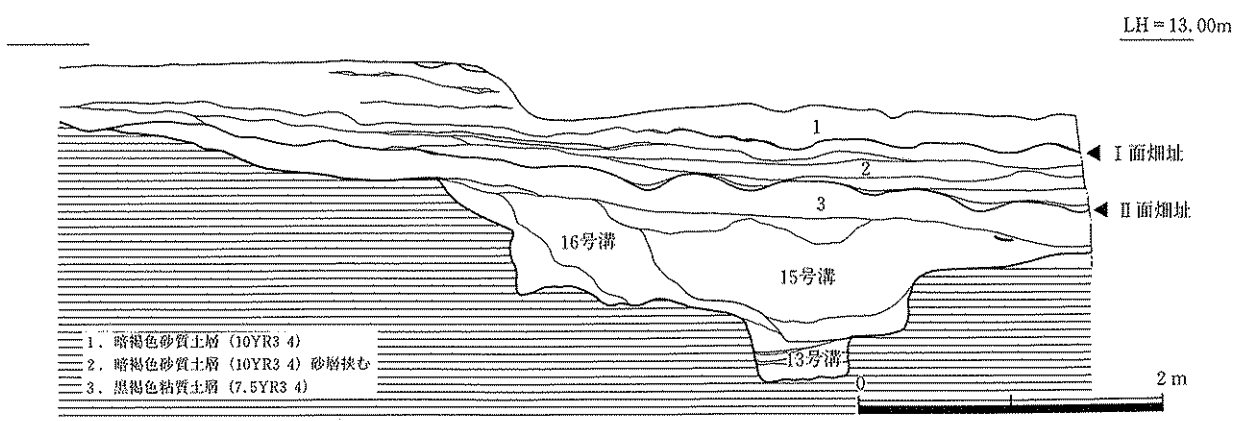
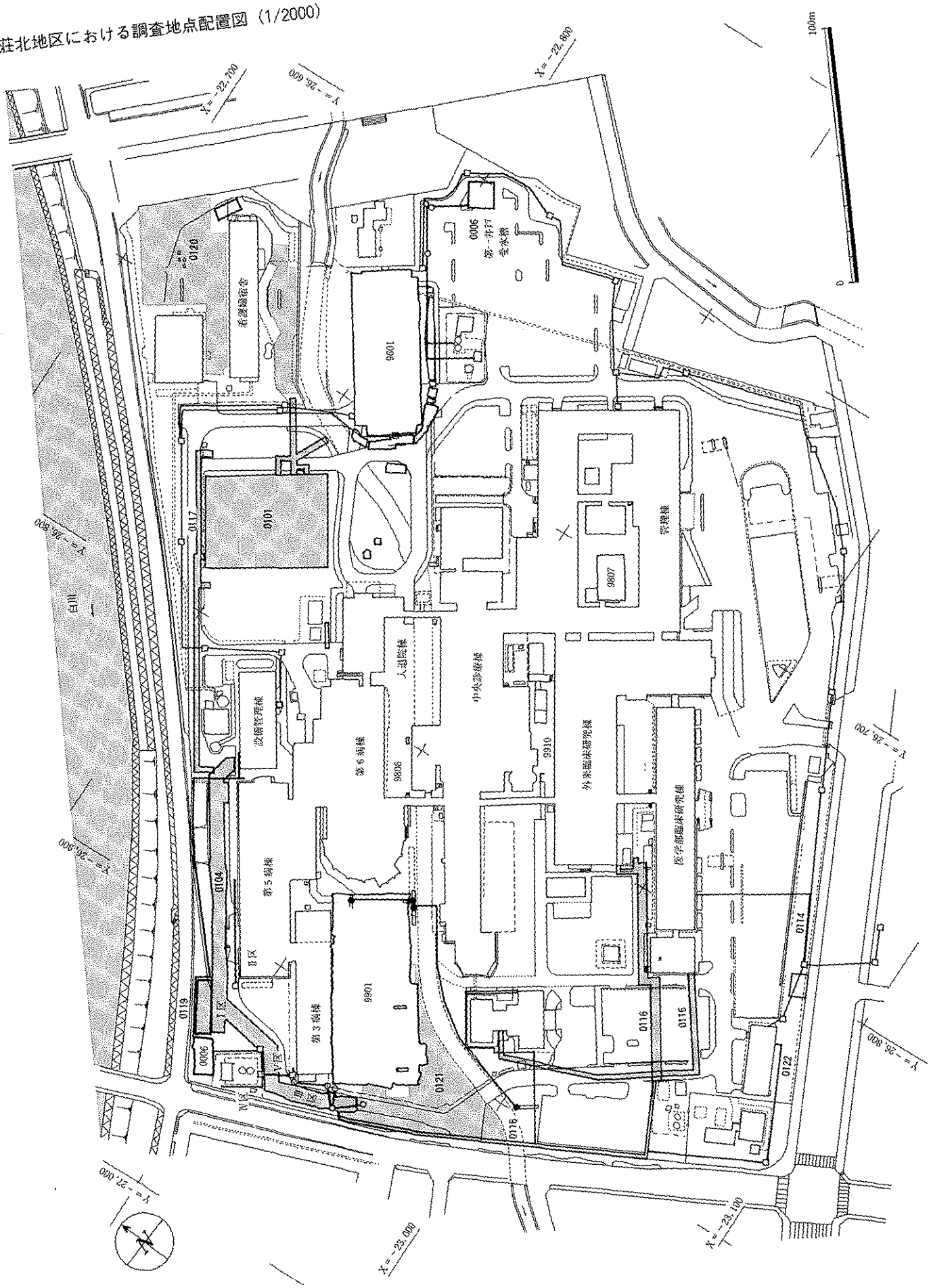


図3　本荘北地区における調査地点配置図（1/2000）



Ⅱ－1　0101調査地点

図４　0101調査地点Ⅰ面遺構配置図（1/250）

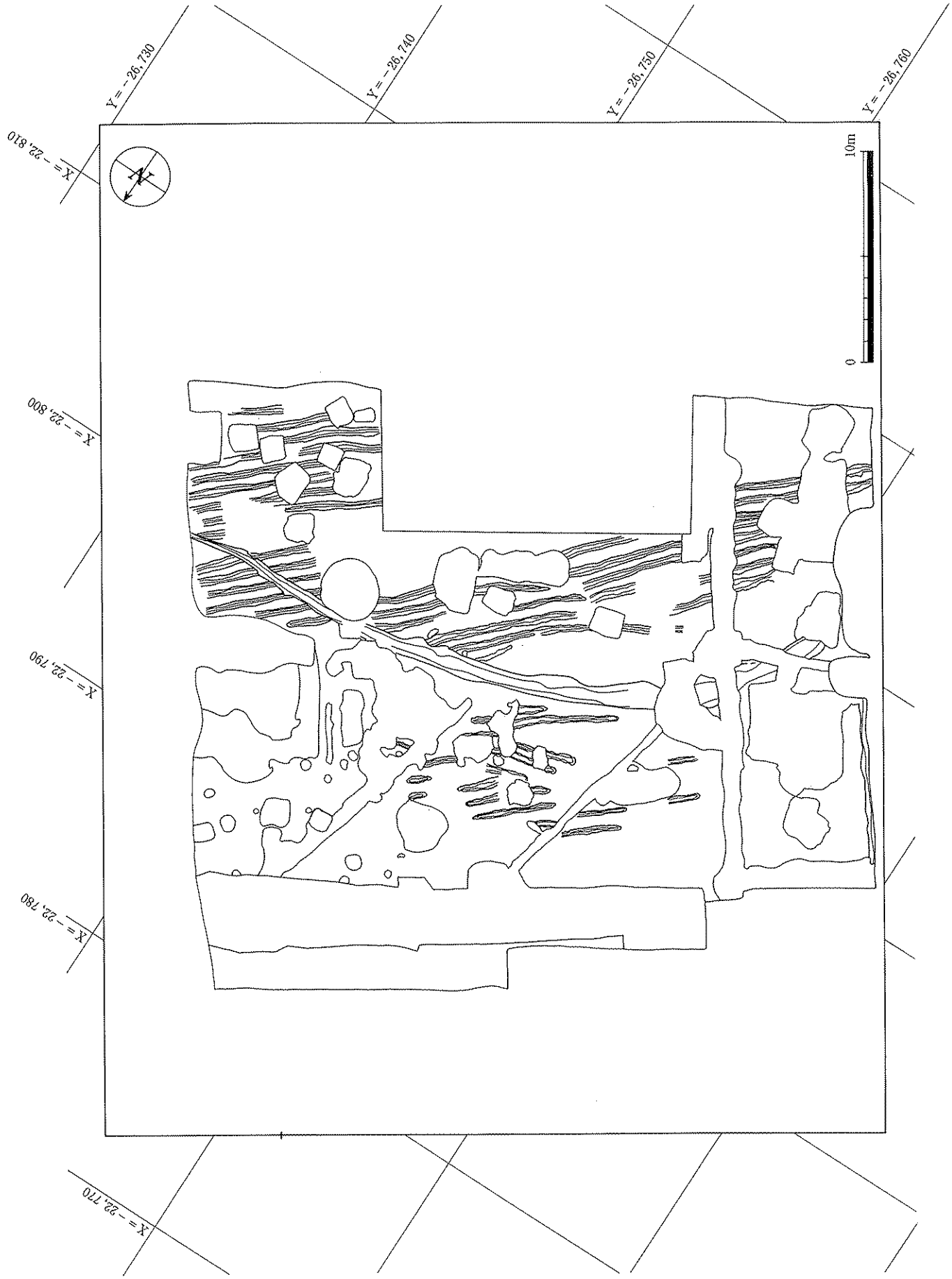
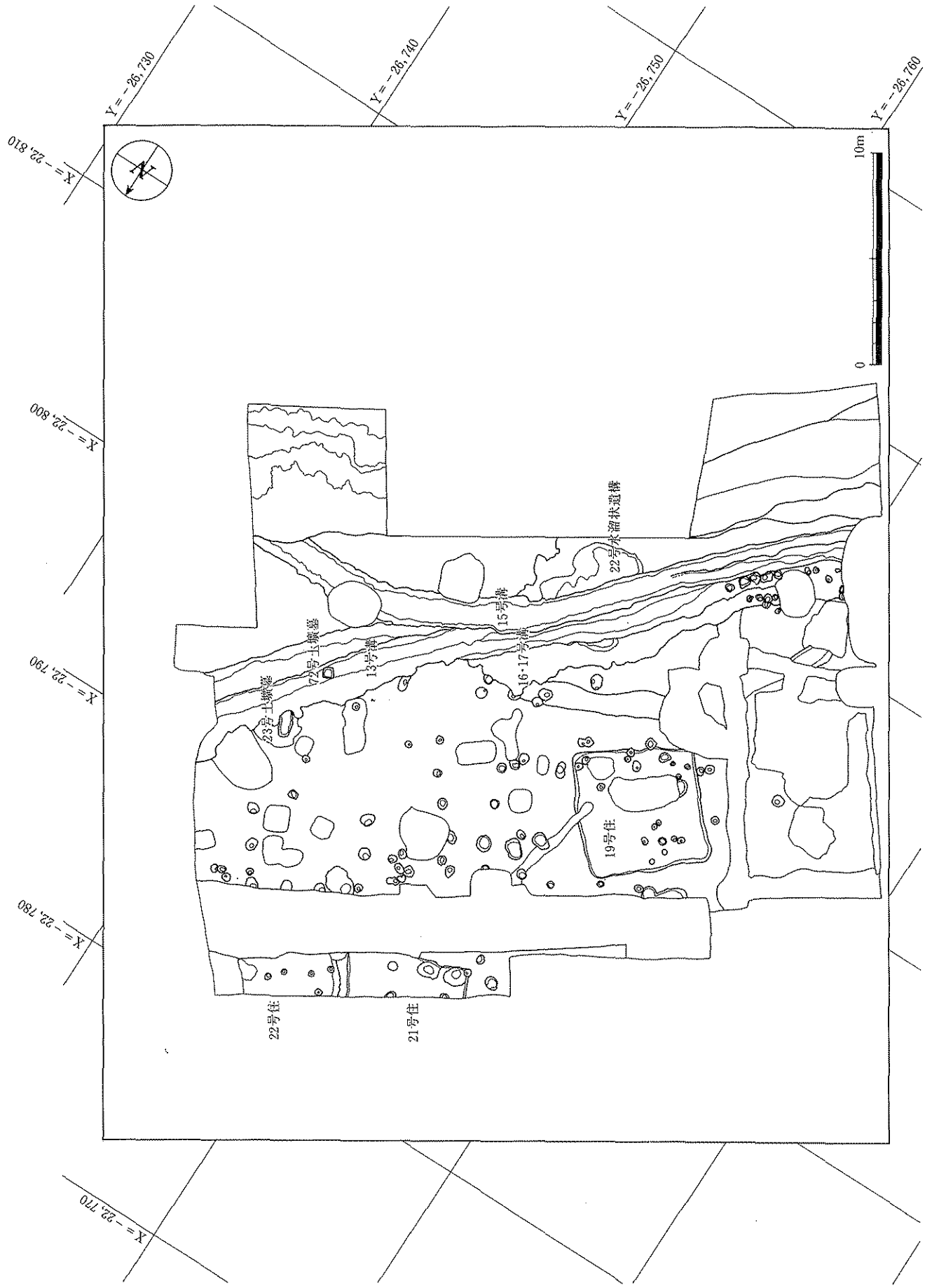


図５　0101調査地点Ⅱ面遺構配置図（1/250）

図６　0101調査地点Ⅲ面遺構配置図（1/250）



基本層序は，北半部が表土（厚さ70cm）－現代攪乱土の下が地山面，南半分が近世畑面耕作土およびその水成被覆砂・シルト層（厚さおよそ１m）の下が古代包含層（Ⅱ面畑土耕作土）（厚さ20～30cm）・古代溝・旧河道堆積物（厚さ２m）となっている．

b　検出遺構と遺物

今回の調査で検出した主な遺構は，近世の畑址，古代溝３条および竪穴住居址２基，掘立柱建物址１基，古墳時代前期の竪穴住居址１基である．

＜畑址＞

北側台地上にもわずかな畝址が認められるが，ほぼ流出および削平されており，残り具合は南半部が良好であった．南半部では２枚の畑面を検出したが，その間および最上部にさらに１～２枚の耕作面が存在した可能性が高い．この２枚の畑面は畝間に固く密なシルト層が厚さ５cmあまり堆積し，その上部を粗砂が覆っており，比較的検出は容易であった．これは本調査地点のさらに南側に存在したと考えられる（調査区南端で検出した現代の堀によって改修されている可能性もある）白川の支脈である小河川の氾濫による堆積物で畑面が覆われたために，引き起こされた堆積状況であり，このような厚い砂層に覆われなかった小規模な浸水が幾度か起こっており，耕作面の作り変えはさらに幾度となく行なわれた可能性が高い．畝の幅は30～40cmほどである．地形の傾斜に直交する河道に並行する方向に畝立てされている．

畑の耕作土からはほとんど遺物が出土していないが，数点の陶器片および１点の銅銭（元祐通寶：図８－14）がある．遺構の時期は，出土陶磁器片より18世紀～19世紀以降のものと考えられる．

＜土壙墓＞

調査区中央部東にかけて２基の土壙墓を検出した．

72号土壙墓

13号溝を掘り下げ中に検出した方形の土壙墓である．平面形は70×60cm台形状で，人骨を検出した時点で遺構として認識したことから，墓壙底から25cmほどしか残存していない．遺骸は座位の状態で，人骨は墓底に崩落した状態で出土した．釘などは出土していない．副葬遺物も発見されなかった．埋葬姿勢などから，近世以降のものである可能性が高い．

23号土壙墓

72号土壙墓の北側１mほどのところで検出した．遺骸は側臥屈葬の姿勢で西側を向いていた．腕は肘を曲げ顎下で掌を合わせたような状態であった．その先に短刀と砂岩製の砥石が重なった状態で副葬されていた（図７）．人骨の性別は不明であるが，下顎の前歯・犬歯はなく，歯槽閉鎖の状態であった．短刀は鞘の痕跡や布痕や紐状の痕跡が残っていた（写真ａ・ｂ）．72号と埋葬姿勢の形状が異なるため，時期が異なると考えられる．畑址の畝部には墓壙を掘った痕跡は認められなかったので，畑址以前であるのは確実である．中世末～近世初期のものと考えられる．

＜竪穴住居址＞

古代の竪穴住居址

20号竪穴住居址

調査区北東部で検出したもので，旧建物の基礎により南辺と北辺が削平を受けている．平面プランは方形で，4.5×４mの規模と推定される．竈は残存部には認められなかった．東辺に焼土が認められ，竈を壊した際のものと推定される．竈自体は残存していなかった．その焼土の左側を中心に，甕形土器や甑形土器の破片が集中して出土した．ほぼ中央部に硬化した面が認められた．住居中央部より完形に近い須恵器の高台付杯１点（図８－５），覆土中から土師器杯１点（図８－４）が出土した．

古墳時代の竪穴住居址

19号竪穴住居址

調査区の南西部，中央付近で検出した６×６mの方形プランの竪穴住居址である．主軸はＮ－42°－Ｗである．覆土内には部分的に焼土および炭化した木が残っていた．覆土には古代の遺物が少量混じって，明確な時期は決め難いが，北東部床付近から出土した二段逆刺をもつ鉄鏃（図８－11）から古墳時代前期末の時期と考えられる．

21号竪穴住居址

調査区の北東側で20号竪穴住居址と並列するような位置で検出したもので，同様に旧建物の基礎によって南側と北側辺が破壊されていた．19号竪穴住居址と同規模の６×６mの方形プランと推定される．上部の削平も著しく，器壁は10cmほどしか残存していない．土師器の小型壺１個と小鉢２個が，住居内に遺棄された状態で検出された（図８－１～３）．すべて完形品である．古墳時代前期のものであろう．

＜溝・水溜状遺構＞

13号溝

北北東方向から南南西方向へ流れる幅２m，深さ１mの断面逆台形の溝である．軸はＮ－35°－Ｅである．南側では幅60cm，深さ40cmの台形の段落ちが認められる．覆土上部より馬歯や刀子？（図８－13）などが出土した．

15号溝

東方向から湾曲しながら13号溝に合流するように掘削された溝である．幅２m，深さ0.8mの断面逆台形を呈

図７　23・72号土壙墓および出土遺物実測図（1/20・1/3）

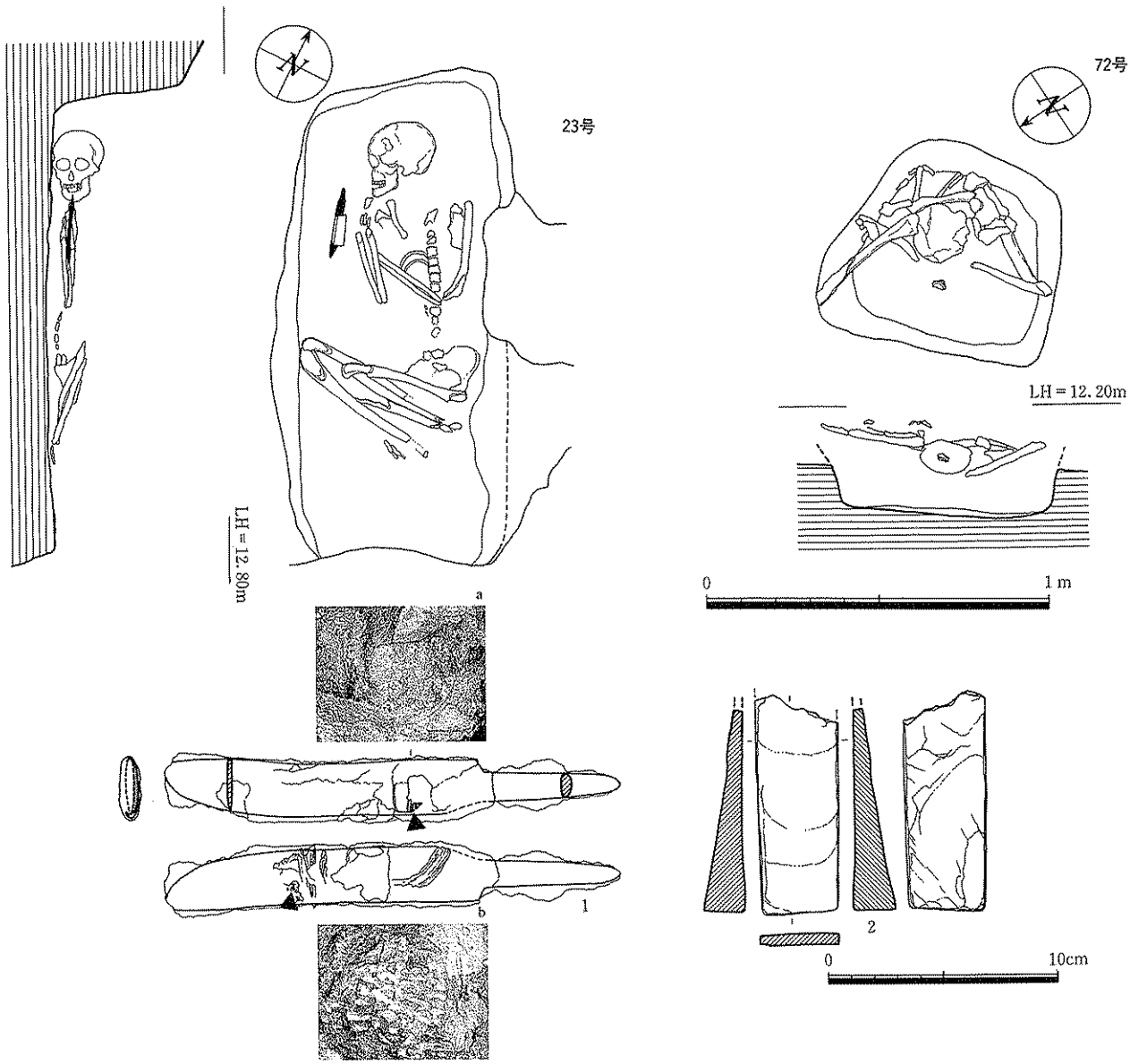


写真１　Ⅱ面畑址（西より）

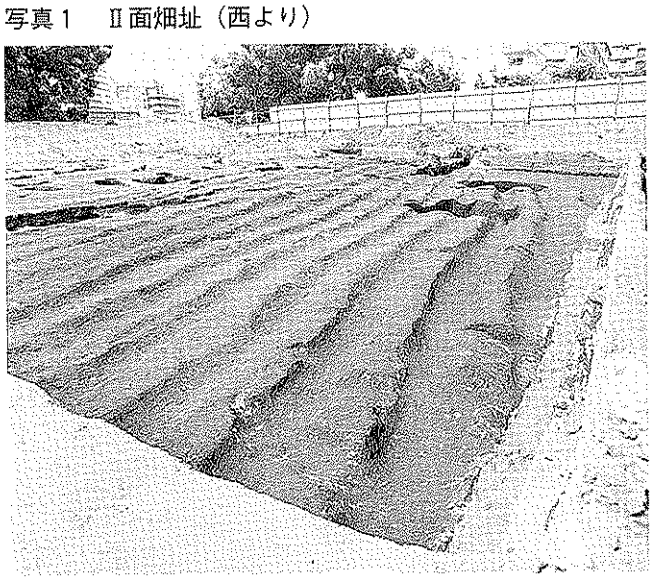


写真２　Ⅲ面全景（上空より）

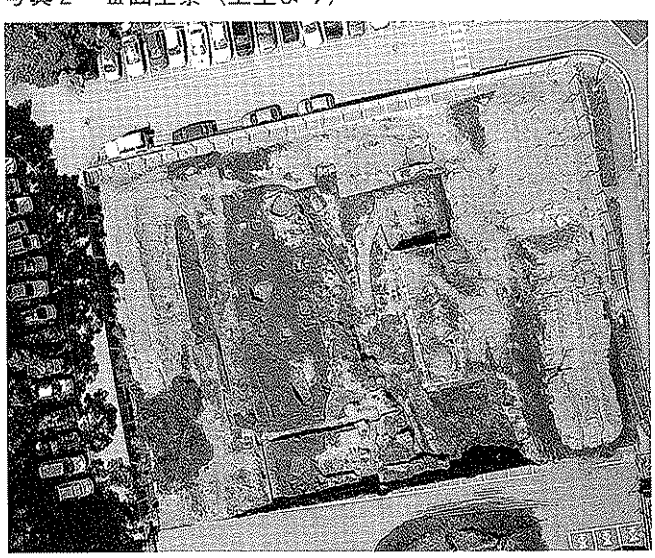
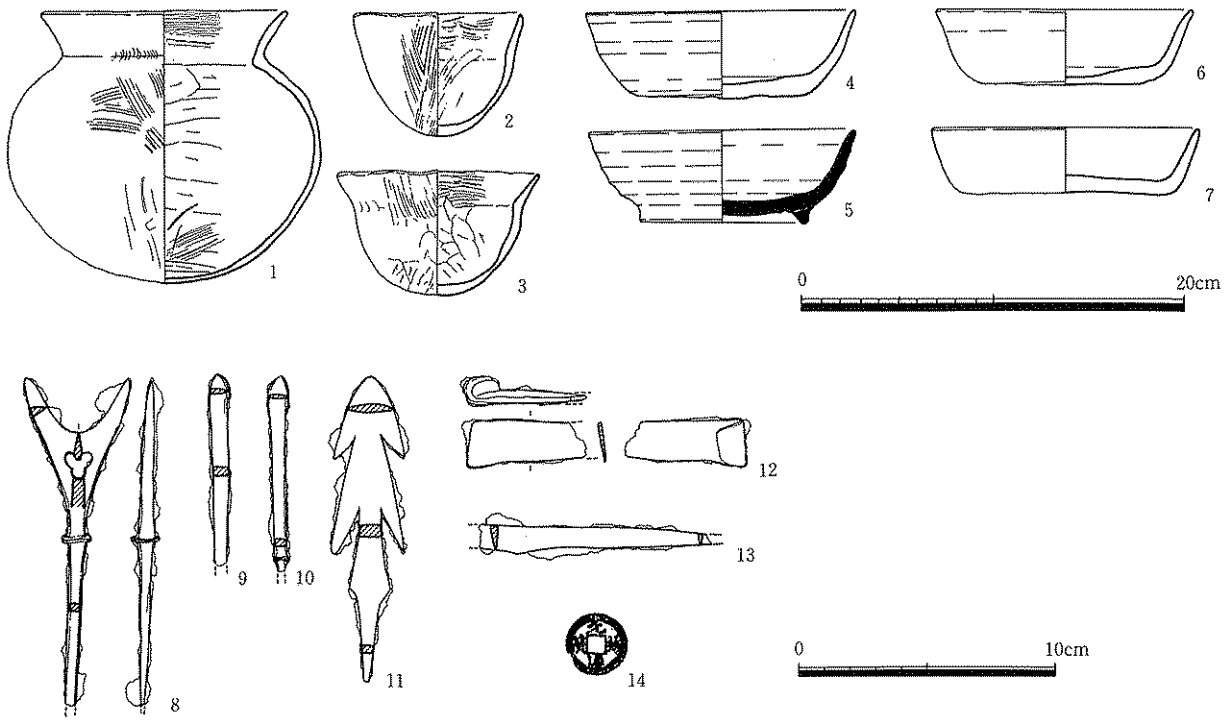


図８　各遺構および包含層出土遺物実測図（1/4･1/3）



する．13号溝より新しいものである．鉄鏃（図８－９）が出土した．

16・17号溝

13号溝の北側に張り出した形で検出したもので，17号溝のラインのさらに外側に16号溝のラインが延びている．それぞれおそらく旧河川の北岸を捉えたものであろうと思われる．

22号水溜状遺構

上記16・17号溝の南端を検出していた際，かなり深い水溜状の落込みを検出した．深さは2.5m余りに達し，大きさも幅４ｍ，長さ６ｍとかなり大型のものである．砂岩ブロックや粗砂，シルトなどが入り組んで堆積しており，マンガンの沈殿した硬い面を下げるとさらに粗砂と遺物が出るなど，複雑な堆積状況を示す．河川水の滞留した場所と考えられる．８世紀後半代の土師器（図８－６・７）・須恵器などが出土することから，上記の溝群はこれより新しいものと考えられる．

＜その他の遺物＞

３面の包含層を調査中に，台地上から鉄鏃２点（図８－８・10）および鎌（図８－12）が出土した．

4. 成果と問題点

本地点は遺跡の北東部に相当するが，周辺の既往調査地点にくらべて若干地形が高まっている．近世に削平は受けているものの，遺構は残存していた．調査区内でも，白川へ近づくにつれ遺構の密度が高くなっており，西側の既往の調査地点である9901地点や0006地点で確認された状況とあわせて，古墳時代や古代においては白川の流路がより北側にあったことを裏付けることとなった．

写真３　23号土壙墓出土人骨および副葬品（南東より）

写真４　22号竪穴住居址全景（南東より）

Ⅱ—2　０１０２調査地点

1. 遺跡の立地と周辺地形

本調査地点のある黒髪町遺跡は，白川の右岸の河岸低位段丘（標高25～18m）に立地する縄文時代～古代の複合遺跡である．本地点は本学黒髪南地区の北西部に位置し，隣接する既往の調査地点には9603地点と9704地点，9802地点がある．本調査地点の南100mに位置する9603と9704地点では古代の堀で囲まれた掘立柱建物群と弥生時代の甕棺群などが検出されているが，道路（国道57号線）を隔てた9802地点では縄文時代早期～弥生時代中期の遺物包含層および近代の東西方向の堀が検出されており，若干様相を異にしている．本地点も大正期に運動場として利用されていたため，2m余り削平されている．

2. 調査の概要

上記のような状況から試掘調査を５月14日に実施し，１次掘削の深度を決定し，1次掘削終了後の７月９日より発掘調査を開始した．梅雨の時期にあたり，雨天には悩まされた．削平が著しいため，鋭意遺構の検出に努めたが，古代以前の遺構はほとんど残っておらず，撹乱の除去に終始した．防空壕６基と撹乱土坑を掘り下げた後，風倒木痕の調査を開始した．遺物は撹乱層およびこの風倒木痕からのみ出土した．

＜調査面積＞

418.5㎡

＜調査期間＞

2001年７月９日～７月26日

＜調査員・参加者＞

小畑弘己，大坪志子．

岡田イツ代，河野義勝，黒木重信，黒木タケ子，白石美智子，鈴木笙子，溜渕俊子，高松北子，林田恵子，早田咲百合，番山明子，福田久美子，堀川貞子，松井昭子，水上順子，宮村邦子，森川征子，森川護，森田登．

3. 調査の結果

a　基本層序（図10）

削平のため包含層は残存していない．削平面の上はすべて昭和28年の洪水砂およびその後の埋め立ての際の造

写真５　0102地点全景（上空より）

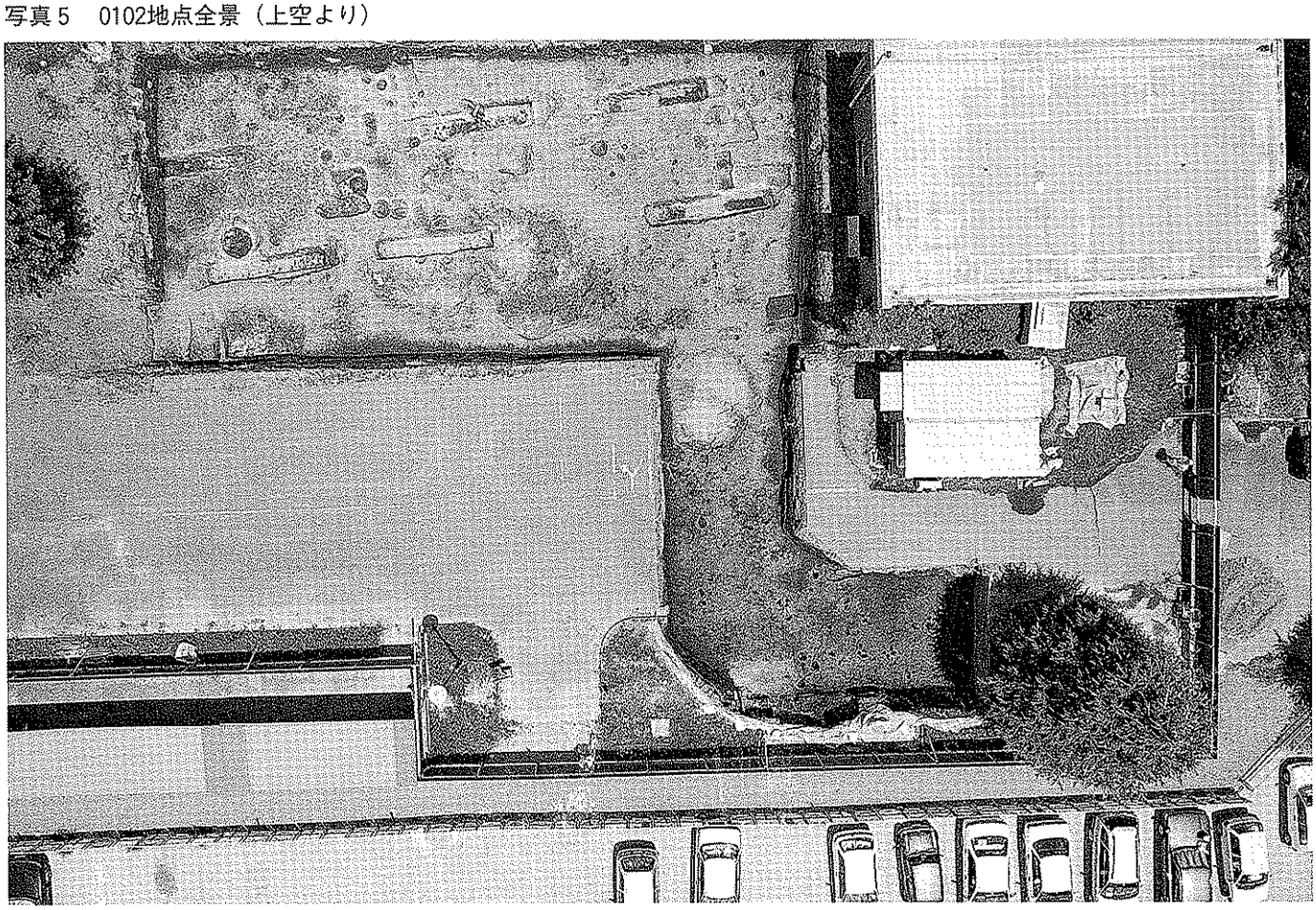
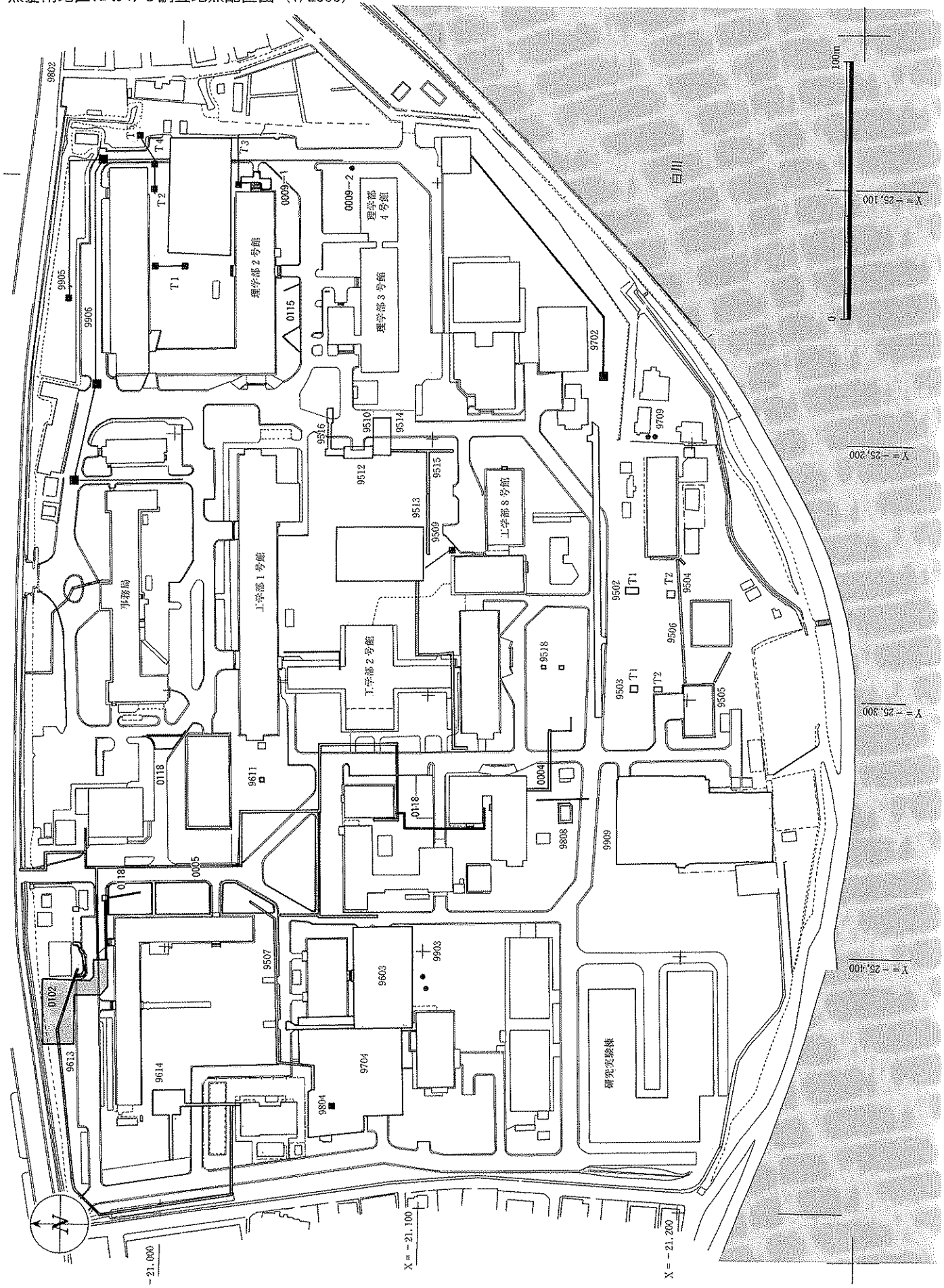


図９　黒髪南地区における調査地点配置図（1/2000）



Ⅱ－２　０１０２調査地点

成土である．

b　検出遺構と遺物

＜防空壕＞

調査区の北半で６基検出した．並行するように５ｍほど離れて２列に掘られている．幅１ｍ，長さ5.5～６ｍ，深さ１ｍで，短辺に３段ほどの階段が付けられている．使用時の状況を示す遺物は出土していない．

＜風倒木痕＞

５基を検出した．幅３～４ｍほどの不整楕円形を呈し，深さは0.8ｍで，断面形はロート状をなす．１号風倒木痕

図10　0102地点遺構配置図（1/200）

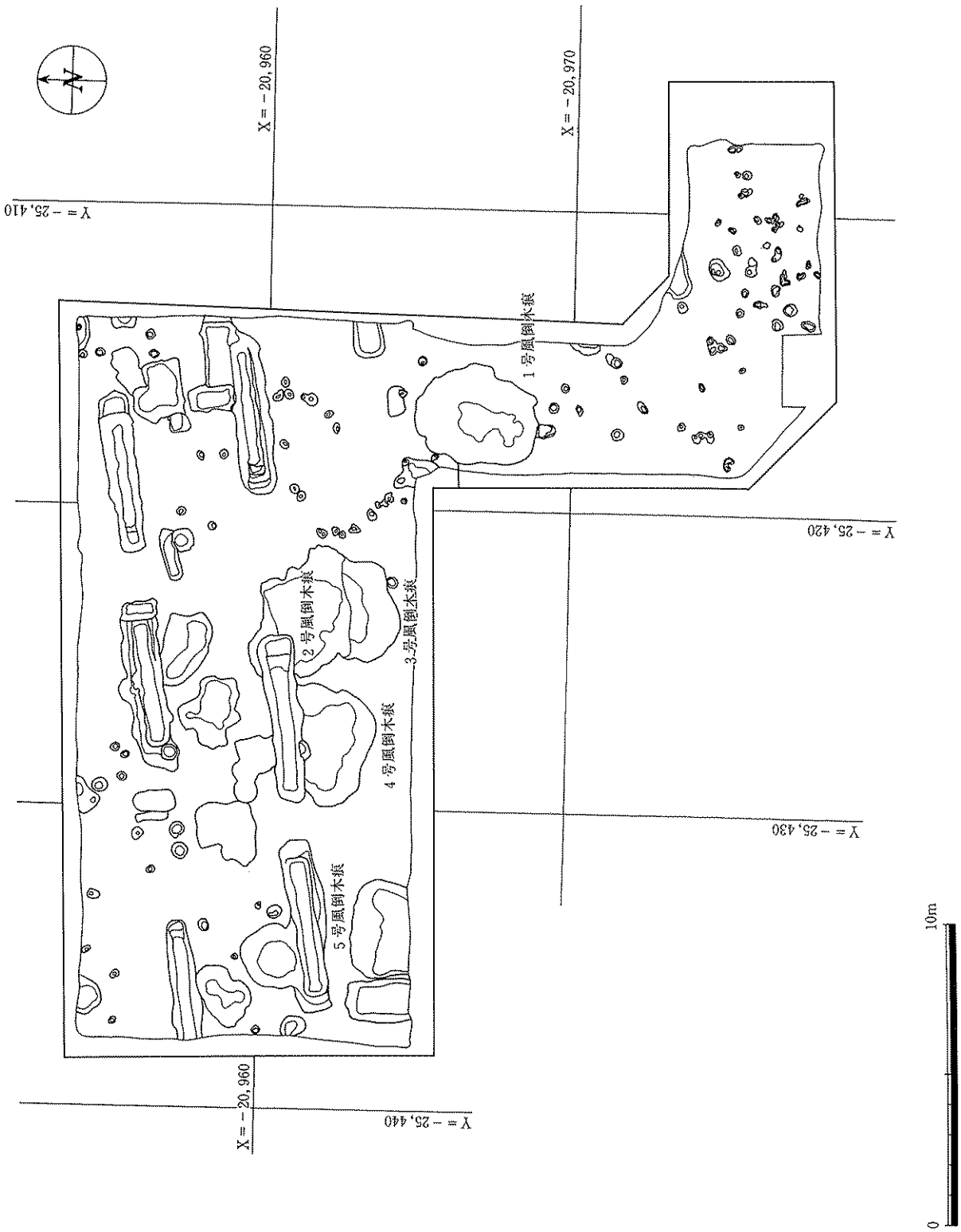
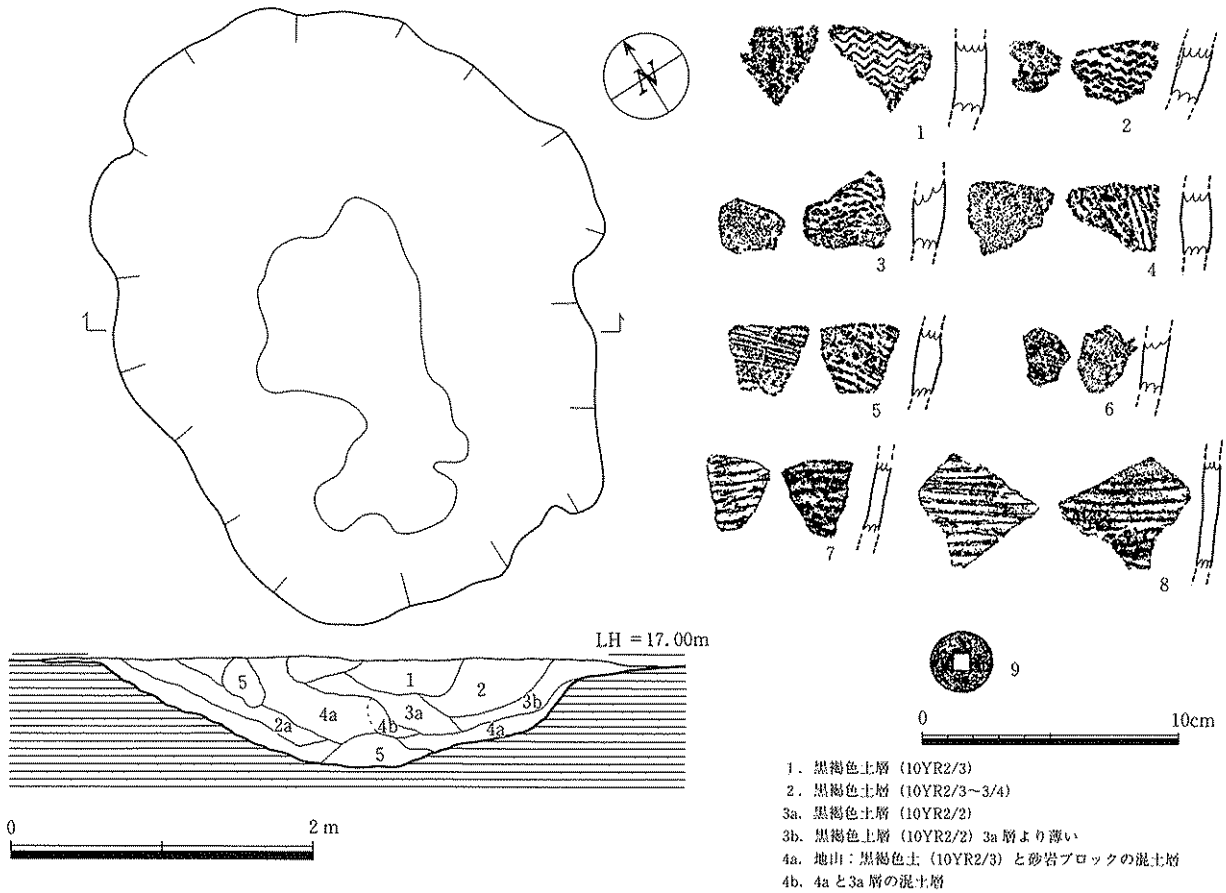


図11　1号風倒木痕および各遺構出土遺物実測図（1/50・1/3）



（図11）を中心に覆土内から縄文時代早期～晩期の土器片10点が出土した．早期時には山形・楕円文の押型文土器片（図11－1～3），条痕文土器片（同4・5），無文（同6），晩期の土器には条痕文の粗製土器（同7・8）がある．

＜その他の遺物＞

撹乱土からは磨耗した須恵器や土師器の土器片が少量発見された．寛永通寶1枚も出土した（図11－9）．

4. 成果と問題点

本地点は，削平が著しいが，風倒木痕などの存在から，従来は遺構・包含層が残存していた可能性が高い．より南側に位置する9603地点や9704地点はほぼ同じレベルに削平されていながら，遺構の残りが良好であったことは，それらの地点が斜面の低い部分に相当するためであって，本地点はそれらよりより高い位置にあったために，ほとんど削平されてしまったものと思われる．

また，風倒木痕内からの出土とはいいながら，9802地点と同様に縄文時代早期の遺物が発見されたことは，遺跡内でもより高い地点には古い時期の遺物が包含されることを証明したことになり，今後北地区については，これら以前の時期の遺物包含層や生活面が存在する可能性も見据えて，調査しなければならない．

Ⅱ—3　0104調査地点

1. 遺跡の立地と周辺地形

本荘北地区に所在する本荘遺跡は，熊本市遺跡地図№8－95の熊大病院敷地遺跡として周知されている遺跡である．

阿蘇に発する白川は細かな蛇行をしながら中流域で河岸段丘を発達させ，熊本大学黒髪地区付近で大きく蛇行したのち有明海に注ぐ．本遺跡は，蛇行の見られなくなる下流域に差し掛かる地点にあり，白川左岸に形成された自然堤防上（標高14m）に立地する．

本荘北地区では，校舎・病棟の新営に伴い比較的規模の大きな発掘調査が実施されてきた．これまでの発掘調査では，まず周辺の大江遺跡群や新屋敷遺跡と同様に奈良・平安時代の集落址を確認した（9601）．続いて付近一帯としては初めて古墳時代の集落址を確認し，本遺跡が複合的な遺跡であることを予見した（熊本大学埋蔵文化財調査室年報３）．1999年度の調査で病院敷地の西側で古墳時代の集落址を検出し（9901），9901調査地点周辺で当該時期の遺構・遺物が次々と確認され，貴重な資料を得ている（熊本大学埋蔵文化財調査室年報６・７）．これまでの調査で，本遺跡は縄文時代後・晩期から営まれ，病院敷地の特に西北側に古墳時代から古代の集落址が密に分布している様子が分かっている．

2. 調査の概要

本事業は平成10年度に計画が挙げられていた事業である．病棟新営・共同溝敷設事業として挙げられ，1999年度に病棟新営工事（9901），昨年度に共同溝敷設に伴う支障配管替えを行い（0006），本年度に共同溝本体工事を施行することとなった．

調査区は病院敷地の北西隅に位置し，第５病棟北側に沿った狭長な範囲である．廃土処理を行うのに十分な空間が確保できず，また病院の給食配膳室の横にあたり，食料資材の搬入路の確保が必要であったため，調査区全体をⅠ～Ⅴ区に分けて調査を行った．

食料資材の搬入路については仮設の橋をかけることで確保する事になった．この仮設の橋の部分については，施設部との協議の結果，先行して調査を行い（Ⅰ区），架橋工事の終了を待って残りの区間について順次調査を行うこととした．

具体的に調査準備に入れるようになったのは６月下旬で，準備期間が不充分であったが，Ⅰ区は範囲が狭く短期間で終了するとの見通しにより，7月初に調査を行い，残りの区間については十分な準備を整え他の現場との調整をはかったうえで７月末から実施した．

図中の遺構番号については，遺構の種類によらず，検出順に一連の番号を与えている．

＜調査面積＞

1,023.8㎡

＜調査期間＞

Ⅰ区　　2001年７月４日

Ⅱ～Ⅳ区　2001年７月30日～10月29日

＜調査員・参加者＞

小畑弘己，大坪志子．

岡田イツ代，河野義勝，黒木重信，黒木タケ子，白石美智子，鈴木笙子，溜渕俊子，高松北子，中川毅人，林田恵子，早田咲百合，番山明子，福田久美子，堀川貞子，松井昭子，水上順子，宮村邦子，森川征子，森川護，森田登．

3. 調査の結果

a　基本層序（図12）

図12はⅠ区南壁の実測による．調査範囲が狭長であったので，東から西に向かって地山が傾斜している事が分かった．調査区全体は敷設されていた道路部分に重なっており，基本的にアスファルト，バラス，１層：近・現代埋土，２層～３層：包含層の順である．２層は主に古代

図12　Ⅰ区南壁土層断面図（1/50）

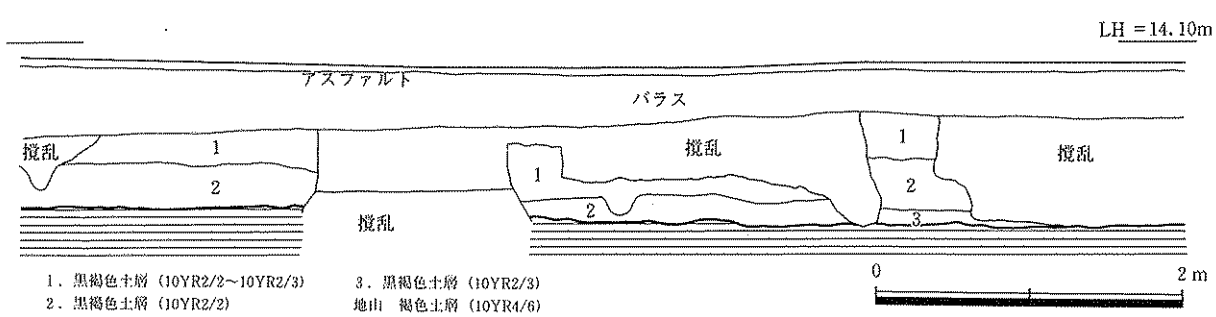
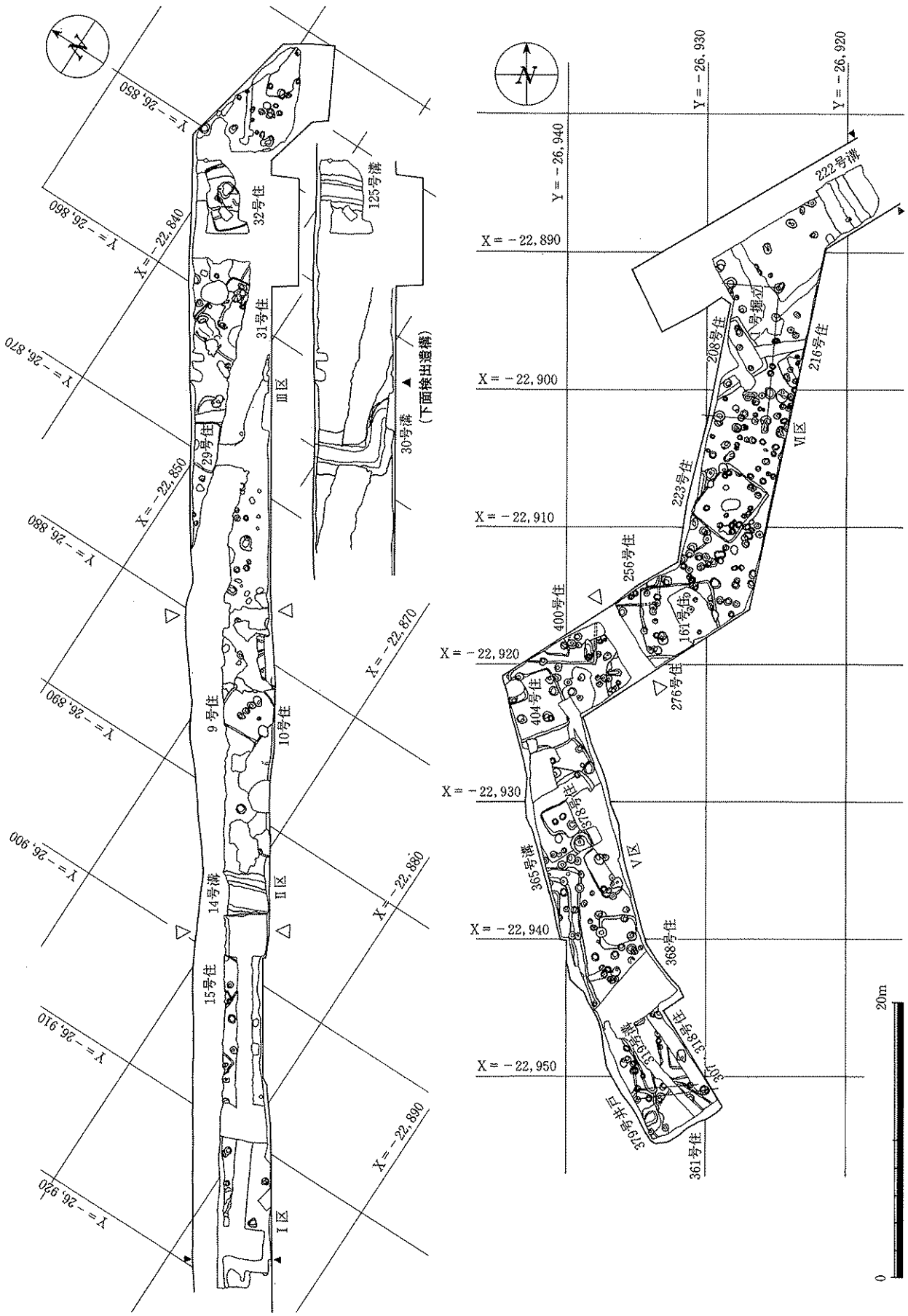


図13　0104調査地点遺構配置図（1/400）



Ⅱ－3　０１０４調査地点

の遺物包含層であり，3層は古代の遺構の掘り込み面であると共に，古墳時代の遺物包含層・遺構覆土である．地山が浅くなる東側（Ⅰ区～Ⅲ区）では過去の工事等によって包含層・遺構面の削平が著しく，逆に深くなる西側（Ⅳ・Ⅴ区）では包含層・遺構面の遺存状態は良好であった．

b　検出遺構と遺物（図13）

今回調査で検出した遺構は，古代の竪穴住居址14基・掘立柱建物3棟・井戸1基・溝2条，古墳時代の竪穴住居址5基・溝3条，弥生時代の溝1条である．古代の竪穴住居址については，建替えが同じ場所で繰り返されたようで，硬化面，あるいは竈の跡と思われる焼土塊のみを確認したものも多く，平面プランを把握したものより実際の数は多かったものと考えられる．

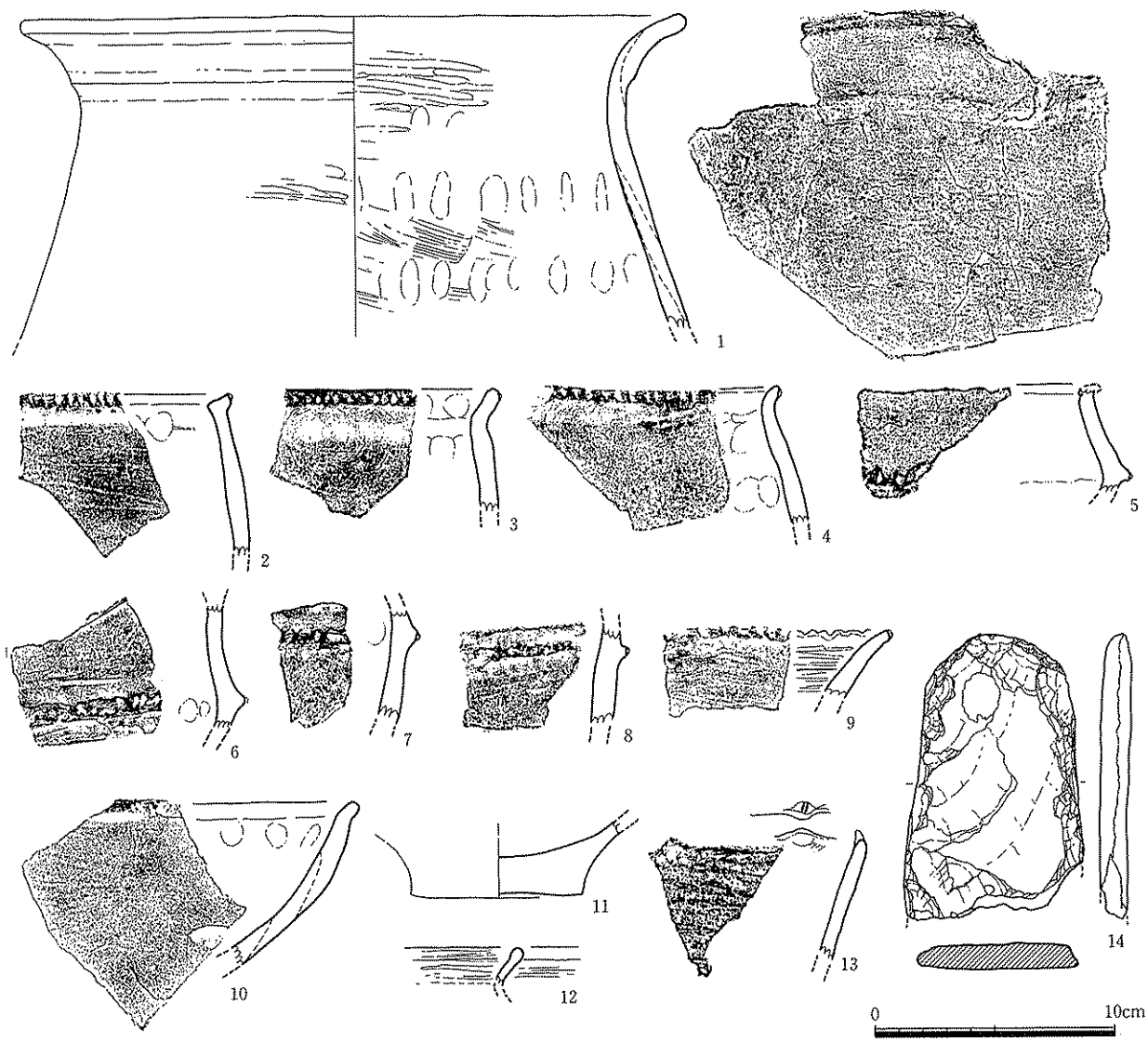
＜溝＞

弥生時代の溝

125号溝（図14）

Ⅲ区東側で，古代の32号竪穴住居址の下から検出した．幅2m，深さ1.1mで，断面形状は逆台形である．底辺の幅は0.8mである．溝の主軸はN－26°－Wで，調査区と直交する．堆積土は9層に分けられるが，下部の5～9層は溝掘削後の早い段階で埋没しており，その上部の4層（黒褐色土層：10YR 3/3，厚さ15cm）と3層（黒褐色土層：7.5YR 3/2，厚さ20cm）下部を中心として遺物が出土する．出土遺物は黒色磨研土器片（図14－12）や条痕文粗製土器（同13）も含まれるが，弥生時代前期の壷形土器や甕形土器・鉢形土器（同1～11）が主体を占める．ただし遺物は総数で30点を越えない．石器としては打製石斧（同14）や石鏃，黒曜石剥片など数点がある．

図14　125号溝出土遺物実測図（1/3）



古墳時代の溝

30号溝（図15・16）

Ⅲ区のほぼ中央部で検出した溝である．調査区を横断するように南から北へ抜けるが，S字状のコーナー部をもつ．幅３m，深さ1.3mで，断面形は逆台形である．南半は埋設管の掘り方などで上部を破壊されている．北側は古代の29号竪穴住居址が重なっており，土層断面図の２層部分がこの住居址の覆土となる（図15）．この下の３層は0119地点の古墳時代前期溝でも溝の堆積土最上部に認められ，溝の窪みを古代に整地した際に埋め戻された土である可能性が高い．遺物は９・14層を中心に出土しており，この間には13層のような大きな木炭片を含む焼土が挟まる．土器の中に二次的な焼成を受けたものが存在することから，遺物は基底土層である15層の堆積後に焼土とともに廃棄されたものと考えられる．土器には甕形土器・壷形土器・鉢形土器・高杯形土器・小形坩形土器・坏形土器などがある（図16）．

14号溝

Ⅱ区で検出された．調査区を横切るように，北西に走る．幅は現在確認出来る範囲で約2.6m，深さは約0.8mで，溝の東岸は途中にテラス状の段がある．遺物は上方で須恵器などが見られたほかは少なく，特に底に近い部分では人骨と思われる骨が数点あっただけである．古代の包含層と思われる土層が途中の段の上に堆積しており，この溝は周辺の状況から勘案して，古墳時代に下方の浅く幅広な部分が掘削され，ある程度埋没した状態の時に幅を拡張し，古代にも使用されたのでないかと思われる．

222号溝（図17・18）

Ⅳ区の東端，Ⅰ区との境付近で検出された．調査区と直交し，北西に走る．古代の遺物包含層（古墳時代の遺構覆土）を除去したのちに検出された．当初溝の東肩には排水枡があったが，その下に溝の東側肩が遺存していると判明し，枡を撤去して調査した．溝の幅は約2.5m，深さは約1.3m，底がやや平らなV字状である．遺物は溝の肩付近から出始めるが，低部から少し浮いた，５・６層付近で集中して出土した．

222号溝は現在調査中の0119調査地点でも続きが検出され，遺物も同様に出土している．2箇所の調査でこの溝の一番上の覆土が地山と同じ土（あるいは類似する土）で，この下に溝が存在することを確認した．222号

図15　30号溝・土層断面実測図（1/50）

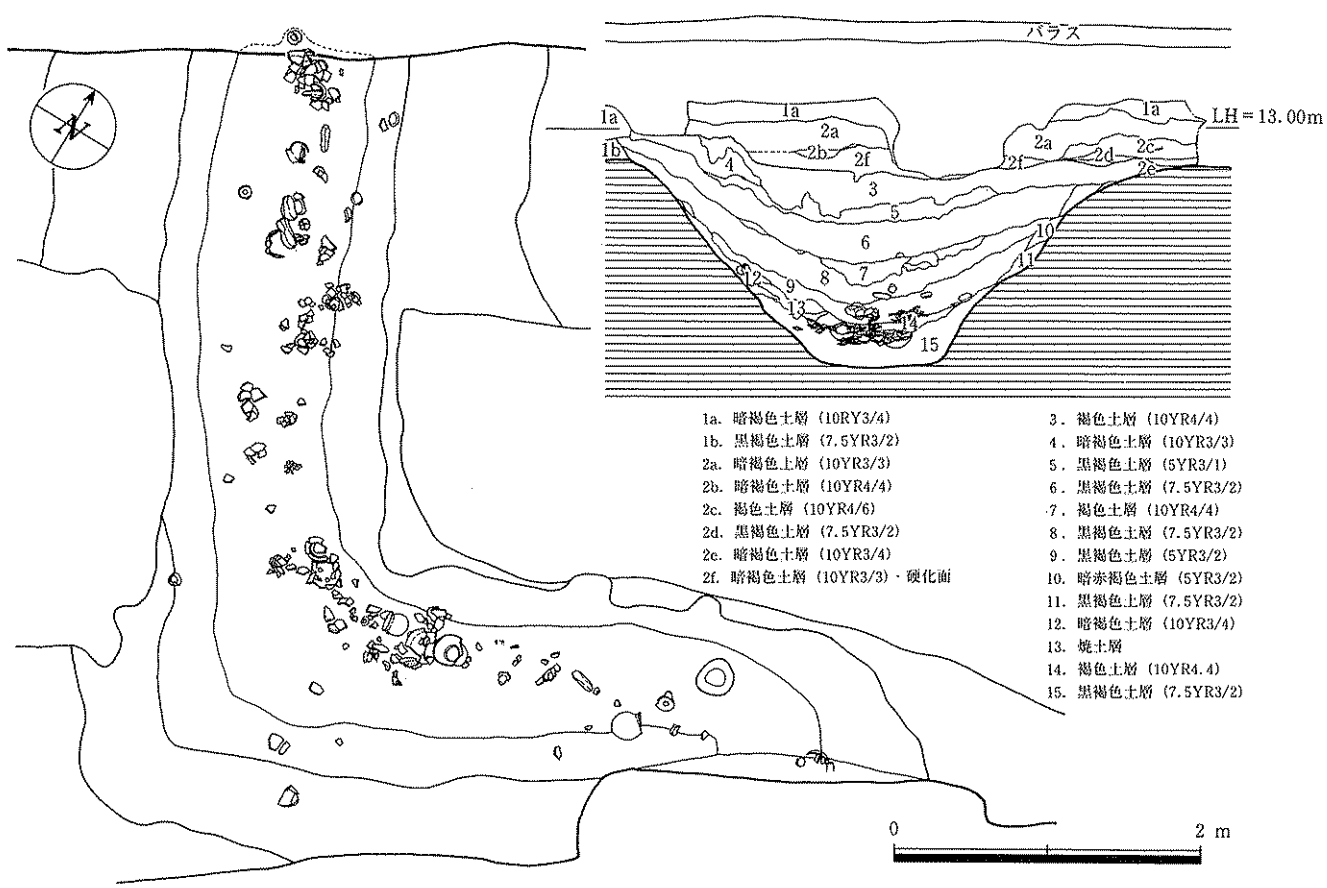
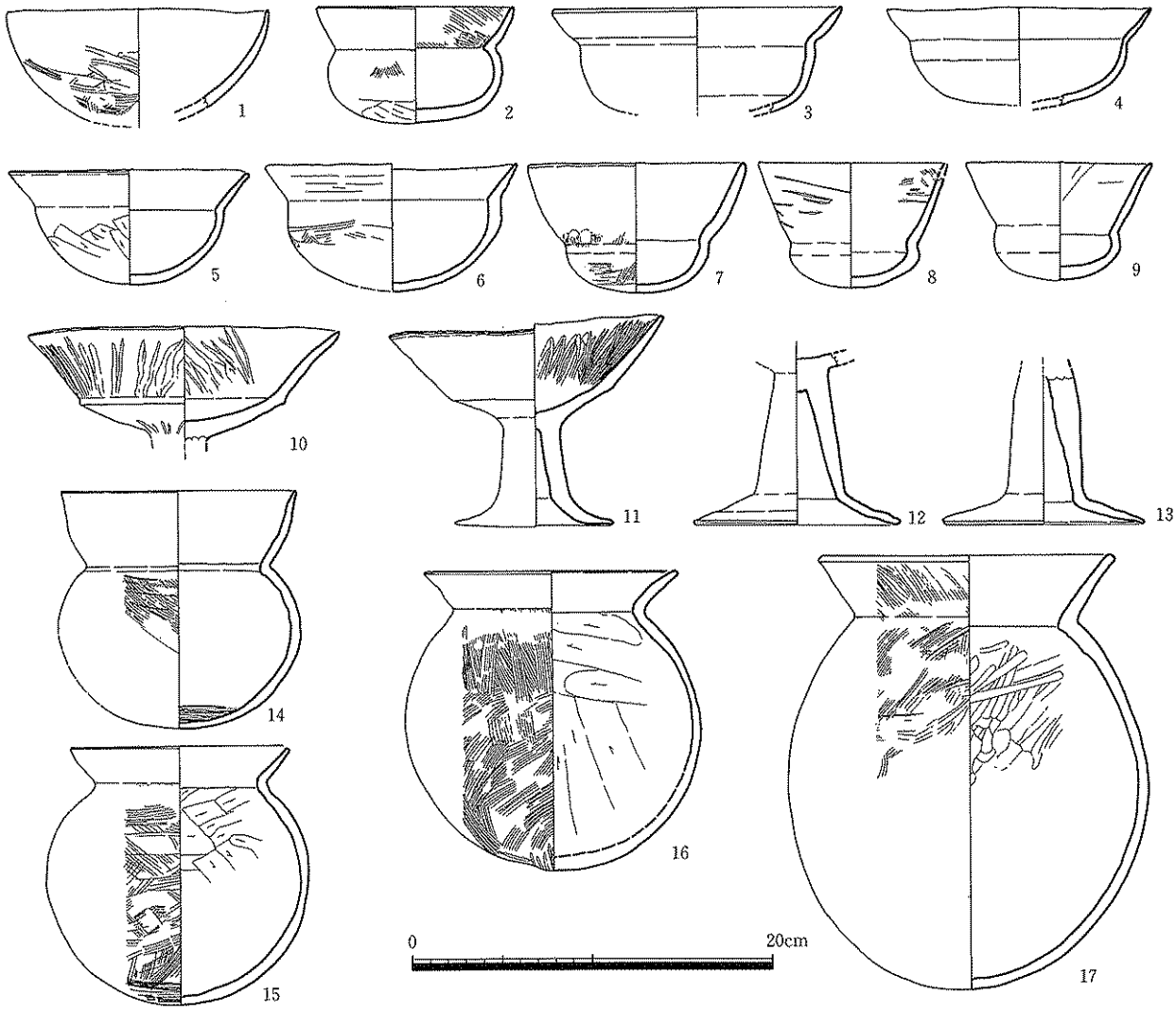


図16　30号溝出土遺物実測図（1/4）



溝の南側延長上に位置する0006調査地点でも一部古式土師器を収集したが，地山の土があるとして一部掘り下げていない．両調査地点での調査結果を鑑みると，222号溝は0006地点にも延びており，当時の調査では完掘していない可能性がある．

遺物は古式土師器である．甕・高坏・小型丸底坩・有孔鉢・大型壷のほか，手捏土器などがある．遺存状態がよく，なかには大小の壷を入れ子状にしてあるものもある．これらは布留１～２式であろう．また後述するが，これらより古い時期の土器が0119調査地点で出土しており，222号溝の掘削時期については両調査区の遺物を合わせた検討が必要である．

古代の溝

319号溝

Ｖ区で検出された溝である．遺物はほとんどない．365号と同じ古代の溝と考えられる．現状で幅約0.8m，深さ約0.2m程度の狭く浅い溝である．南側端部は自然に浅くなり途切れているが，北側の端部は撹乱により不明である．しかし，撹乱より北側で続きは検出されず，長く北に延びる様子はなかった．

365号溝

Ｖ区で検出された古代の溝と考えられる．ほぼ南北に走り，途中でＬ字状に西へ曲がる．現状で幅は約0.7m，深さ約0.5mである．遺物は非常に少なく時期の判断は困難であるが．378号住居址に切られていることから，古代でも早い段階のものと考えられる．

図17　222号溝・土層断面・出土遺物実測図（1/50・1/4）

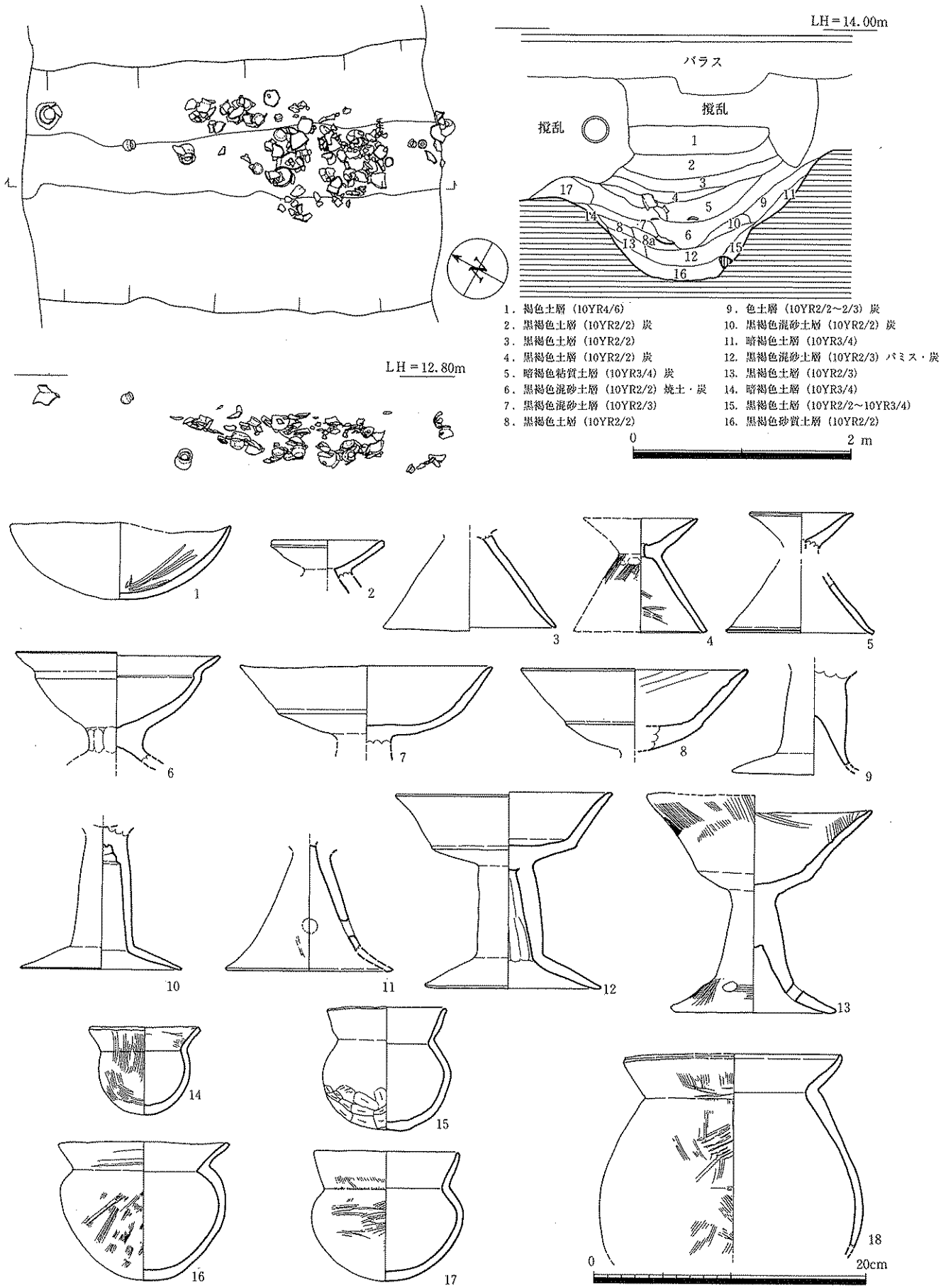
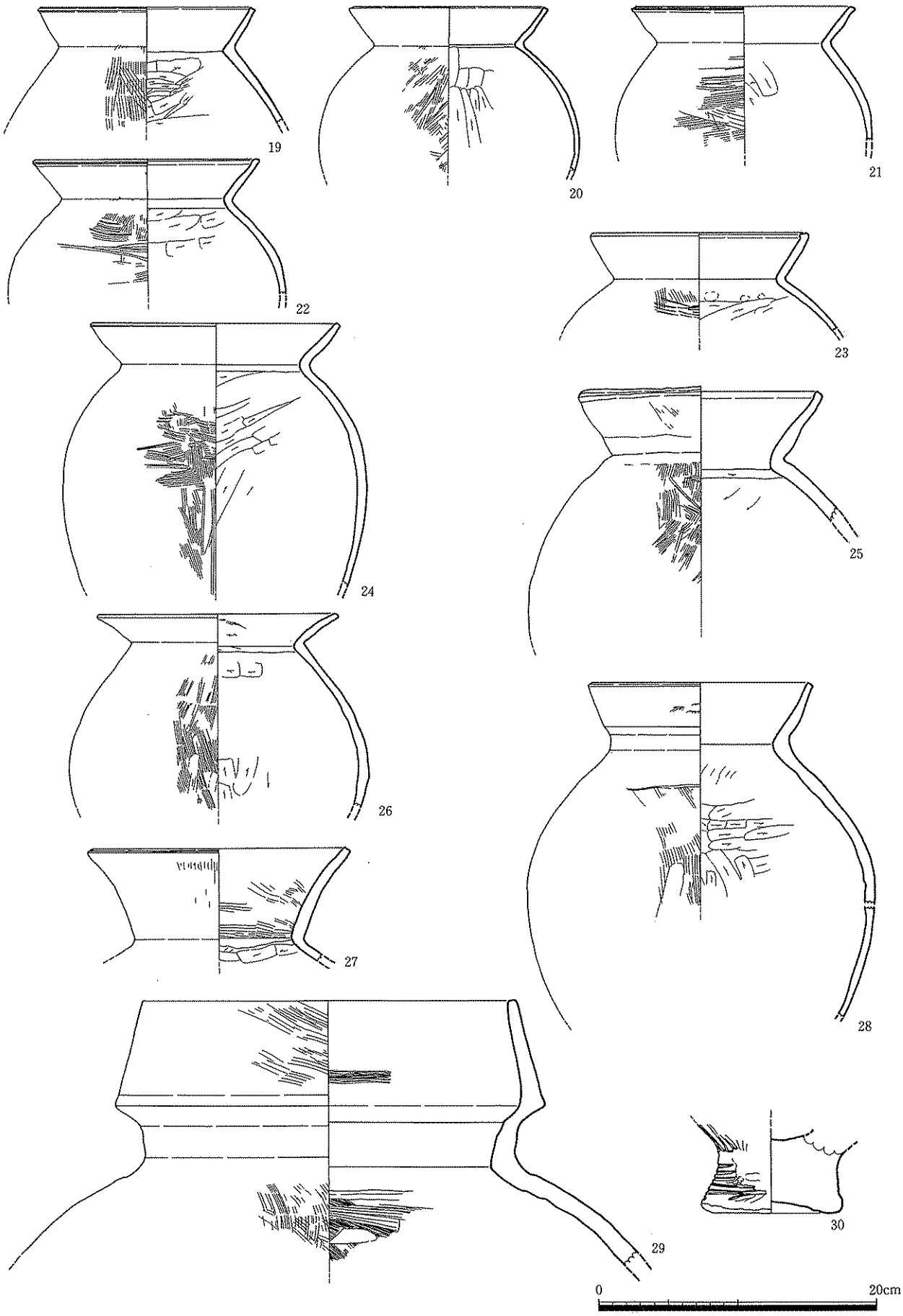


図18　222号溝出土遺物実測図（1/4）



＜竪穴住居址＞

古墳時代の竪穴住居址

208号竪穴住居址（図19）

Ⅳ区で検出した．住居址の西側半分は調査区外に延びる．住居址の軸は北北西－南南東である．大半は撹乱により破壊されているが，全体の様子は知り得る．1辺約4.5m前後の長方形で，深さは現状で約0.3mである．明確な硬化面や炉などは検出されなかった．遺物は小型丸底壷・高坏・甕などがある．布留1～2式の頃であろう．

223号竪穴住居址（図20・21）

Ⅳ区中央で検出した．一部調査区外に延びるほかは，削平や撹乱を受けておらず，遺構・遺物とも遺存状態は良好であった．約4.7×4mの長方形で，長軸は北東－南西を向いている．同じ古墳時代の208号竪穴住居址と

図19　208号竪穴住居址・出土遺物実測図（1/50・1/4）

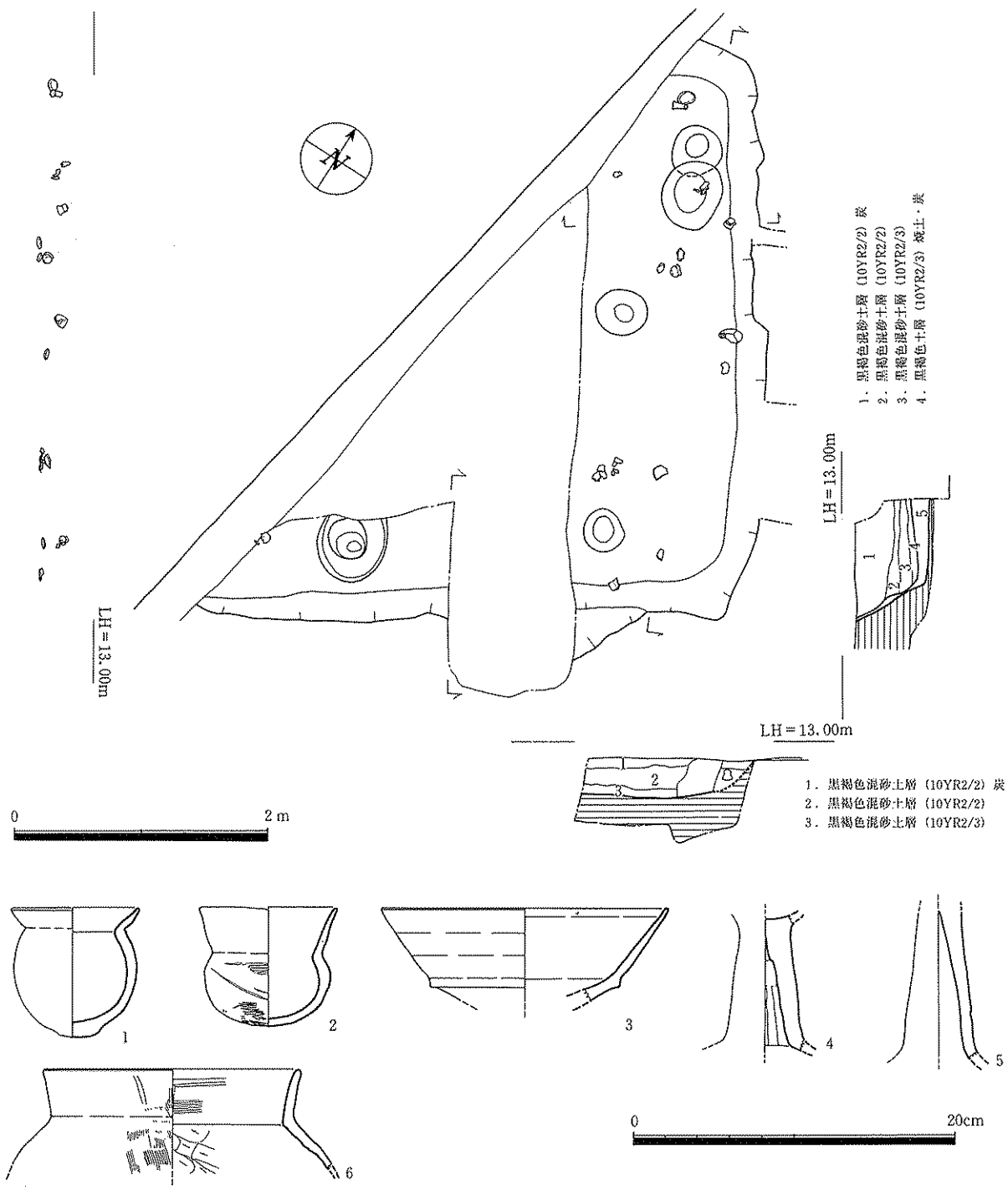


図20　223号竪穴住居址実測図（1/50）

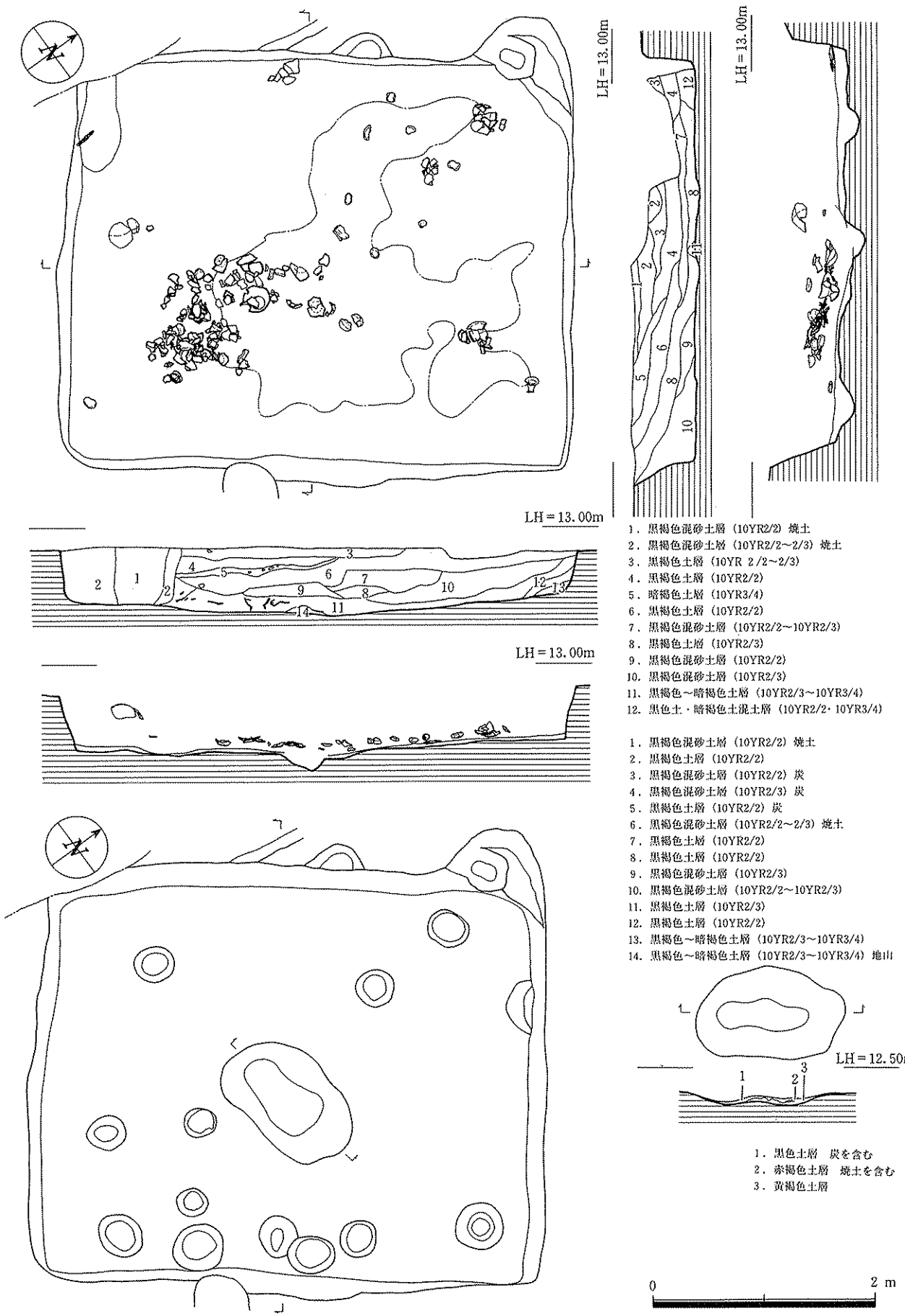
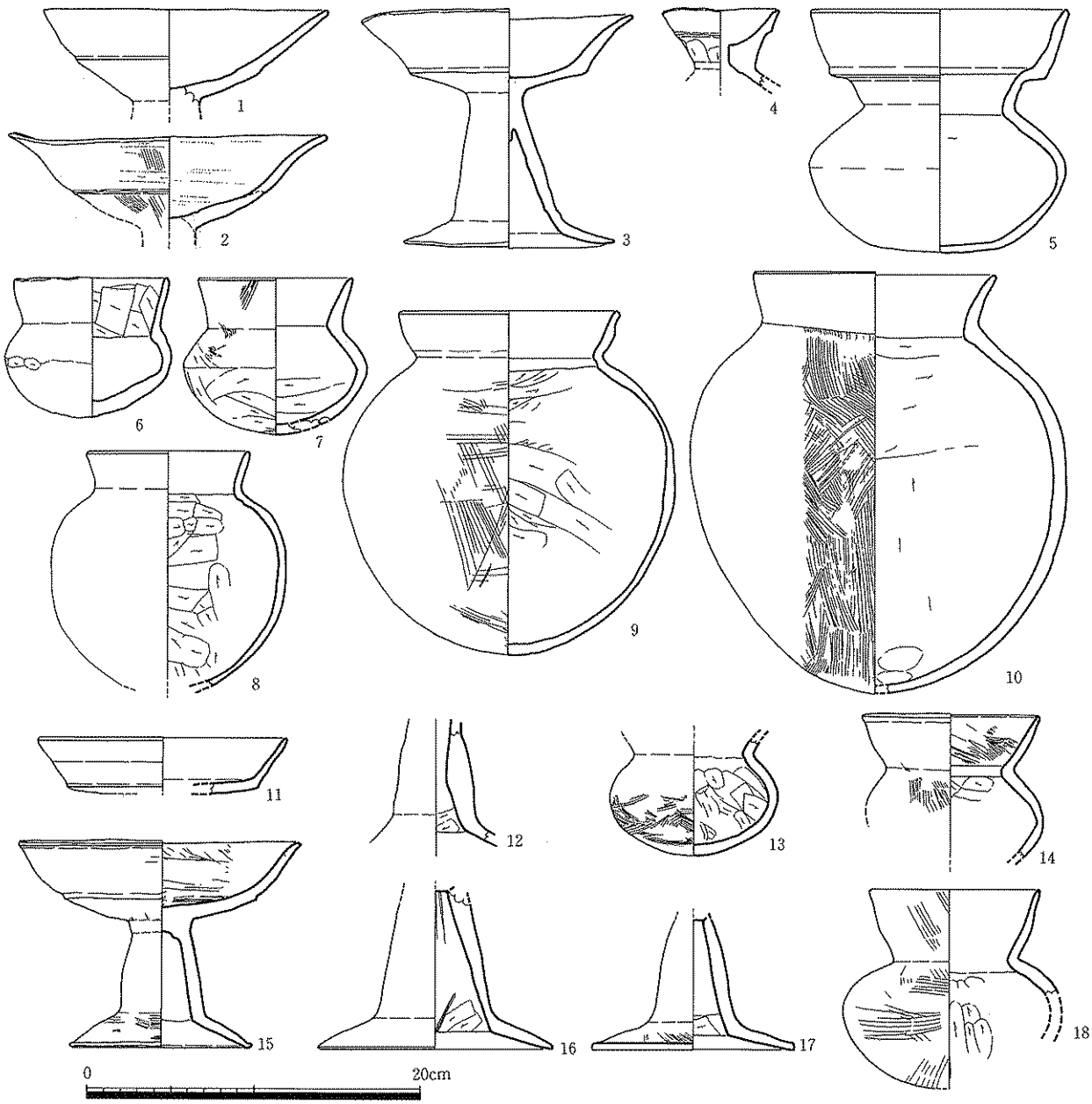


図21　223・378号竪穴住居址出土遺物実測図（1/4）



は軸がずれている．埋土には多量の焼土や炭・灰が含まれ床面上に炭化した柱と思われる建築部材も散在しており，223号は焼失住居と思われる．住居の中央には床面を浅く掘り窪めた炉があり，炉を中心として住居中央に硬化面も確認された．遺物は布留１～２式の頃であろう．

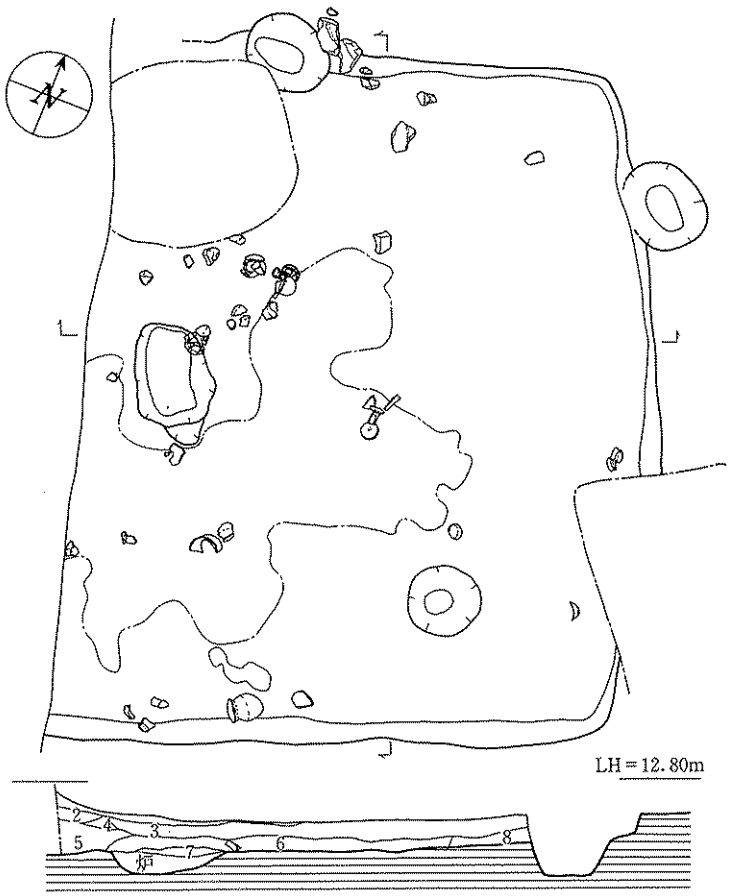
361号竪穴住居址

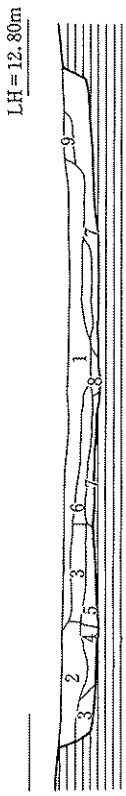
Ｖ区の南端で検出された．南半分が調査区外に延び，住居の西側は後代の遺構に切られている．現状では約３×2.6m，深さは残りの良い北東側で約0.4mである．軸の方向は223号竪穴住居址と同じである．撹乱が北東側の壁に沿って走るが，この撹乱より南西側は遺構の重複が著しく，この住居に伴うと思われる遺物はなかった．

378号竪穴住居址

Ｖ区で検出された．半分以上は現代の撹乱により削平されていた．北側半分は床面直上まで削平が及んでいたが，かろうじて住居の範囲は捉える事ができた．Ｖ区では同じ場所での住居の建替えを繰り返していたようで，378号住居址でも同様である．重複した住居を把握するのは困難だったため，ベルトを残し，埋土部分を下げて行った．最終的に確認した住居址のプランは下端で約4.8×5.3mの長方形である．軸の方向は208号住居址と同じである．隣接する365号溝を切っていることから，古墳時代の住居の上に，古代の住居が重複していると思われる．確実なものとして２枚の硬化面を確認した．

図22　404号竪穴住居址・出土遺物実測図（1/50・1/4）

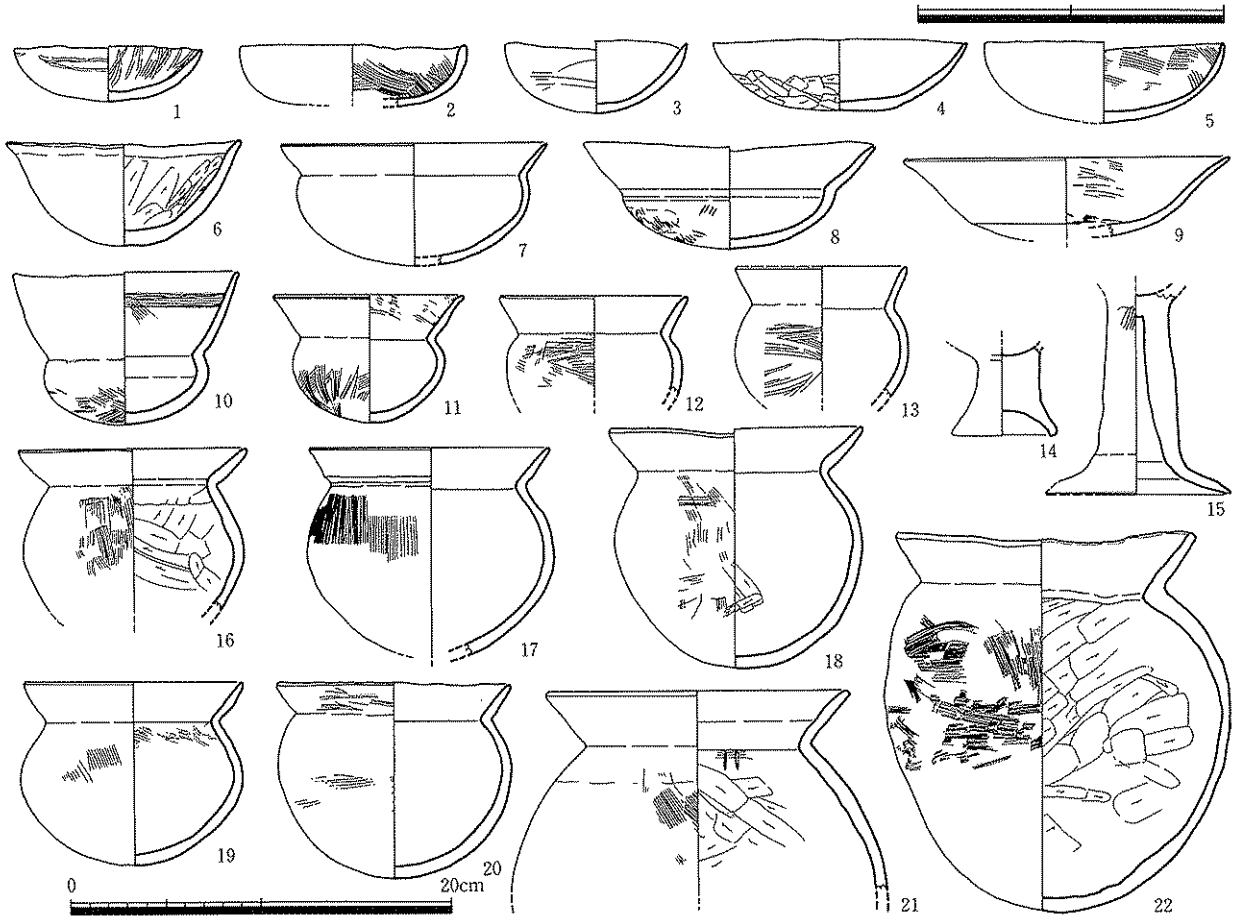




1．黒褐色混砂土層（10YR2/2）炭
2．黒褐色土層（10YR2/2）焼土・炭
3．黒褐色土層（10YR2/3）
4．黒褐色混砂土層（10YR2/3）
5．黒褐色混砂土層（10YR2/2～10YR2/3）炭
6．黒褐色土層（10YR2/2）
7．黒褐色土層（10YR2/2）焼土
8．黒褐色～暗褐色土層（10YR2/3～10YR3/4）

1．黒褐色混砂土層（10YR2/2）
2．黒褐色混砂土層（10YR2/2）炭
3．黒褐色土層（10YR2/3）
4．黒褐色土層（10YR2/3）
5．黒褐色土層（10YR2/3）
6．黒褐色土層（10YR2/2）
7．黒褐色土層（10YR2/2）
8．黒褐色土層（10YR2/2）
9．黒褐色土層（10YR2/2）

0　2 m



Ⅱ－3　０１０４調査地点

１つは住居の肩と思われるところから30cm程の深さで検出し，遺物は図21－12・15が伴う．もう１つはその下20cm程で検出し，遺物は図21－13・14・16・17が伴う．下の床面では炉も検出された．この床の硬化面の下から2.5m四方の掘込みと１m弱の土壙状の浅い窪みを検出した．

404号竪穴住居址（図22）

Ⅴ区の，調査区が南に折れるコーナー付近で検出された．西南壁が調査区外に延びる．現状では約4.5×3.8m，深さ約0.25mである．軸の方向は北西である．208号竪穴住居址や378号竪穴住居址とほぼ同じ方向である．南西隅には古代の368号竪穴住居址の竈が接している．また北西隅には撹乱の土壙と，438号土壙が404号住居を切っている．住居址のやや西よりに，床を浅く掘った炉が１基とその周辺で硬化面を検出した．遺物は鉢・高坏・小型丸底壺・甕などで，布留１～２式であろう．

古代の竪穴住居址

９号竪穴住居址（図23）

Ⅱ区で検出した．Ⅰ～Ⅲ区は遺構面が浅く遺構の多くが上部を削平されており，9号竪穴住居址の壁も遺存していたのはわずか数cmで，ほぼ床面のみが残っている状況であった．東半分は撹乱により削平され，南側は10号竪穴住居址によって切られる．現状では，北壁1.4m，西壁2.7mである．北壁に竈が造られており，西半分が残っている．住居址の軸は南北方向である．9901地点の52号竪穴住居址も同時期のものと思われ北壁中央に竈を造っている．9号竪穴住居址の北壁を，竈を中心に復元すれば52号竪穴住居址や9901地点の291号竪穴住居址と同様な規模になる．９号住居址では土器片と共に小型仿製鏡の所謂破鏡が出土したが（図26－10），住居址の埋土は撹乱を受けている可能性を否定できない状況であり，遺構と遺物の年代を照らしても９号住居址に伴うものとは考えられない．

10号竪穴住居址

９号住居址の南側で検出された．9号住居址を切っている．西側が撹乱により破壊され，南半分は調査区外に延びる．北壁に竈を造っている．西壁の推定ラインから復元してみると，9号住居址に比べ小型である．

15号竪穴住居址

Ⅱ区のやや西側で検出した．全体のほとんどが撹乱によって破壊されており，規模は不明である．住居の軸の方向は南北を向いている．南東隅にあたる部分に竈の跡と思われる焼土や，竈の袖石の砕片が残っていた．

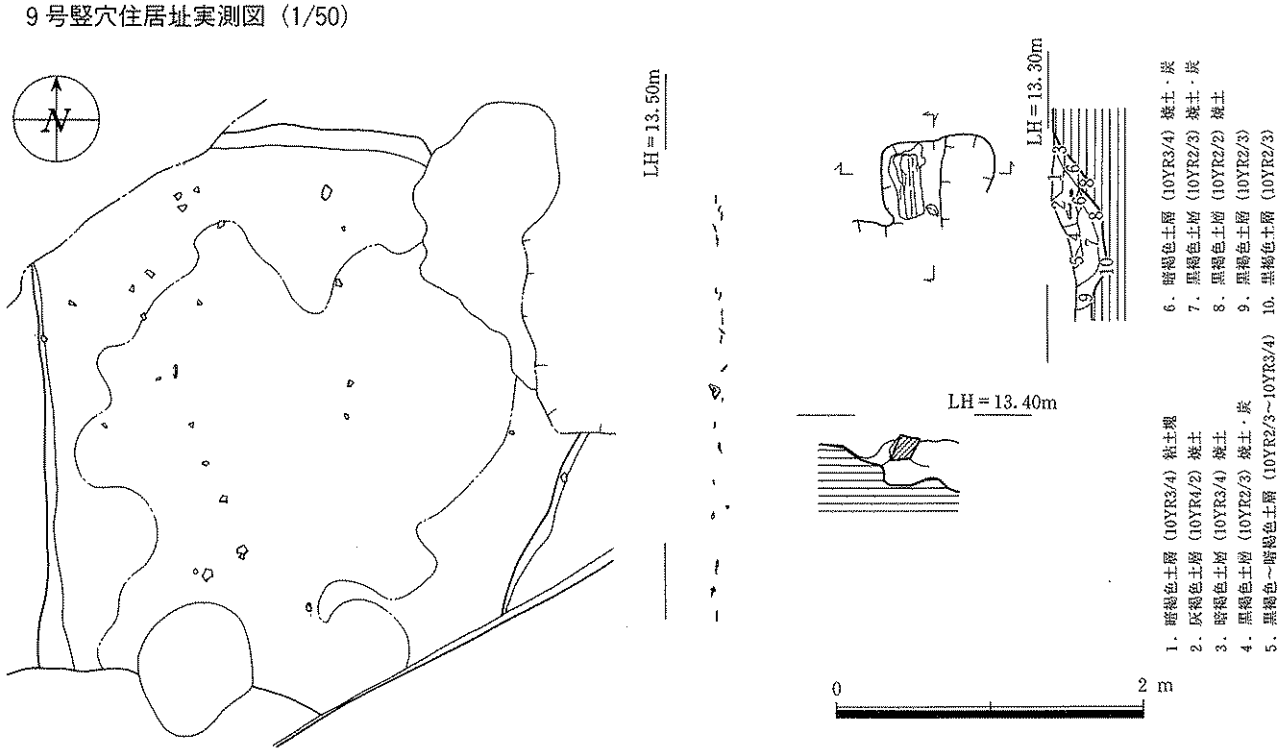
29号竪穴住居址

Ⅲ区中央北部で30号溝覆土の上に営まれた竪穴住居址である．埋設管の掘り方によって南辺と東辺を破壊されている．長軸はおよそ４mほどになるものと推定される．東北部に竈付近の焼土が散乱しており，その中から甕形土器片が，中央の硬化面直上と北西端の壁付近から土師器の坏がそれぞれ１点ずつ出土している．

31号竪穴住居址

Ⅲ区の29号竪穴住居址の東側で検出したもので，南半分は埋設管の掘り方によって破壊されている．長軸はほ

図23　９号竪穴住居址実測図（1/50）



Ⅱ－３　０１０４調査地点

ぼ東西方向で，西辺中央に竈がある．長軸の長さはおよそ５ｍである．硬化した床面は検出できなかった．竈は砂岩ブロックで両袖部の基礎石とするもので，中央には砂岩製の角柱で支脚をしつらえていた．崩壊した竈土の中から土師器の甕形土器片など数点の遺物が出土した．

32号竪穴住居址

Ⅲ区の31号竪穴住居址の東４ｍほどのところで検出した．大半を埋設管やマンホールの掘り方によって破壊されており，北半部しか残存していなかった．住居の幅は4.4ｍである．住居の軸は他の29・30号竪穴住居と異なり若干東へ傾いている．北辺の中央西寄りに竈が設けられている．竈は残存状況がよく，袖には幅20cm，長さ50cm，厚さ15cmあまりの大型の砂岩が横に据えてあった．中央にも砂岩製の支脚の一部が残っていた．竈周辺から土師器の甕形土器や坏，須恵器の甕形土器片などが出土した．

216号竪穴住居址

Ⅳ区の北側で検出した．208号竪穴住居址とちょうどはす向かいになっている．大半が調査区外に延び，また撹乱によって検出部分の中央を破壊されている．現状で２×２ｍである．住居の軸は208号住居など古墳時代の竪穴住居と同じであるが，216号住居の北壁に竈が造られており，遺物からもこれは古代の住居と判断される．

161号竪穴住居址

Ⅱ区の西端で検出した．約５×4.6ｍの住居である．軸方向は南北である．東側半分を大きく撹乱により破壊されている．東側半分はプランを把握するのは容易だったが，西側半分は遺構の重複により埋土からプランを把握する事はできず，床面近くでようやく規模を把握できた．東壁中央に竈が造られていた．

256号竪穴住居址

Ⅱ区の西端で検出された．大半は調査区外に延びる．南東隅を161号竪穴住居址が切っている．現状では約２×３ｍ，深さは残りの良い部分で0.2ｍである．軸の方向は南北を向いている．

276号竪穴住居址

161号竪穴住居址の南側に隣接する位置にある．西側のⅤ区で検出された377号竪穴住居址と同一の住居であろう．Ⅳ区ではプランや掘り方が明確であったが，Ⅴ区ではやや不明瞭であった．南半分が調査区外に延びる．軸の方向は南北である．

307・318号竪穴住居址

Ⅴ区の南側で検出された．東側を撹乱により破壊されている．307号住居址の内側で入れ子状に318号竪穴住居址が検出された．現状で307号が約2.1×１ｍ，318号が約5.2×0.7ｍである．いずれも軸は南北であるが，307号竪穴住居址は若干西に傾く．

368号竪穴住居址

Ⅴ区の中央部で検出した．調査当初，プランの把握が上手く行かず細部において不手際もあったが，最終的にはプランを確定できた．現状で約2.6×2.4ｍ，深さは約0.25ｍである．東壁の一部は調査区の壁にかかる．西壁中央に竈が造られている．

400号竪穴住居址

Ⅴ区の北東で検出された．北半分は調査区外に延びる．現状で約2.1×３ｍで深さは0.2ｍほどである．軸は南北を向いており，161号竪穴住居址と同様な住居と思われる．

このほか364号竪穴住居址はⅤ区の中部，365号溝に囲まれるように調査区の西壁に接して検出された．ほとんどが調査区外に延びるが，軸は南北を向いているようであり，やはり古代の住居址と思われる．378号竪穴住居址の北側に隣接してしている384号竪穴住居址は，古墳時代の住居址の軸と同じ方向であるが，埋土の様子から378号竪穴住居址の上に形成されており，遺物などからも216号竪穴住居址と同様古代の住居と考えられる．368号竪穴住居址は404号竪穴住居址の南壁に沿って形成されている．南側を撹乱により破壊され，竈部分のみが遺存していた．

＜掘立柱建物＞

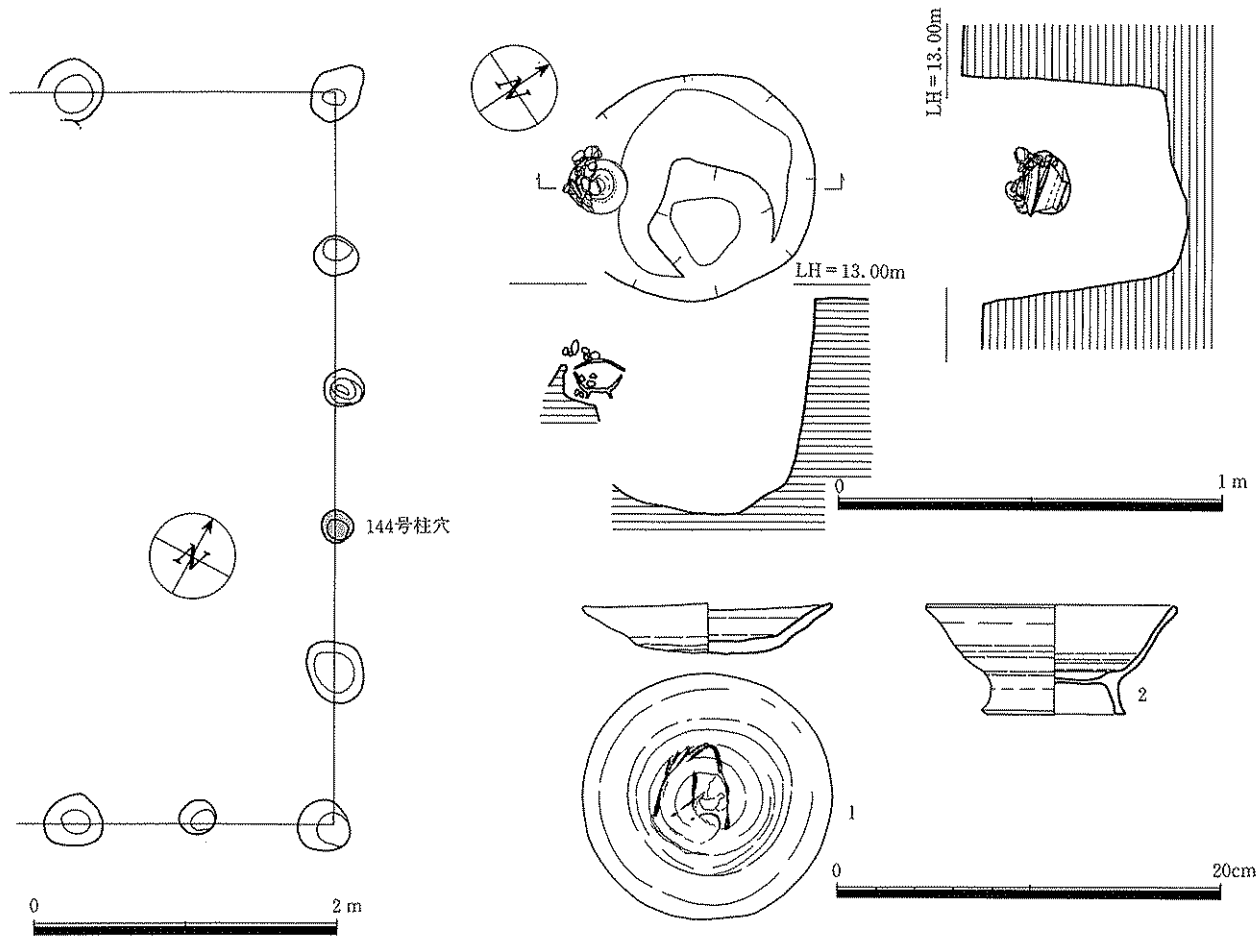
１号掘立柱建物（図24）

１号掘立柱建物はⅣ区の中央部で検出された．建物の長軸は南北方向より，やや東に傾いている．西側が調査区外に延びるが，現状で５間×２間以上の建物である．この柱穴のなかで，144号柱穴で地鎮祭を行なったと思われる遺物が出土した．柱穴の壁の途中に壁龕状の棚をつくり，土師器の椀・蓋を置き，その上に２～３ cm大の小石を敷いていた（図24）．土器の中にも小石が数個入っていた．石についてはまだ精査を行なっていない．土師器蓋には墨書がある．土器は９世紀前半のころの所産と思われ，１号掘立柱建物もこの時期のものであろう．

２・３号掘立柱建物

５区の南端で検出した．撹乱による破壊と，調査区外に延びるため全体は不明である．建物の方向は南北から西に傾いており，１号とは時期を異にすると思われる．9901調査地点で西北部に位置し，この２・３号建物と位置的に近い501号掘立柱建物と同じ方向のようである．

図24　1号掘立柱建物・144号柱穴・出土遺物実測図（1/50・1/20・1/4）



＜井戸＞（図25）

379号井戸はⅤ区の南西隅で検出された．361号竪穴住居址の上には，硬化面で範囲確認した321号と323号竪穴住居址があったが，井戸は323号住居址の床面下から検出された．361号住居址の床面を切っている．全体の1／3程が調査区壁にかかる．上部は柱状の石が置かれていたり遺物・灰・焼土も多く当初は墓と考えたが，掘り下げるにしたがい井戸であることが分かった．

埋土を順次掘り下げたが，沈殿物層などは確認されなかった．また，井戸の壁には掘削のために井桁を組んだような跡や，井戸枠を設けたような跡も検出されなかった．

井戸からは土器類や貝殻などの自然遺物が出土した．遺物は各層で見られたが，ある程度集中して出土する傾向があり，不用になったものをまとめて廃棄したようである．遺物の種類は土師器・須恵器・鉄製品（刀子）などのほか，食物残滓が多く含まれていた．特に12層は貝からなり，土嚢約30袋分の量になった．調査室で水洗選別を行なったところ，7種類程の貝類があったほか，小動物の骨も検出された．また，亀の腹甲があり甲板が本来の配列通りに出土し，食に饗してすぐに廃棄されたものと考えられる．

井戸の上部には灰・焼土・骨紛などが堆積していたが，これらを当初は墓と考えた．しかし井戸であると判明し，他の遺跡の調査例などから，これらの焼土や灰は井戸を埋め，廃棄した際に行なわれた祭祀の痕と考えられる．

＜その他の遺物＞（図26）

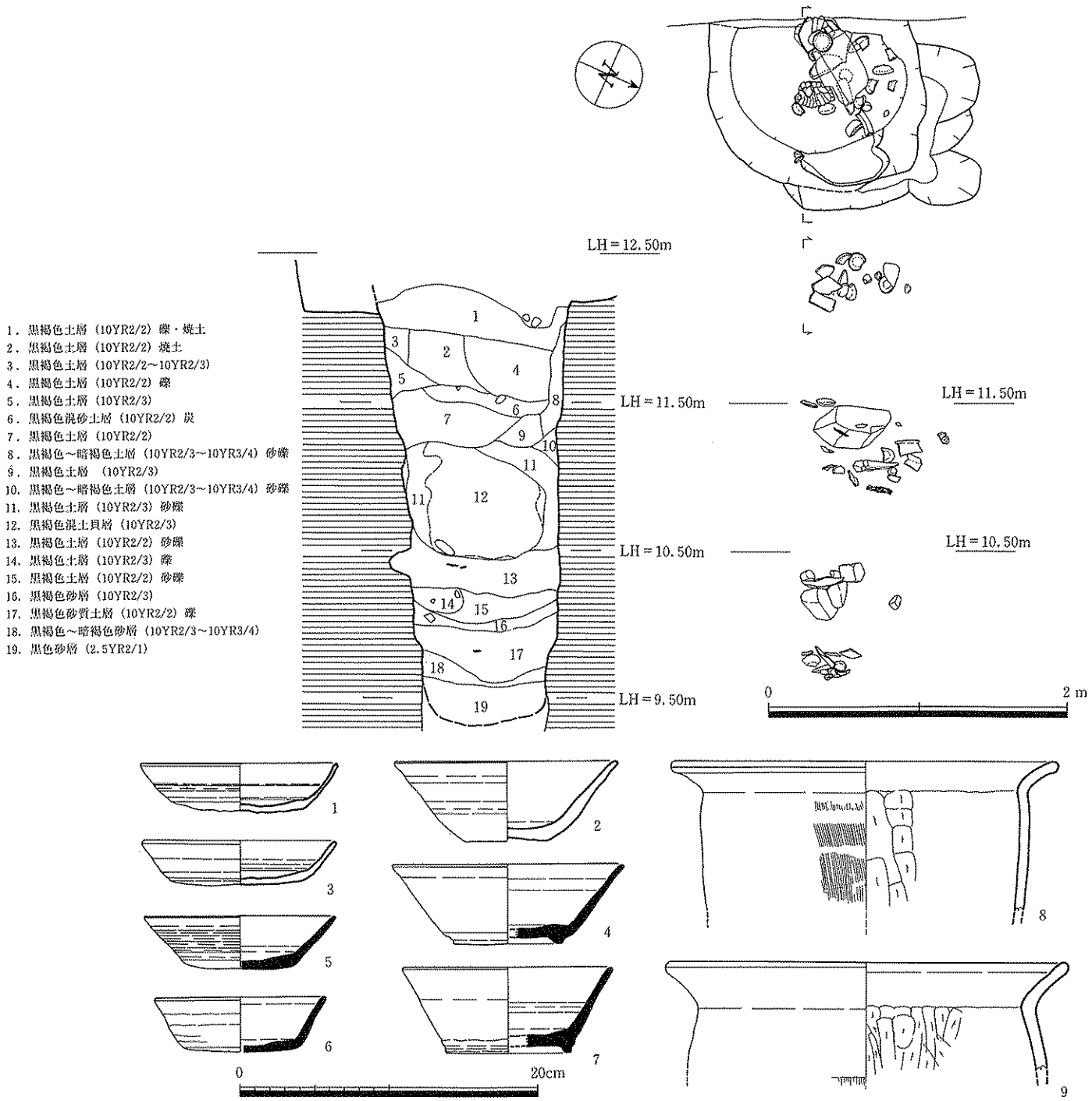
鏡

先述したように，9号竪穴住居址の範囲内で小型仿製鏡の破片が出土した．大きさは全体の1／6程である．復元径は5.4cmほどである．銅質は良い．平縁で厚さは1.6mmである．背面の文様構成は，縁の内側に櫛歯文がある．櫛歯文は斜行というよりは，放射状に広がる．錆により内区の文様は判然としない．乳のような突起らしいものもあるが定かではない．内行花文日光鏡系か，重圏文日光鏡系であるのか判然としないが，時期は弥生時代中頃～末であろう．

土製錘

Ⅳ区の204号ピットから土製の魚網錘が10数個出土し

図25　379号井戸・出土遺物実測図（1/40・1/4）



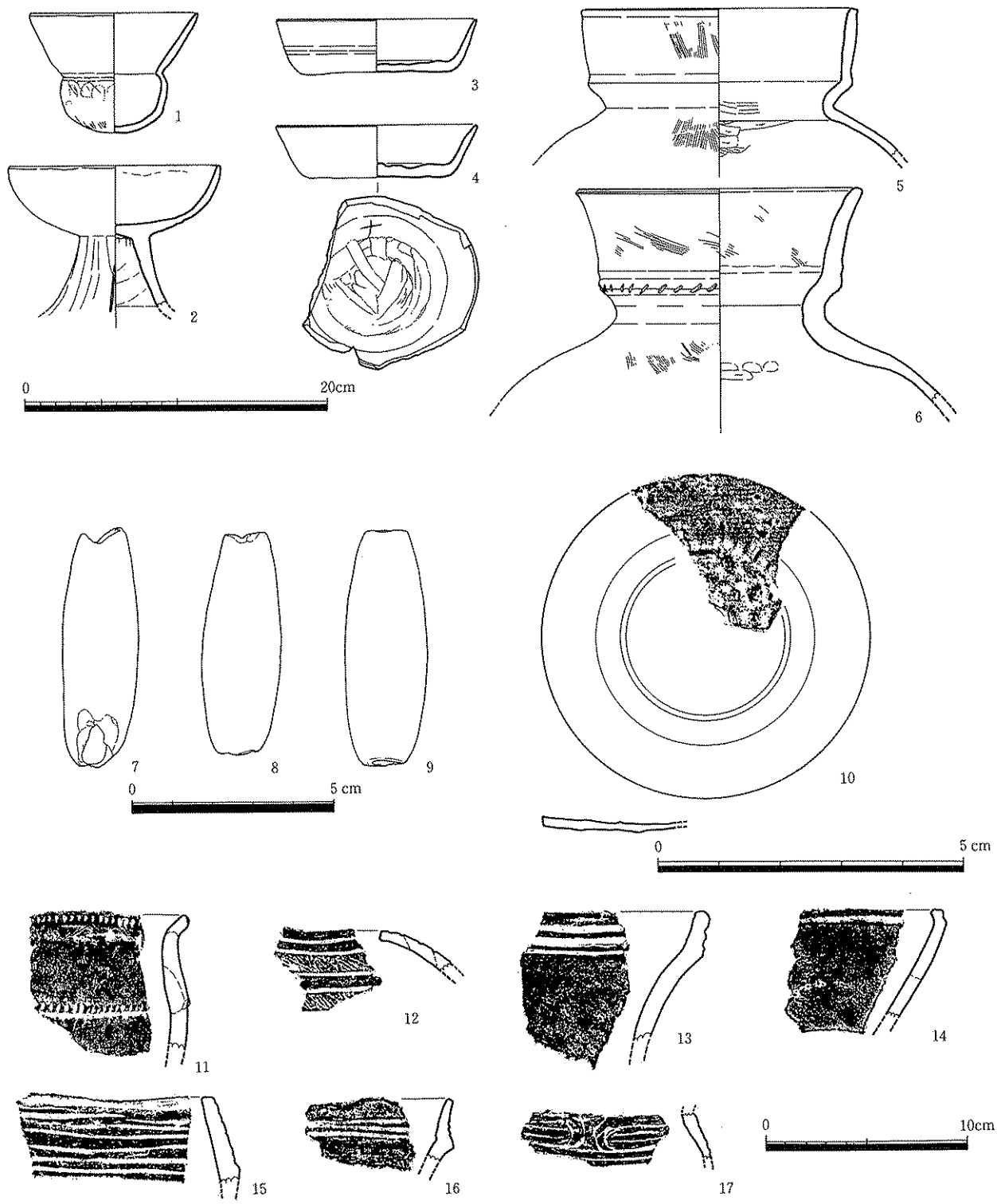
た．おそらく，網を折りたたんだ状態でピット内に納めていたものと考えられる．

このほか，調査区では刀子・鎌・釘などの鉄製品，青銅製の銙帯，墨書やヘラ書きによる文字が入った土師器，黒曜石の剥片や縄文時代後・晩期の土器片も出土している．

4. 成果と問題点

1999年度の調査で病院敷地の北西側に古代の集落とともに，古墳時代前期の住居址群が確認され，さらに2000年度にはこれらの集落が敷地いっぱいまで広がり良好な状態で遺存していることが確認されていた．これらの結果から，今回の調査地点では密な遺構と遺物が検出されることが予想され，果たしてその通りであった．

図26　その他の出土遺物実測図（1/4・2/3・1/1・1/3）



これまでに述べてきたように，多くの遺構と遺物を検出し，9901調査地点や0006調査地点で確認した各時代の集落がさらに北側に広がる事を再確認した．

今回の調査で注目されたのは古代以前の溝である．調査区を横切る形であったため，部分的な把握であったが走行の方位に特異なものもあり，また遺物が豊富でしかも層位により時期の細分が可能なものがある．

125号溝は弥生時代前期の土器を伴出し，付近一帯での当該時期の遺構の初の検出例となった．また，30号溝はＬ字に曲がり特異な様相を見せている．222号溝でも

遺物が多量に出土したが，現在調査中の0119調査地点で続きを検出した．222号溝では主に古墳時代前期の布留式を中心とする土器群が出土し，堆積状況から古墳時代前期に掘削されたものと考えていたが，0119調査地点で，弥生時代終末の壷，布留式より古い形式になる古墳時代初頭の庄内式の甕が出土し，掘削の時期はこれまで考えていた時期より遡る可能性が出てきた．これまでの調査地点での成果と合わせ，各遺構の配置について検討し今後の調査に活かしたい．このようにここ数年の調査で，調査ごとに新たな発見を重ねているが，一方で遺物の精査が滞っている．遺物整理の体制の充実が大きな課題である．

調査区が狭長で広範囲に及んだ事は，付近一帯の旧地形を推し量るに良い材料となった．過去の試掘である程度予想されていたことであるが，包含層・遺構面（地山）は東から西に向かって傾斜しており，包含層や遺構の遺存の程度に大きく影響している．Ⅰ～Ⅲ区に相当する一帯は包含層や遺構面が浅いため検出されやすく，またⅣ～Ⅴ区付近は良好な状態で遺構・遺物が遺存している可能性が非常に高いことを確認した．これらを，今後の立会調査・発掘調査の参考としたい．

写真６　125号溝（南東より）

写真８　14号溝（北西より）

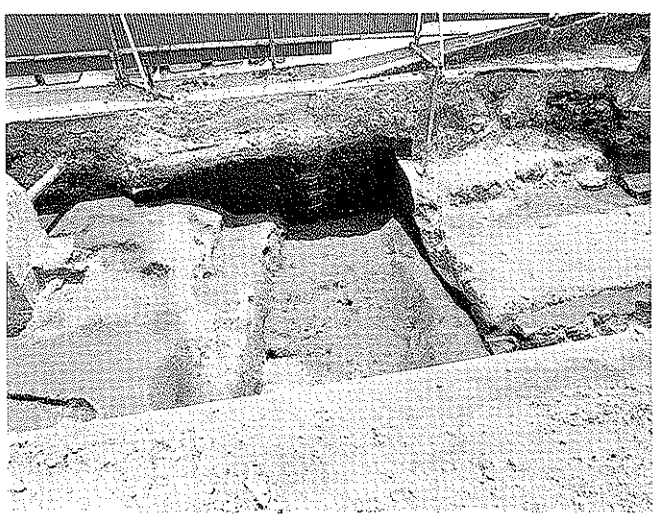


写真７　30号溝遺物出土状況（北東より）

写真９　222号溝（北西より）

写真10　222号溝遺物出土状況（南西より）

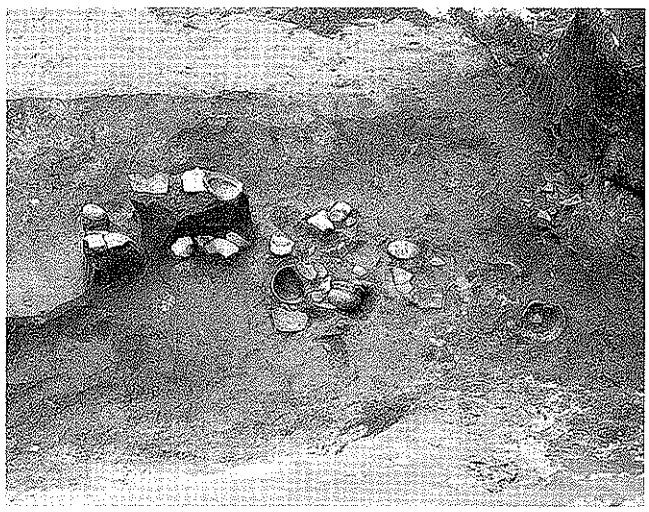


写真11　365号溝（東より）

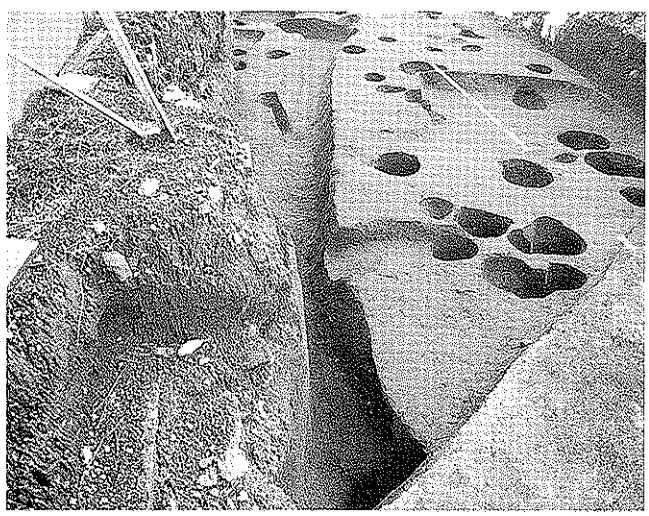


写真12　208号竪穴住居址（東南より）

写真13　223号竪穴住居址遺物出土状況（北東より）

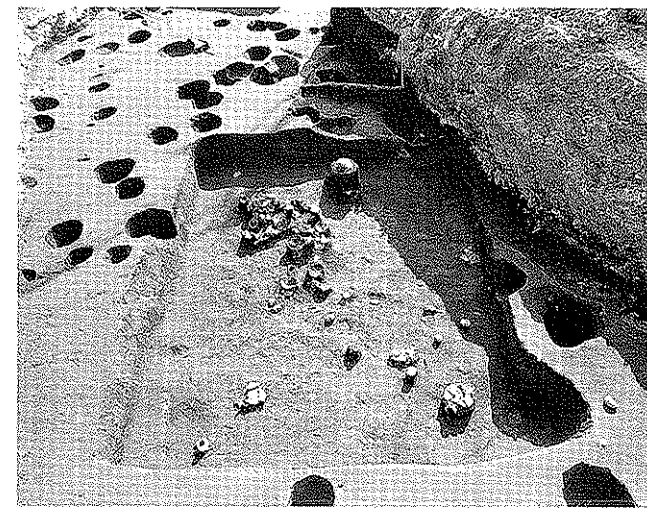


写真14　361号竪穴住居址・379号井戸（北より）

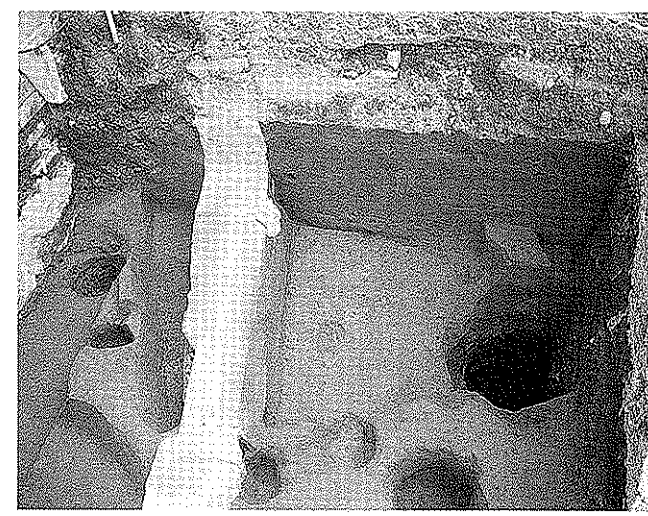


写真15　378号竪穴住居址（東より）

写真16　404号竪穴住居址遺物出土状況（北東より）

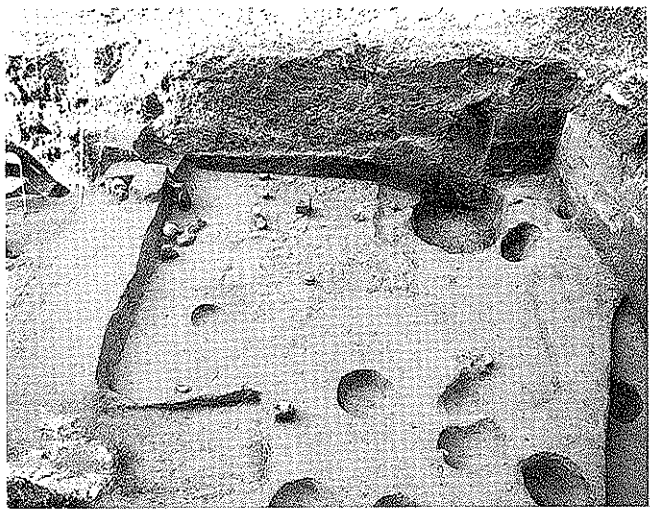


写真17　9号竪穴住居址（南より）

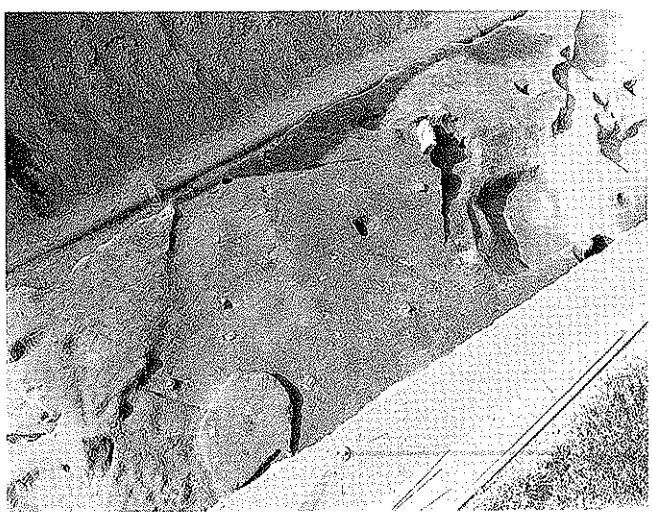


写真18　9号竪穴住居址内破鏡出土状況（南より）

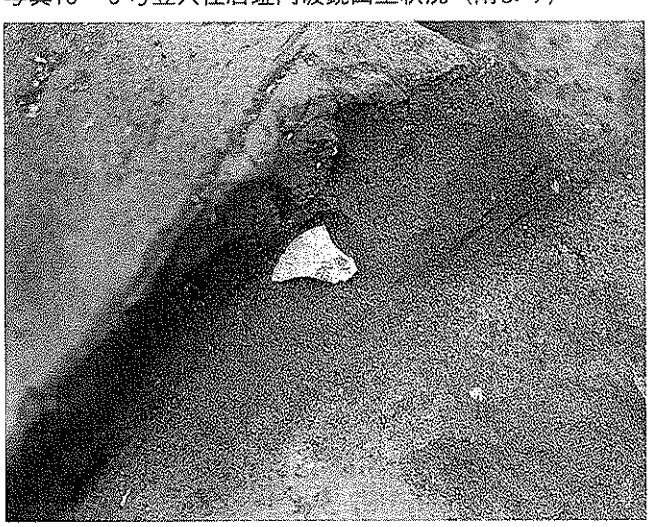


写真19　29号竪穴住居址（西より）

写真20　31号竪穴住居址（南東より）

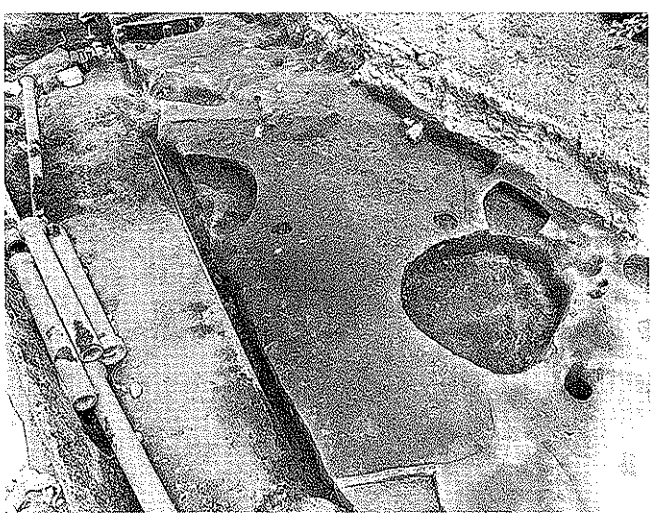


写真21　32号竪穴住居址（南西より）

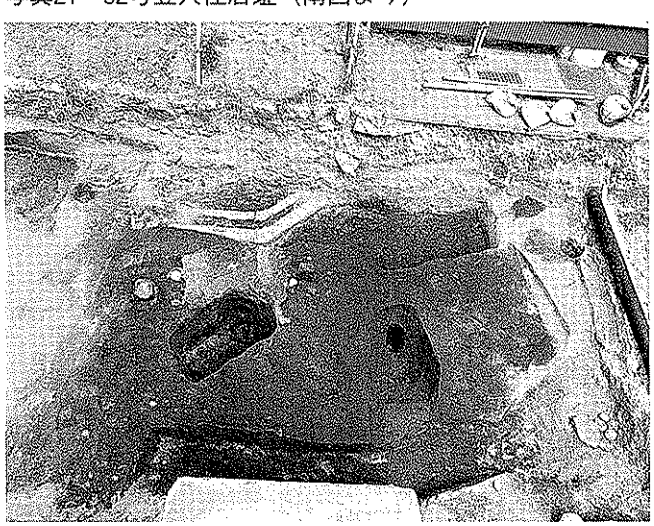


写真22　161号竪穴住居址（南東より）

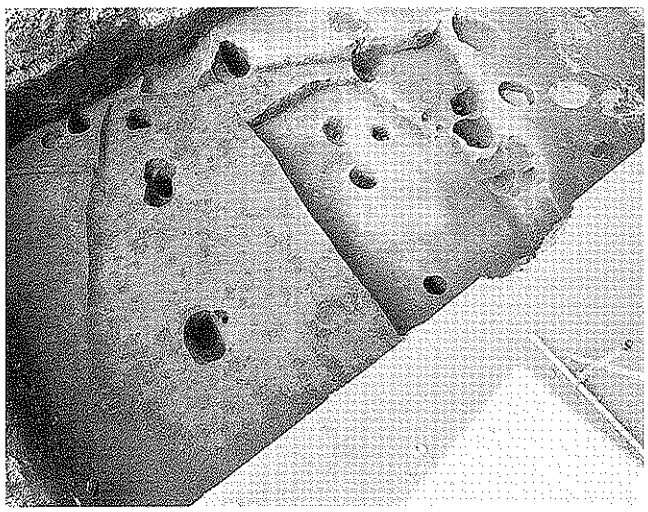


写真23　216号竪穴住居址（南西より）

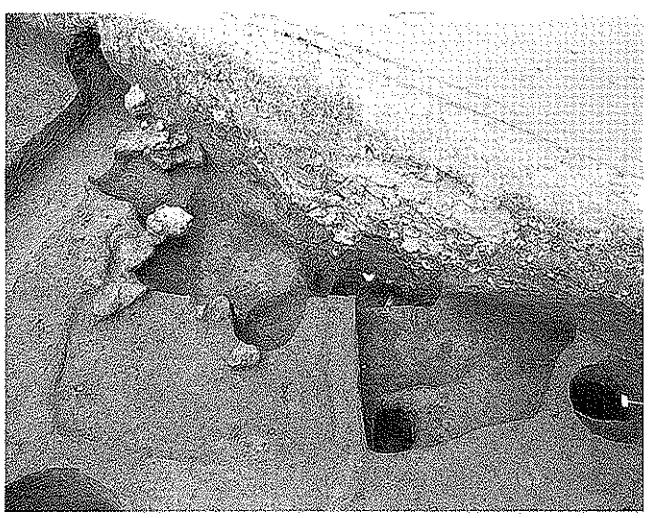


写真24　400号竪穴住居址（東より）

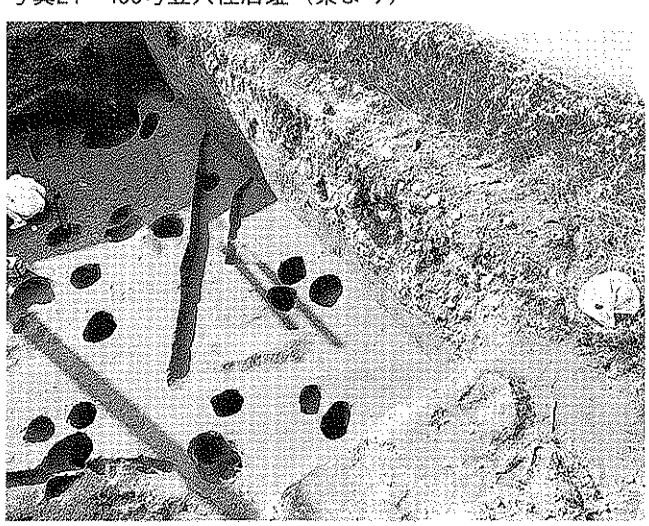


写真25　1号掘立柱建物（南より）

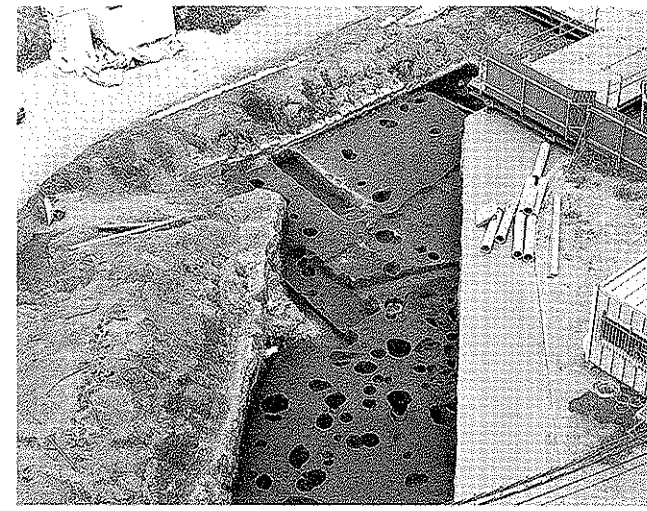


写真26　144号柱穴内地鎮具（北より）

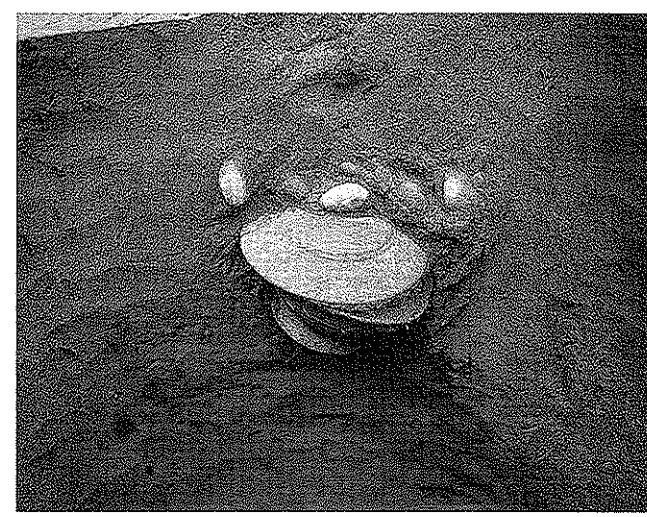


写真27　379号井戸土層断面（東より）

第Ⅲ章　立会・試掘調査

Ⅲ—1　黒髪北地区　（図27参照）

1. 大学教育研究センター等改修工事に伴う立会調査（0106）

＜調査期間＞

2001年7月30日～11月14日

＜調査対象面積＞

3,907㎡

＜調査員・参加者＞

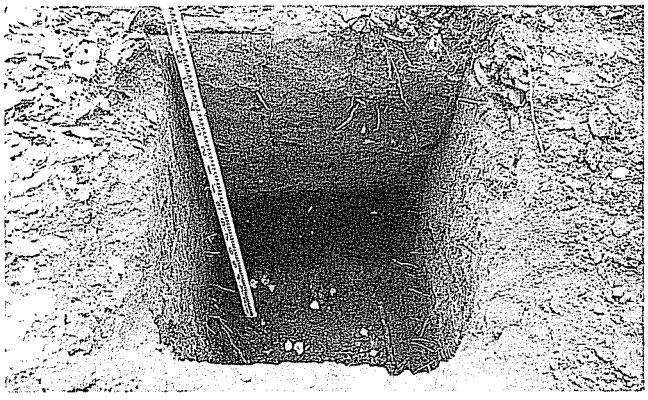
小畑弘己・田代理恵.

＜調査概要・結果＞

大学教育センター棟の改修に伴い周辺の駐車場整備・外灯取付け・舗装整備などに係わって立会調査を実施した．調査回数も掘削範囲の規模も大きな立会調査ではあったが，大半は掘削深度が浅く，掘削は現代の撹乱層内で収まるため，遺構・遺物は発見されなかった.

うち，外灯設置に伴う調査は，掘削深度が1.8m余りと深く，土層の記録を実施した．うち2箇所（P 1・P 3）において地表下1m余りで古代包含層を確認した．P 3においては柱穴状の遺構を壁面で確認した．一帯の基本層序は，地表下60cmまで現代の埋土層（1・2層），その下部70cmまでが古代の包含層である黒褐色土層（3層：5 YR 3/1），その下部85cmまで黒褐色土層（4層：10YR 2/3，地点によっては認められないところもある），その下部が暗褐色土層（5層：10YR 3/3）であり，遺構は4層ないし5層に切りこんでいる．これら古代の遺構面がより低い黒髪団地南地区などの黄色褐色土層に相当し，北地区ではこの4・5層から縄文時代早期の遺物が出土する．今回の調査では遺物等は出土していない.

写真28　外灯基礎坑（P 1）土層（西より）



2. キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0109）

＜調査期間＞

2001年8月2日・8月21日

＜調査対象面積＞

58㎡

＜調査員＞

小畑弘己.

＜調査概要・結果＞

養護学校敷地内および本学北地区を結ぶ埋設工事に伴う立会調査である．幅50cm，深さ70cmで総延長115mの掘削範囲である．5箇所において土層を観察したが，いずれも現代の埋土であり，遺構・遺物などの発見はなかった.

3. 北地区食堂南側テラス整備工事に伴う立会調査（0112）

＜調査期間＞

2001年8月22日・9月4日

＜調査対象面積＞

662㎡

＜調査員＞

大坪志子.

＜調査概要・結果＞

北地区食堂南側の空地にテラスを敷設する工事に伴い，立会調査を実施した．テラスは表土を10cm程度削って敷設する予定であったが，同時に設置する溝部分が最も深い掘削を伴うため，溝の敷設予定箇所3箇所を観察した．それぞれ0.5mほど下げたが，それまでは現代の埋土で，遺物包含層や遺構は検出できなかった.

写真29　掘削状況（南西より）

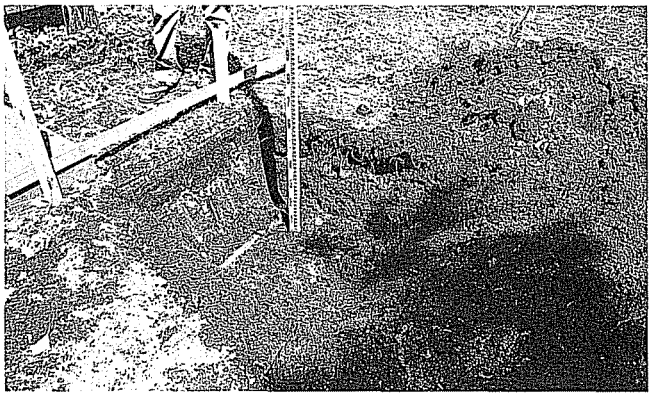


図27　黒髪北地区西半における調査地点配置図（1/2000）

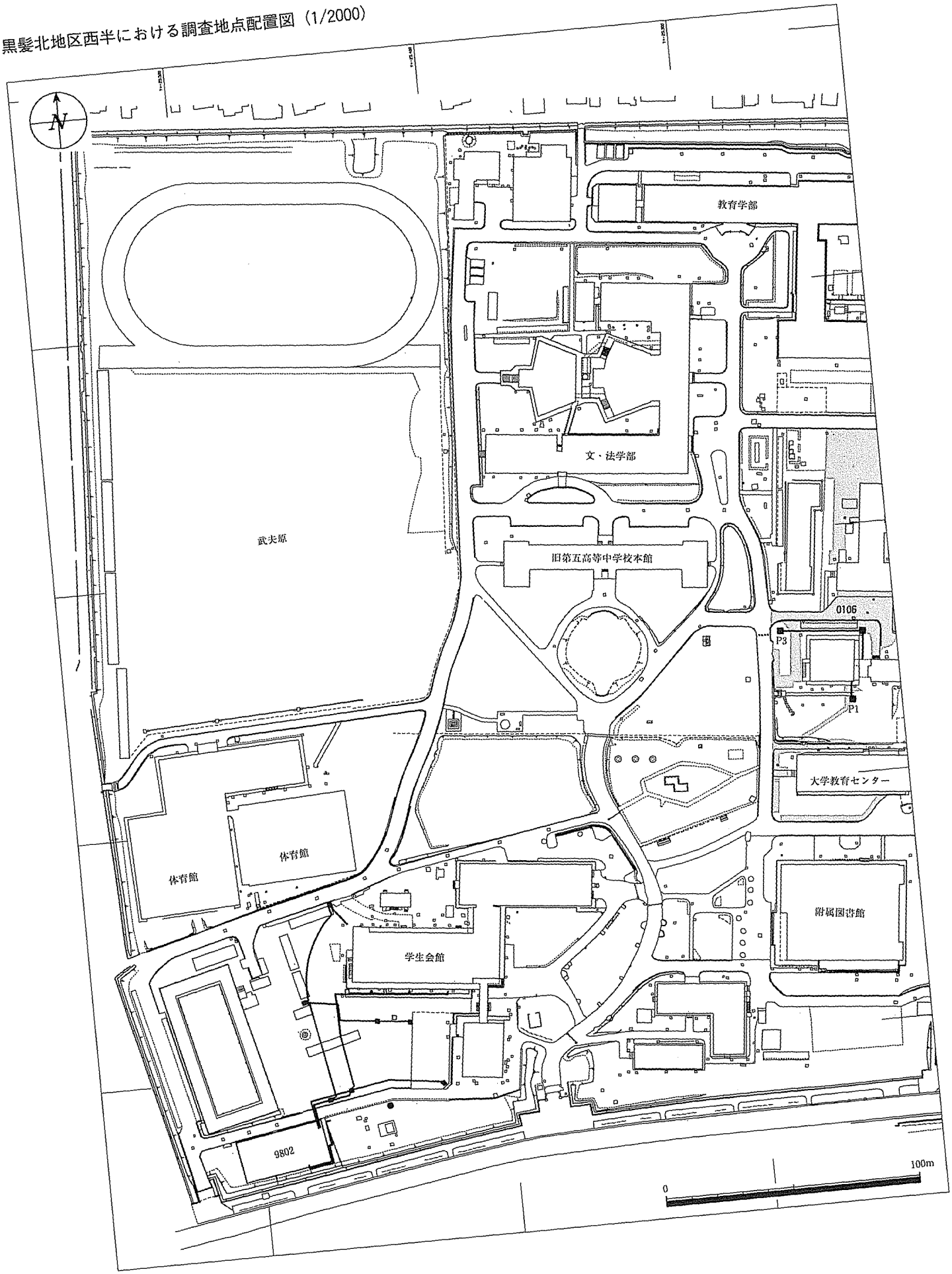
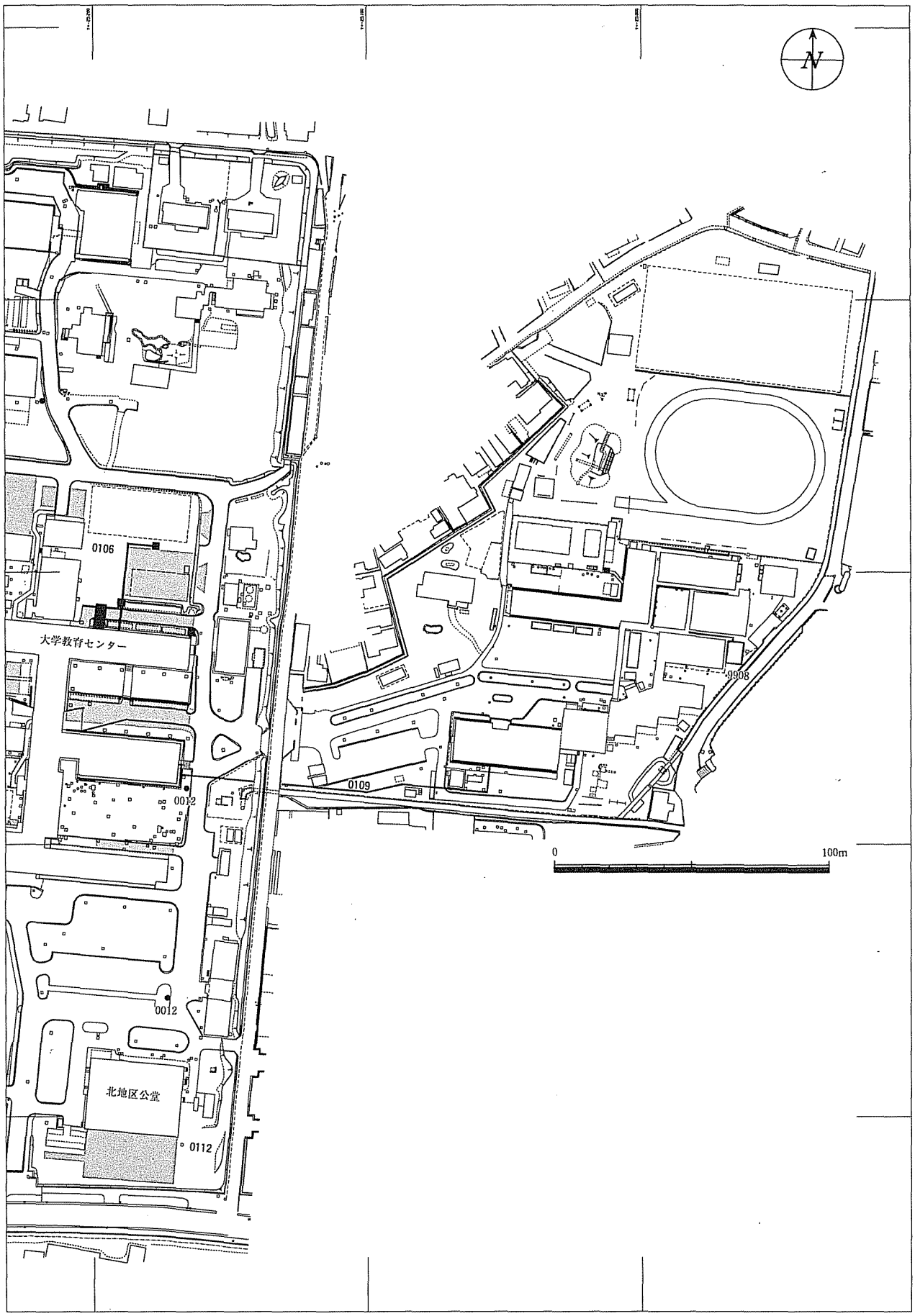


図28　黒髪北地区東半における調査地点配置図（1/2000）



Ⅲ—2　黒髪南地区　（図9参照）

1. 基幹・環境整備に伴う試掘調査（0102）

＜調査期間＞

2001年5月14日

＜調査対象面積＞

4.8㎡

＜調査員＞

大坪志子.

＜調査概要・結果＞

特高受変電設備等工事に伴う試掘調査を実施した．周辺での既往の調査地点には9603地点と9704地点，9802地点があり，本調査地点の南100mに位置する9603と9704地点では古代の堀で囲まれた掘立柱建物群と弥生時代甕棺群などが検出され，道路（国道57号線）を隔てた9802地点では縄文時代早期～弥生時代中期の遺物包含層および近代の東西方向の堀が検出されていたため，発掘調査を想定して，1次掘削の深度を知るために実施した．

調査の結果，本地点も9603地点や9704地点と同じく，大正期に運動場として利用されていたため，2m余り削平されていることが判明した．しかし，周辺の発掘調査の結果から本地点でも遺構が残存している可能性が高いため，本調査を行うことを決定した．本調査の内容についてはⅡ－2章を参照されたい．

2. 理学部2号館南側排水工事に伴う立会調査（0115）

＜調査期間＞

2001年10月19日

＜調査対象面積＞

8.4㎡

＜調査員＞

小畑弘己.

＜調査概要・結果＞

理学部2号館の南側駐車場の排水工事に伴って実施した立会調査である．幅30cmで深さが40cm，総延長28mの掘削規模であった．立会の結果，掘削深度が浅いため，掘削は現代の埋土の範囲内に収まり，遺構・遺物は認められなかった．

3. 基幹・環境整備に伴う立会調査（0118）

＜調査期間＞

2001年12月12日・2002年1月15・2月4日

＜調査対象面積＞

111.7㎡

＜調査員＞

小畑弘己.

＜調査概要・結果＞

特高受変電設備建物（0102地点）前の植栽・同施設の排水管付設，総合情報センターと工学部研究資料館の間のインターロッキング補修に伴う立会調査である．植栽に関しては，対象面積は30㎡ほどであるが，掘削深度が40cmほどで，特高受変電設備建物の発掘調査の所見によれば，完全に現代の埋土の範囲内であるので，排水管の排水桝部分とインターロッキング補修に係わる雨水排水桝の設置部分に関して立会調査を実施した．

その結果，排水桝部分では地表下1m余りで茶褐色の乱れていない地山土層が認められたが，遺構や遺物は認められなかった．また，インターロッキングのL型収水桝の設置部分（掘削深度90cm）で，深さ80cmほどで黒褐色の古代の遺物包含層と同じ土層が観察されたが，ここにおいても遺物・遺構などは検出できなかった．

立会の結果からみて，旧運動場による掘削の影響は工学部7号館の東側道路部分が東の境界と考えられる．

写真30　排水管掘削部土層（南より）

写真31　排水管人孔掘削坑土層（北より）

Ⅲ—3　本荘北地区　（図3参照）

1.（医病）キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0114）

＜調査期間＞

2001年9月17日

＜調査対象面積＞

38㎡

＜調査員＞

小畑弘己.

＜調査概要・結果＞

大学附属病院敷地内の南西部に相当する．医学部臨床研究棟と電話交換室横の人孔とを結ぶ，幅50cm，深さ70cm，長さ76mの掘削規模である．駐車場南と園地の境で土層を観察した結果，地表下65cmまで現代の埋土で，その下75cmまで茶褐色の砂質土層が認められたが，遺構・遺物はなかった.

写真32　配管掘削部土層（北より）

2. 基幹・環境整備（A～D地区ボイラー設備更新等）に伴う立会調査（0116）

＜調査期間＞

2001年10月22日～2002年2月19日

＜調査対象面積＞

426.4㎡

＜調査員・参加者＞

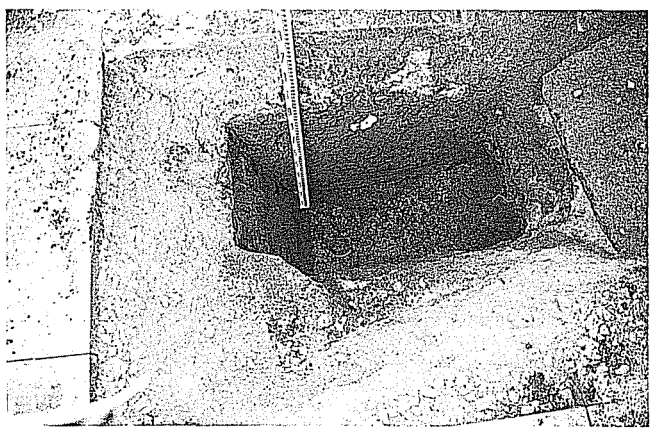
小畑弘己.

福田久美子，堀川貞子，森川征子，森川護.

＜調査概要・結果＞

大学附属病院敷地西側のボイラー設備工事に伴う立会調査である．南側から大きく1～7箇所に分れて実施された．幅は施工地点によって異なるが，深さは最深で1mである．いずれの地点においても現代の埋土もしくは近現代の畑土などで遺構・遺物は確認できなかった.

写真33　電気配管部2区土層（南より）



3. 医学部総合研究棟新営機械設備工事に伴う立会調査（0117）

＜調査期間＞

2001年12月8日～2002年2月9日

＜調査対象面積＞

133.1㎡

＜調査員・参加者＞

小畑弘己，大坪志子.

岡田イツ代，河野義勝，水上順子，松井昭子.

＜調査概要・結果＞

建設中の医学部総合研究棟（0101地点）に連結するガス・電気・給排水管の埋設に係わる立会調査である．幅2m，深さ1.2mに及ぶため，全地点において立会を実施したが，地点が多く，数回にわけて実施した．その結果，医学部総合研究棟北側は旧建物等による攪乱が激しく、削平もしくは破壊された状況であった。しかし、同建物の西側に相当する電気・ガス関連の5区およびガス

写真34　竪穴住居址検出状況（北より）

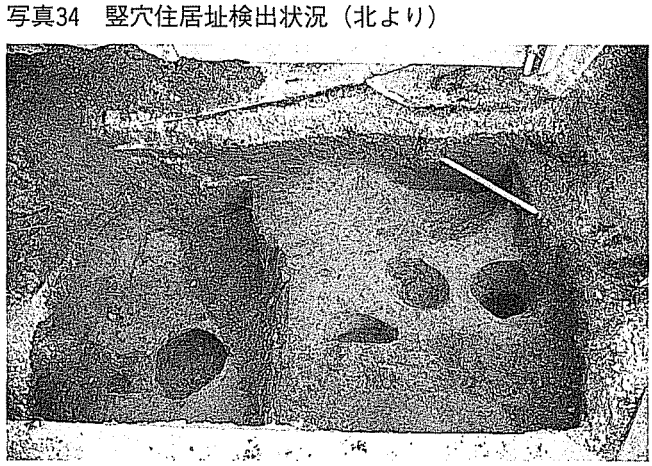
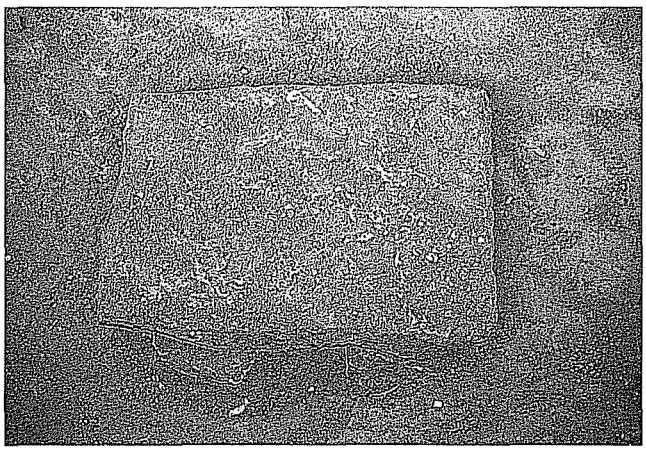


写真35　柱基礎石検出状況（南より）



管関連の１区においては、旧地形が西へ向けて低く傾斜するため、部分的な撹乱は認められるものの，遺構の残りは良好であり、地表下90cm 余りで竪穴住居址のコーナー部分や柱穴・柱基礎石などを検出した．若干の土師器・須恵器片などの古代遺物が出土した．

4. 医学部総合研究棟周辺環境整備工事に伴う立会調査（0120）

＜調査期間＞

2002年３月18日

＜調査対象面積＞

1,492.7㎡

＜調査員＞

小畑弘己．

＜調査概要・結果＞

大学病院敷地内の北東隅にあたる看護士宿舎と特別高圧受電棟の周辺の整備のための立会調査であり，掘削深度の深い収水桝と外灯設置のための掘削部（13.3㎡）の立会を行った．

その結果，地表下60cm までが現代埋土で，その下部は掘削深度の1.2mまで軟らかな褐色土層と灰色の砂層の互層であり，河川堆積物の状況を示していた．土層の締まり具合から，病院建設直前の比較的新しい時期の堆積物と考えられる．遺物の発見はなかった．

5. 附属病院西病棟新営工事（仕上Ⅱ）に伴う立会調査（0121）

＜調査期間＞

2002年３月18日

＜調査対象面積＞

1,076.4㎡

＜調査員＞

小畑弘己．

＜調査概要・結果＞

現在建築中の附属病院西病棟（9901地点）の周辺整備に伴う立会調査であり，既往の立会調査などから，地表下70cm ほどは埋蔵文化財に影響がないと判断し，もっとも深く掘削する建物西側の排水管設置部分（85㎡）を立会調査した．深さ1.8mまで掘削したが，1.6mまで撹乱層であり，その下は大きな溝中の堆積物の様相を示していた．遺物は出土しなかった．

6. 附属病院西病棟電気設備工事（仕上Ⅱ）に伴う立会調査（0122）

＜調査期間＞

2002年３月22日

＜調査対象面積＞

54㎡

＜調査員＞

小畑弘己．

＜調査概要・結果＞

附属病院敷地内南西隅の医学部電話交換室より延びる電気配線の工事であり，幅50cm，深さ70cm であるため，既往の立会調査からこの部分は影響ないものと判断し，人孔部分のみを立会した．その結果，地表下1.1mまで掘削したが，すべて現代の人工的な埋土であり，遺物・遺構は認められなかった．

Ⅲ―４　本荘南地区　（図29参照）

1. 中地区医学部キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0111）

＜調査期間＞

2001年９月４日

＜調査対象面積＞

2.78㎡

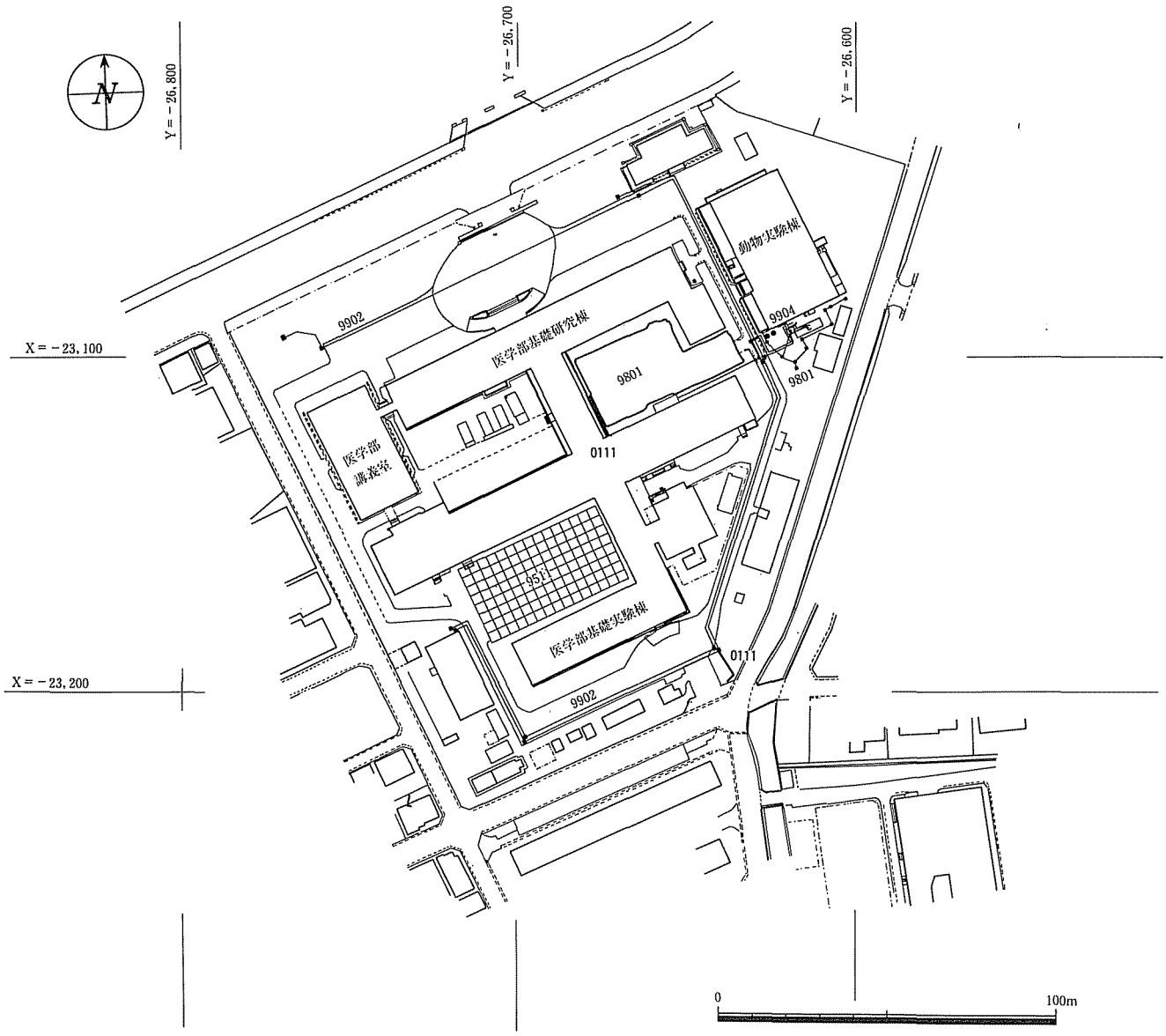
＜調査員＞

大坪志子．

＜調査概要・結果＞

エイズ学・動物資源開発研究センター横と医学部南門付近で立会い調査を行った．エイズ学・動物資源開発研究センター横では建物の根切り部分で既に掘削されている場所で，遺物包含層・遺構面は確認されなかった．また，南門付近でも予定の深さの約70cm まで掘削したが現代埋土で遺物包含層・遺構面は確認されなかった．

図29　本荘南地区における調査地点配置図（1/2000）



Ⅲ―5　京町地区　（図30参照）

1. 京町団地高圧ケーブル改修工事に伴う立会調査（0103）

＜調査期間＞

2001年5月14日

＜調査対象面積＞

59.5㎡

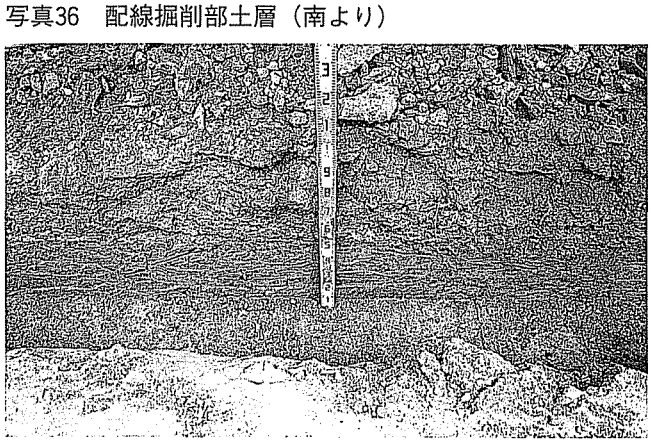
＜調査員＞

小畑弘己.

＜調査概要・結果＞

附属小学校の東門から西へ85mほど延びる高圧ケーブルの改修工事に伴う立会調査である．掘削深度は地表より70cm余りであり，すでにこの地域は赤褐色のローム土まで削平されていたため，遺構・遺物は検出できなかった.

写真36　配線掘削部土層（南より）



2. 京町団地正門取設工事に伴う立会調査（0105）

＜調査期間＞

2001年７月13日

＜調査対象面積＞

7.12㎡

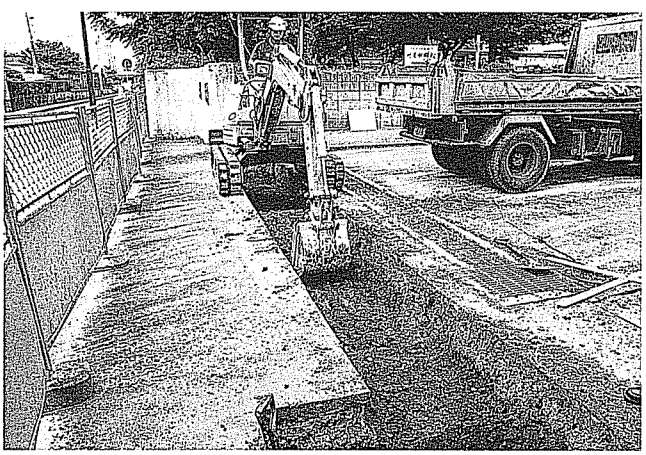
＜調査員＞

大坪志子.

＜調査概要・結果＞

附属中学校正門に門扉を取設する工事に伴い，立会調査を行った．引き戸式の門扉で，レール敷設部分の掘削を行った．約30cmで遺構面を確認したが，既に削平されており遺構は検出されなかった．

写真37　掘削風景（東より）



3. 京町団地キャンパスネットワークその他工事に伴う立会調査（0108）

＜調査期間＞

2001年８月１日・８月13日

＜調査対象面積＞

25㎡

＜調査員＞

小畑弘己.

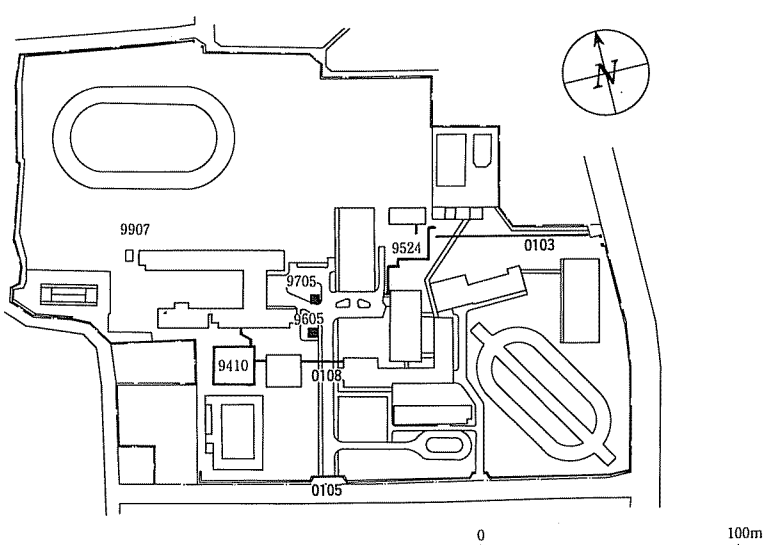
＜調査概要・結果＞

附属小学校校舎Ａ棟と実践研究指導センター・コンピュータ棟・附属中学校校舎を繋ぐ工事である．コンピュータ棟の建設に先立ち実施した発掘調査（9405）において，地表下１m余りで近世～弥生時代の遺構が検出されている．今回の掘削深度は地表下70cmであった．

工事工程に合わせ，5地点の掘削に立ち会ったが，附属小学校校舎Ａ棟と実践研究センター棟の間の道路西側部分において，遺物包含層と思われる暗褐色土を検出した．その中から数点の土師器片が検出された．それ以上の掘削はないため，包含層の調査は実施していない．

その他の地点ではいずれも掘削深度まで現代の埋土であり，遺構・遺物包含層に影響はなかった．

図30　京町地区における調査地点配置図（1/3000）



Ⅲ—6　九品寺地区　（図31参照）

1. 南地区医療技術短期大学キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0113）

＜調査期間＞

2001年９月14日・10月１日

＜調査対象面積＞

105㎡

＜調査員＞

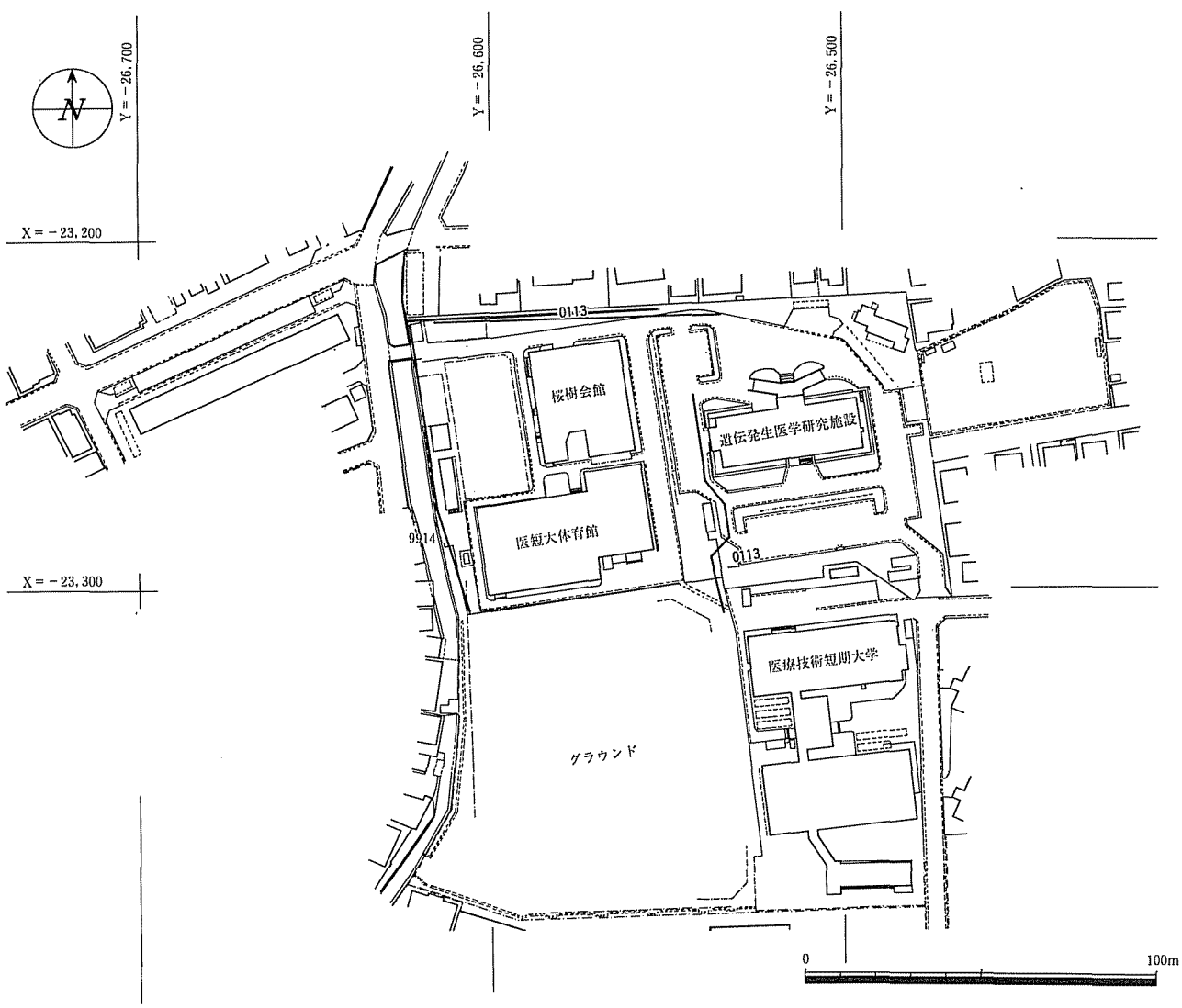
小畑弘己.

＜調査概要・結果＞

医療技術短期大学西門入り口付近から楷樹会館前を経て遺伝発生医学研究施設，そして医療技術短期大学部棟を結ぶ幅50cm，深さ70cm，総延長105ｍの掘削範囲である.

楷樹会館前では人孔部分を観察したが，地表下90～100cmで旧水田土壌らしき粘質土層および砂層が検出された．遺物の出土はなかった．遺伝発生医学研究施設と医療技術短期大学部棟の間は地表下30～70cmで暗褐色のシルト質土層が，その下部は地山層が認められたが，遺物・遺構は検出していない.

図31　九品寺地区における調査地点配置図（1/2000）



Ⅲ—7　薬学部地区　（図32参照）

1. 大江団地薬学部共同実験棟改修工事に伴う立会調査（0107）

＜調査期間＞

2001年7月31日

＜調査対象面積＞

97.84㎡

＜調査員＞

小畑弘己.

＜調査概要・結果＞

薬学部敷地内の北西部において実施された共同実験棟の改修工事に伴う立会調査である．建物中庭の空調機設置2ヶ所および周囲の配管・配線，それと南側建物との間の電気配管のための掘削が実施された．空調機の基礎および建物周囲の配管・配線の掘削はその深度が浅いことや旧掘り方の再掘削であるため，南側建物との電気配管の掘削部のみ立ち会った．配管が横断する部分で地表下80cmで古代の包含層と思われる黒褐色土を確認したが，撹乱などでわずかに残っているにすぎなかった．遺物は発見できなかった．掘削深度は地表下1.2mまでである．

2. 薬学部キャンパス情報ネットワークその他工事に伴う立会調査（0110）

＜調査期間＞

2001年8月27日

＜調査対象面積＞

20㎡

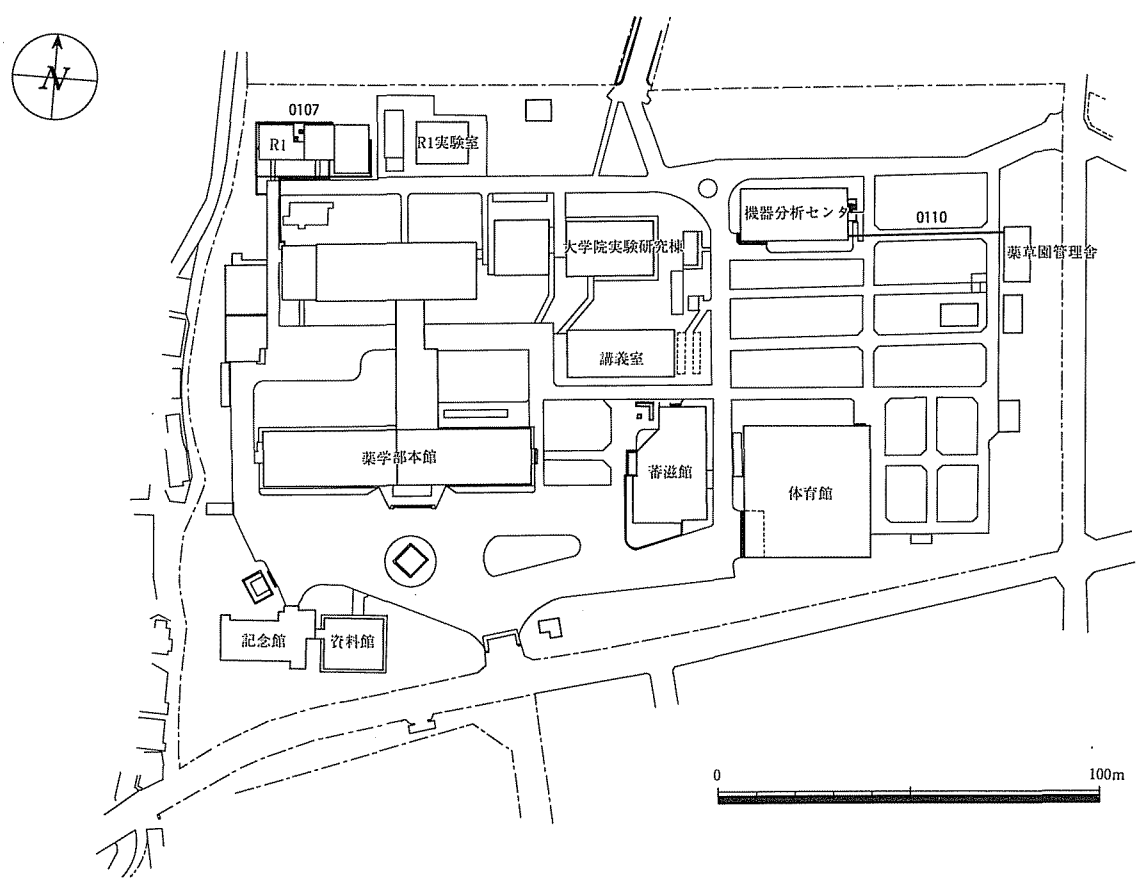
＜調査員＞

小畑弘己.

＜調査概要・結果＞

薬学部敷地の東北部の機器分析センターと薬草園管理舎を結ぶ幅50cm，深さ70cm，長さ40mの掘削範囲である．両建物の外部に設置される人孔部分を立会調査した．その結果，機器分析センター横の人孔1では，地表下50cmまで埋土で，その下は1.15mまで，褐色土層（厚さ15cm），灰褐色土層（厚さ20cm），赤褐色土層（厚さ30cm）が堆積し，その下部は黄褐色の地山層が認められたが，遺物・遺構などは認められなかった．薬草園管理舎横の人孔2は，地表下1mまで撹乱されていた．

図32　薬学部地区における調査地点配置図（1/2000）



跋　文

熊本大学埋蔵文化財調査室が創設されて今年で８年目になった。自然科学系の大型建物群の建設計画はほぼ完遂に近づいてきたが、調査件数は別表のように依然として多く、とりわけ調査年報作成中に発掘が重なり、調査担当者は土日祭日の夜遅くまで仕事に追われる状況になったことは、調査室長として心苦しいばかりである。

今年度の調査成果は本文に譲るとして、医学部と病院がある本荘地区は、白川の自然堤防背後の沖積台地上にあり、弥生時代に環濠集落が形成されて以降、平安時代まで集落が継続して営まれていたことが判明したことは大きな意義を有していると言えよう。とりわけ古墳時代初期に大型建物群を含む遺構群が発見されてことは熊本市内では最初のことであり、今後の調査によりその実態が明らかにされることが期待できる。

埋蔵文化財調査室ができて８年になり、全学的に埋蔵文化財に関する意識がほぼ共有できたと考えていたところであるが、本荘地区での「廃棄物」問題では解決までに約１ヶ月半を要したり、理学部や学生部では無届の工事が行われたりなど、届出の徹底周知と事態に対する即応的な体制の強化が強く求められるのである。全学的な組織見なおし論の中で、委員長や埋蔵文化財調査室の反対にも拘わらず、埋蔵文化財調査委員会委員は機関代表から地区代表に委員会規模が縮小されたが、これなども、機動性を重視するあまりに、法律に対する意識低下のなせることであろう。来年度からは県の教育委員会が中心となって埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を行うこと、緊急調査に対しても第三者による検証を必要とすることなどが、文化庁により検討されている状況下では、埋蔵文化財調査委員会を一層強化する必要があることは言うまでもないことである。

自然科学系の再開発に伴う工事計画は終わりに近づきつつあっても、文系地区は未だ計画段階であること、熊本大学のキャンパスはすべて埋蔵文化財包蔵地であり、例え小規模な工事であっても、工事に伴う発掘調査は依然として法的に必須の事柄であることを良く理解していただきたい。

埋蔵文化財調査室長
甲元眞之

Summary

In 1985, Kumamoto University planned reconstruction of campus. But it was known that some of campus is designated as buried cultural assets zone. In the fiscal year 1994, Kumamoto University formed the Archaeological investigation committee and the Archaeological Operation Office in haste, and has been excavating the campus sites when the superannuated school buildings were rebuilt since then. We have two main campus sites at another areas. The one is the Kurokami area where is constituted of faculty of science and faculty of Engineering (south area), faculty of Education, faculty of Laws, and faculty of Letters (north area), and locates in Kurokamimachi site. The site is located at the foot of Mt. Tatuta (above 151.6m) on a low terrace (above sea level 18～25m) formed by the Shirakawa River. The site are regarded as an ancient station "Kokai". The other one is the Honjo area where is constituted of School of medicine, college of Medical Science (south area), and Kumamoto University hospital (north area), and belong to Honjo site. The site located on a low terrace (above sea level 12～13m) formed by Shirakawa River, similar to Kuro-kamimachi site. It is 2km from Kurokamimachi site to Honjo site in a straight line. In the circumstance of Honjo site, there are large ancient settlement sites like Oe site and Shinyashiki site.

The number of investigations in the current year is the following: 4 excavations, 18 presence investigations and 1trial excavation. The main results are the following.

At 0101 excavation spot in the Honjo site, we excavated the site before the construction of research center belong to School of Medicine and the excavated area was about 1733.75 square meters. We discovered fields and pit burials of modern period, dwellings of historic period, dwellings and ditches of Kofun period, and from which pottery and iron implements.

At 0102 excavation spot in the Kurokami site, structural remains and layer containing cultural remains had been destroyed already, but we discovered some pieces of pottery belonging to Earliest stage of Jomon period. And we got an important information about the lay of the land in ancient time and structural remains.

At 0104 excavation spot in the Honjo site, we excavated the site before the construction of C. C. Box. The excavated area is about 1023.8 square meters. At this spot, we discovered a ditch of Yayoi period, dwellings and ditches of Kofun period, dwellings and ditches and a well of historic period. There were pottery of final stage of Jomon period, pottery and iron implements and bronze implements of Kofun and historic period. At this investigation, we got an important result that we discovered structural remains and relics of Yayoi age for the first time which are oldest one around the site.

At 0119 excavation spot, we discovered the settlement that is same one at 0104 spot, and discovered older pottery in ditch that we discovered at 0104spot.

At four excavations in current year, we got splendid results as above. But we get new facts at every investigation, there are many ambiguous points about a scale and character of the site.

So we will do best to make it obvious the whole aspect of these sites from now on, too.

구마모토 대학교는 건물이 낡아서 1985 년 부터 새로 지울 계획을 세우고 있었는데, 대학교가 있는 구내지역이 유적 포함지로 지정되어있다는 사실을 알게 되었다. 그 때문에 재건설을 하기 전에 매장문화재의 발굴조사를 위해 급거 조사위원회와 조사실을 편성해, 1994 년 부터 조사를 해 왔다.

구내지역의 유적은 크게 두 지구로 나누어진다. 하나는 공학부, 이학부(남지구), 교육학부, 법학부, 문학부(북지구)가 자리한 黑髮(구로카미)캠파스로, 黑髮町유적의 일부이다. 이 유적은 龍田山(다쓰타산) (표고 151. 6 m) 기슭의 저위하안단구(표고 18～25 m) 상에 위치하며, 고대 "뻥養(코카이)"의 역전으로 추정되고 있다. 또 하나는 의학부, 의료단기대학(남지구), 대학부속병원(북지구)이 자리한 本莊(혼저)캠퍼스다. 이 지구는 本庄유적의 일부이며, 黑髮유적과 마찬가지로 白川(시라카와)강의 저위하안단구(표고 12～13 m) 상에 위치한다. 本庄유적은 黑髮유적으로부터 직선거리로 2㎞ 쯤 떨어져 있다. 이 유적과 근접한 곳에 大江(오오에)유적과 新屋敷(신야시키)유적등의 큰 고대 취락 유적이 있다.

2001 년도에 실시한 조사를 살펴보면, 발굴이 4 건, 입회가 18 건, 그리고 시굴조사가 1 건이나 된다. 주요한 발굴조사 결과는 다음과 같다.

0101 조사지점은 혼조지구에 속하고 있으며 이번의 조사는 의학부 연구동의 건설을 계기로 시작했다. 조사 면적은 1733. 75 평이다. 조사 결과 두, 세군데 밭과 묘, 고대의 움집터, 고분시대의 움집터와 도랑이 확인되었다. 유물로는 여러 시대의 토기와철기가 나왔다.

0102 조사지점은 쿠로카미유적에 속하고 있지만 유구나 유물 포함층은 토지조성으로 이미 없어졌다. 그러나 죠몽시대 초기의 토기편이 조금 나왔다. 이 지점은 유적의 서쪽 가장자리에 해당하며 이번의 조사로 유적내의 유구의 분포와 과거의 지형에 대한 중요한 정보를 얻을 수 있었다.

0104 조사지점은 혼조유적에 속하며, 공동구 건설지로 사전조사되었다. 조사된 면적은 모두 1023. 8 평이다. 조사 결과 야요이시대 전기의 도랑, 고분시대 전기 움집터와 도랑, 고대 움집터와 도랑들이 발견되었다. 유물로는 죠몽시대 말기에 속하는 토기편, 고분시대 그리고 고대의 토기와 청동기, 철기들이 나왔다. 이 유적에서 야요이시대 전기에 속하는 유구와 고대 우물이 발견된 것은 처음이며, 유적의 성격에 대한 새로운 자료를 얻게 되었다.

0119 지점은 0104 지점에 이웃한다. 조사결과는 0104 지점에서 밝혀진 취락의 양상과 거의 같지만, 0104 지점에서 확인된 도랑과 연결되는 도랑 속에서 0104 지점에서 나온 것보다 오래된 토기가 나왔다.

이상과 같이, 올해 세개의 발굴조사에서 중요하고 새로운 사실이 많이 밝혀졌지만, 이들 유적의 전체 규모와 성격에 대해서는 아직 불분명한 부분이 많이 남아 있다. 따라서, 이러한 과제를 해결하기 위해 더욱 연구에 힘쓰도록 해야겠다.

付篇　2001年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1．熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則（H13.4.1～H14.1.23）

（設　置）

第１条　熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）に、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任　務）

第２条　委員会は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

（組　織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　文学部、教育学部及び法学部から選出された教授又は助教授　１人

(2)　理学部、工学部及び大学院自然科学研究科から選出された教授又は助教授　１人

(3)　医学部、医学部附属病院及び医療技術短期大学部から選出された教授又は助教授　１人

(4)　薬学部から選出された教授又は助教授　１人

(5)　事務局長

(6)　埋蔵文化財調査室長

(7)　その他委員会が必要と認めた者

２　前項第１号から第４号まで及び第７号の委員は、学長が委嘱する。

３　第１項第１号から第４号まで及び第７号の委員の任期は２年とし、再任されることができる。

４　第１項第１号から第４号まで及び第７号の委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第４条　委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

２　委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

３　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（議　事）

第５条　委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決をすることができない。

２　委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（意見の聴取）

第６条　委員長は、必要があるときは、委員以外の者を出席させ意見を聴くことができる。

（調査室）

第７条　委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

２　調査室の業務、組織その他必要な事項については、別に定める。

（事　務）

第８条　委員会の事務は、施設部企画課において処理する。

（雑　則）

第９条　この規定が定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附　則

この規則は、平成13年４月１日から施行する。

2．熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則（H14.1.24～）

（設　置）

第１条　熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）に、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任　務）

第２条　委員会は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

（組　織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　各学部、大学院自然科学研究科、医学部附属病院及び医療技術短期大学部から選出された教授又は助教授　各１人

(2)　事務局長

(3)　埋蔵文化財調査室長

(4)　その他委員会が必要と認めた者　若干人

5　前項第１号及び第４号の委員は、学長が委嘱する。

6　第１項第１号及び第４号の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

7　第１項第１号及び第４号の委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第４条　委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

2　委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

3　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（議　事）

第５条　委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決をすることができない。

2　委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（意見の聴取）

第６条　委員長は、必要があるときは、委員以外の者を出席させ意見を聴くことができる。

（調査室）

第７条　委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

2　調査室の業務、組織その他必要な事項については、別に定める。

（事　務）

第８条　委員会の事務は、施設部企画課において処理する。

（雑　則）

第９条　この規定が定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附　則

1　この規則は、平成14年１月24日から施行する。

2　この規則施行の際、現に改正前の規則第３条第１項第１号から第４号まで及び第７号の規定により選出されている委員は、改正後の規則第３条第１項第１号の規定により選出されたものとみなす。

3　この規則施行後、最初に選出される第３条第１項第４号の委員の任期は、同条第３項の規定にかかわらず、平成15年３月31日までとする。

3．熊本大学埋蔵文化財調査室要項

（趣　旨）

第１条　この要項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則第８条第２項の規定に基づき、熊本大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の業務、組織その他必要な事項について定める。

（業　務）

第２条　調査室は、熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

(1)　実施計画の立案及び実施に関すること。

(2)　出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。

(3)　文化庁等に提出する報告書の作成に関すること。

(4)　その他必要な事項

（組　織）

第３条　調査室に室長を置く。

２　室長は、調査室に関する業務を掌理する。

３　調査室に調査員その他必要な職員を置くことができる。

４　調査員は発掘調査に関する業務を行う。

（室長等の任命）

第４条　室長及び調査員は、本学の教官のうちから学長が任命する。

２　学長は、必要がある場合は、学外の者を調査員に委嘱することができる。

（事　務）

第５条　調査室の事務は、関係学部等の協力を得て、施設部企画課において処理する。

（雑　則）

第６条　この要項に定めるもののほか、調査室の運営に必要な事項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会が定める。

附　則

この要項は、平成12年４月１日から実施する。

4．2001年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1　埋蔵文化財調査室組織（2001年４月１日現在）

＜室　長＞	（併・文学部教授）	甲元　眞之
＜調査員＞	（併・文学部助教授）	小畑　弘己
	（併・文学部助手）	大坪　志子
＜事務補佐員＞		冨永　明子
＜室内作業員＞（2001年10月～2002年３月）		泗水　直子
		溜渕　俊子
		林田　恵子
		早田　咲百合

2　埋蔵文化財調査委員会

（2001年４月１日現在）

委　員	木下　尚子	（文学部教授）	（2000.4.1～2003.3.31）
	安仁屋　勝	（理学部教授）	（2000.4.1～2003.3.31）

小川　　尚	（医学部教授）	（2000.4.1～2003.3.31）
今村　順茂	（薬学部助教授）	（2000.4.1～2003.3.31）
角地　敏弘	（事務局長）	（1998.4.1～）
甲元　眞之	（埋蔵文化財調査室長）	（1994.5.16～）

（2001年6月7日現在：改正前埋蔵文化財調査委員会規則第3条第1項第7号によって委嘱された委員を含む。改正後は同規則第3条によって組織。）

委員長	北野　　隆	（熊本大学工学部教授）	任期（2001.6.7～2003.3.31）
委　員	木下　尚子	（文学部教授）	（2000.4.1～2003.3.31）
	春田　直紀	（教育学部助教授）	（2001.6.7～2003.3.31）
	大澤　博明	（法学部教授）	（2001.6.7～2003.3.31）
	安仁屋　勝	（理学部教授）	（2000.4.1～2003.3.31）
	小川　　尚	（医学部教授）	（2000.4.1～2003.3.31）
	今村　順茂	（薬学部助教授）	（2000.4.1～2003.3.31）
	土亀　直俊	（附属病院助教授）	（2001.6.7～2003.3.31）
	蔦川　忠久	（医技短大部教授）	（2001.6.7～2003.3.31）
	伊東　重剛	（大学院自然科学研究科助教授）	（2001.6.7～2003.3.31）
	角地　敏弘	（事務局長）	（1998.4.1～2001.6.30）
	長木　正治	（事務局長）	（2001.7.1～）
	甲元　眞之	（埋蔵文化財調査室長）	（1994.5.16～）

審議事項

2001年5月21日	埋蔵文化財調査委員会の見直しについて
2001年6月18日	委員長の選出
	2000年度の埋蔵文化財発掘調査結果について
	2001年度教官定員流用の申請について
	2001年度共通経費要求書について
	2001年度の埋蔵文化財発掘調査予定（案）について
	その他
2002年3月18日	埋蔵文化財調査委員会規則の改正について（報告）
	2001年度の埋蔵文化財発掘調査結果について
	2002年度教官定員流用の申請について
	2002年度共通経費要求（案）について
	2002年度の埋蔵文化財発掘調査予定（案）について

報告書抄録

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぽう 8
書名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報 8
副書名	
巻次	
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報
シリーズ号	8
編著者名	甲元眞之・小畑弘己・大坪志子・冨永明子
編集機関	熊本大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2-39-1 TEL. 096-342-3832 FAX. 096-342-3832
発行年月日	2002年3月31日

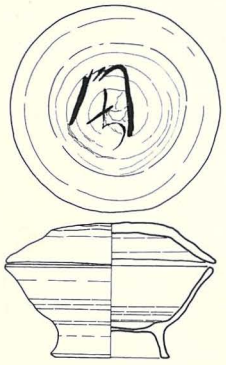
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほんじょう 本庄遺跡 (0101地点)	くまもと 熊本県 熊本市 本荘	43 201		32° 47' 75"	130° 42' 47"	20010409 ～ 20010703	1,733.75㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
くろかみ 黒髪町遺跡 (0102地点)	熊本県 熊本市 黒髪	43 201		32° 48' 36"	130° 43' 42"	20010709 ～ 20010726	418.5㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
ほんじょう 本庄遺跡 (0104地点)	熊本県 熊本市 本荘	43 201		32° 47' 50"	130° 42' 40"	20010704 ～ 20011029	1,023.8㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
ほんじょう 本庄遺跡 (0119地点)	熊本県 熊本市 本荘	43 201		32° 47' 55"	130° 42' 40"	20020225 ～ 20020320	205.8㎡	学校敷地内の開発事業に伴う

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本庄遺跡 (0101地点)	散布地 集落址 墓地	古墳・古代・近世	住居址・溝・畑	縄文土器・土師器・須恵器	
黒髪町遺跡 (0102地点)	散布地	縄文	風倒木痕・防空壕	縄文早期・晩期土器	
本庄遺跡 (0104地点)	散布地 集落址	縄文・弥生 古墳・古代	住居址・掘立柱建物・溝・井戸	縄文晩期土器・弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器・青銅器・鉄器・自然遺物	
本庄遺跡 (0119地点)	集落址	弥生・古墳・古代	住居址・掘立柱建物・溝	弥生土器・土師器・須恵器・鉄器	

熊本大学埋蔵文化財調査室年報 8
— 2001年度—

平成14年 3 月25日　印刷
平成14年 3 月31日　発行

編集兼発行者　熊本大学埋蔵文化財調査室
熊本市黒髪 2 －39－ 1
電話（096）342－3832
印刷所　シモダ印刷株式会社



Published by
Archaeological Operation Center
Kumamoto University
Kumamoto, 2002